

上野遺跡 IV

UENO SITE

1994・2

長野県飯山市教育委員会

上野遺跡 IV
UENO SITE

1994・2

長野県飯山市教育委員会

序

飯山市教育委員会

教育長 岩 崎 彌

上野遺跡は飯山盆地のほぼ中央にあり、悠々と流れる千曲川沿いの丘陵に所在しています。昭和63年および平成元年、国道117号線小沼・湯滝バイパスの敷設にともない上野遺跡最初の発掘調査が実施されました。この調査において中世の館跡や旧石器から平安時代の集落跡が確認され、飯山市においても最大規模を誇る遺跡であると判明しました。

平成4年、この上野遺跡内においてバイパスに取り付ける市道を敷設することになり、あらためてこの地区の発掘調査を実施することとなりました。調査においては、飯山北高等学校教諭の高橋桂先生に調査団長を委嘱し、小林・常盤井・田村各調査員並びに地元の作業員の方々のご協力をいただいて実施することができました。ここにその発掘調査の詳細な記録を集録し、後世に記録保存することができましたことに対しあらためて感謝申し上げます。

この報告書が地域の歴史を解明する上で貴重な資料となるとともに、埋蔵文化財保護に対する理解がますます深まることを念願し、序といたします。

平成6年1月

例 言

1. 本書は、長野県飯山市大字常盤3179番地ほか（字外和柳・北原・林下）に所在する上野遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 今回検出された遺跡は、旧石器・縄文・弥生・平安の各時代であるが、中心は平安時代の集落址である。
3. 調査は戸狩工業用団地の取付道路市道7-334号線工事、およびその取り付けに伴う国道117号線バイパス拡幅工事に伴う発掘調査で、飯山市教育委員会が平成4年6月11日から10月2日まで実施した。
4. 上野遺跡は過去に3回の調査報告がなされている（飯山市教育委員会『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告』Ⅰ1989・同Ⅱ1990・同『古代のうへの』1991）ので本報告は上野遺跡Ⅳとして報告する。
5. 発掘調査は以下に掲げる組織で実施した。

教育委員会

教育委員長 福 沢 裕 文（平成5年10月11日 退任）
滝 沢 藤三郎（平成5年10月12日 就任）
教 育 長 岩 崎 彌
教 育 次 長 月 岡 久 幸

調 査 団

団 長 高 橋 桂（市文化財保護審議会議長 飯山北高教諭）
担 当 望 月 静 雄（市教育委員会社会教育係）
調 査 主 任 常 盤 井 智 行
調 査 員 小 林 新 治 田 村 規 城 桃 井 伊 都 子

作業参加者（順不同）

小出まさ子・小出弘子（上野） 梨元智年・鈴木操（大倉崎） 大森信衛・竹内大五郎・北條辰男・小林経雄・樋山巖・石沢悦次・上原みつ枝（戸狩） 樋口栄（温井） 吉越信一郎・吉越まさの（大塚） 山崎満枝（大深） 鷺野吉太郎（関沢） 出沢利雄（柏尾） 石田人士（今井） 宮沢豊（南町） 市村ますみ・達家わかの・村松修司（奈良沢） 清水国治（中条） 土屋久栄（伍位野） 中村登代子（曙町） 木村忠夫（西山） 大平理恵（大学生） 村松博・鈴木聖久・富岡徹（専門学校生） 桃井絵美・嵩峯真由美・田島祐子・小林千恵・江口千香子・樋口多美・富岡豊彦（高校生）

整理参加者

小林みさを（柏尾） 小川ちか子（大深）

事 務 局

今清水豊治（市教委社会教育係長） 樋山二二子

6. 本書の編集は常盤井が主体となり、望月が補作し、高橋が統括した。文責は目次に記した。
7. 本書で使用した方位は真北であり、地区割りは国土座標第8系に準じている。

8. 本書に掲載した土器・陶器は原則として $\frac{3}{4}$ の縮尺である。スクリーントーンは、弥生土器は赤彩を表わし、平安時代の土器は黒色処理および灰釉施釉部分を表わす。また断面の黒塗りは須恵器を、断面アミ目は灰釉陶器を示す。

9. 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略、順不同）。

小池幸夫・春日雅博（県文化課） 中島庄一（中野市教委） 小出大映（長徳寺住職） 大木幸治（平用水） 小林佑幸 鈴木元義 中原英吉 中原道雄 常盤公民館（鈴木昭悟館長） 上野区（小出保夫区長）

10. 発掘調査の出土品は市埋蔵文化財センターで保管している。

上野遺跡Ⅳ

目 次

序	
例言	
第1章 調査経過	1
1 調査に至る経過	望月… 1
2 調査経過	常盤井… 1
A 発掘調査	1
B 調査日誌抄	2
第2章 遺跡の位置と環境	小林… 4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
第3章 遺跡の概要	常盤井… 8
1 上野丘陵の遺跡と過去の調査	8
2 大地区設定と調査方法	8
3 層序	11
第4章 旧石器時代	望月… 23
1 層序と遺物の出土状態	23
A 層序と文化層	23
B 地点分布	24
2 出土遺物	27
第5章 縄文時代	常盤井… 36
1 遺構	36
2 遺物	36
A 遺物出土状態	36
B 土器	36
第6章 弥生時代	桃井… 42
1 遺構	42
A 竪穴住居址	42
B 掘立柱建物址	42
2 遺物	44
A 土器	44
B 石器	46
第7章 平安時代	常盤井… 49
1 遺構	49
A 竪穴住居址	49
B 掘立柱建物址	54
C 土塚墓・木棺墓	54

2	遺物	72
A	竪穴住居址出土土器	72
B	その他の遺構出土土器	75
C	線刻・墨書土器	76
D	鉄製品・ふいご羽口・鉄滓・石製品	76
3	小 結	90
A	平安時代遺構の年代	90
B	石組みカマドについて	90
C	遺跡の性格	91
第8章	まとめ	高橋 97

挿 図 目 次

図1	上野遺跡の位置	5	図28	Y 9号住居址・S B 10	43
図2	周辺遺跡分布図	7	図29	弥生土器実測図 1	45
図3	調査地周辺の地形	9・10	図30	弥生土器実測図 2	47
図4	上野遺跡大地区割	11	図31	弥生時代の石器	48
図5	主要遺構分布図	12	図32	H13号住居址	55
図6	遺構実測図 1	13	図33	H14号住居址	56
図7	遺構実測図 2	14	図34	H15・16号住居址	57
図8	遺構実測図 3	15	図35	H17・18号住居址	58
図9	遺構実測図 4	16	図36	H19・20号住居址	59
図10	遺構実測図 5	17	図37	H22号住居址	60
図11	遺構実測図 6	18	図38	H22号住居址	61
図12	遺構実測図 7	19	図39	H21号住居址	62
図13	遺構実測図 8	20	図40	H23号住居址	63
図14	遺構実測図 9	21	図41	H24・25号住居址	64
図15	遺構実測図 10	22	図42	H26・27号住居址	65
図16	地質柱状図	23	図43	H28・29号住居址	66
図17	第6・7地点遺物分布図	25	図44	H30・31号住居址	67
図18	第9地点遺物分布図	26	図45	土塚墓・木棺墓	68
図19	4・5礫群分布図	27	図46	掘立柱建物	69
図20	3号礫群分布図	28	図47	平安時代の土器 1	77
図21	旧石器実測図 1	31	図48	平安時代の土器 2	78
図22	旧石器実測図 2	32	図49	平安時代の土器 3	79
図23	旧石器実測図 3	33	図50	平安時代の土器 4	80
図24	おとし穴	37	図51	平安時代の土器 5	81
図25	縄文土器分布図	38	図52	平安時代の土器 6	82
図26	縄文土器実測図 1	40	図53	平安時代の土器 7	83
図27	縄文土器実測図 2	41	図54	平安時代の土器 8	84

図55	平安時代の土器	9	85	図58	墨書土器、線刻土器、ふいご羽口、鉄製品	
図56	平安時代の土器	10	86		鉄滓、石製品	88
図57	平安時代の土器	11	87	図59	墨書土器、転用硯、ふいご羽口、鉄滓分布図	89

表 目 次

表1	旧石器計測表	35
表2	弥生時代竪穴住居址・掘立柱建物址柱穴一覧表	42
表3	平安時代竪穴住居址・掘立柱建物址柱穴一覧表	69
表4	平安時代遺構出土土器一覧表	91

PLATE 目 次

PL 1	遺跡遠望 117号バイパス拡幅部の調査 29(I)・24(II)区
PL 2	取り付け道路 28(III)・29(IV)区の調査 取り付け道路 18(V)区の調査
PL 3	取り付け道路 8区(B地点)の調査 遺跡見学会
PL 4	3号礫群 4号礫群 5号礫群
PL 5	旧石器第7地点 旧石器第9地点 旧石器第9地点中央部
PL 6	SK25 SK33 SK42 SK46・47・48
PL 7	Y9号住居址遺物出土状態 Y9号住居址完掘状態 SB10
PL 8	H13号住居址 H13号住居址カマド焚き口遺物出土状態 H13号住居址カマド
PL 9	H14号住居址 H15号住居址 H16号住居址
PL 10	H17号住居址 H17号住居址カマド遺物出土状態 H17号住居址カマド

- P L 11 H 18号住居址
H 19・20号住居址 H 19号住居址カマド
H 21号住居址 H 21号住居址カマド
- P L 12 H 22号住居址上面輪郭
H 22号住居址完掘状態
H 22号住居址ビット 1
- P L 13 H 23号住居址
H 23号住居址ビット 1
H 24号住居址
- P L 14 H 25号住居址 同ビット 1
H 26号住居址
H 27号住居址
- P L 15 H 28号住居址
H 29号住居址
H 30号住居址上面輪郭
- P L 16 H 30号住居址 同カマド
S K 32
S K 49
- P L 17 旧石器
- P L 18 縄文時代早・前期の土器
縄文時代前・中・後・晩期の土器
- P L 19 Y 9 号住居址出土土器
- P L 20 S B 10出土土器
弥生時代の石器
- P L 21 H 13号住居址出土土器
H 16号住居址出土土器
H 17号住居址出土土器
- P L 22 H 18号住居址出土土器
H 19号住居址出土土器
H 20号住居址出土土器
H 21号住居址出土土器
H 22号住居址出土土器
- P L 23 H 22号住居址出土土器
H 23号住居址出土土器
- P L 24 H 25号住居址出土土器
H 27号住居址出土土器
H 30号住居址出土土器
S K 32出土土器
S K 49出土土器
線刻・墨書土器
- P L 25 ふいご羽口・鉄滓
鉄製品
石製品

第1章 調査経過

1 調査に至る経過

平成3年12月、飯山市（商工観光課担当）より教育長あてに、平成4年度に計画した戸狩工業用団地の取付道路工事にともなう埋蔵文化財調査の依頼があった。飯山市教育委員会では、昭和63年から始まった国道117号線バイパス工事に伴う調査によって、上野・大倉崎丘陵の全体に遺跡が存在することが確認されており、加えてバイパス開通にともない飯山市戸狩地区に接続する取付道路が計画されることも承知していた。したがって、遺跡内を通過することはやむを得ない事としていたが、なるべく遺跡内の通過面積を最小限にするよう要望していた。道路は既存の市道をほぼ通り、全長350m、幅員10mで計画されることになった。担当課の商工観光課との協議の中で、発掘調査は対象面積4,000㎡のうち2,000㎡を調査対象とした。道路部分は約200mで、そのほか取付に伴うバイパスの拡幅部分と遺跡北側の確認が必要な地区が含まれることになった。

以下に事務経過を綴る。

平成4年3月21日 飯山市長名で埋蔵文化財発掘の通知が提出される。

4月27日 県教育委員会より飯山市長あて、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があり、事前に市教育委員会により発掘調査を実施するとの内容であった。

5月10日 市教育委員会より文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出する。

6月11日 発掘調査開始。

10月2日 発掘調査終了。

10月6日 飯山警察署へ埋蔵文化財の拾得についての届け書提出。
県教育長あて発掘調査終了届を提出。

2 調査経過

A 発掘調査

今回の発掘調査対象地は117号線バイパス拡幅部分と取り付け道路部分で、バイパス拡幅部分を初めにいき、続いて取り付け道路部分の発掘を行った。発掘は平成4年6月11日から同年10月2日まで約4か月間行ったが、バイパス部分と取り付け道路部分の発掘の間が約2週間あいた。

発掘面積は道路拡幅部分が約500㎡、取り付け道路部分が約3000㎡、取り付け道路の北端部分が約200㎡である。

取り付け道路部分の北端部はこれまで上野B遺跡と呼んでいた所だが、今回上野遺跡に含めた。

今回検出された主な遺構・遺物は以下のとおりである。

旧石器時代 石器群5か所 礫群3か所

縄文時代 おとし穴18基 早・前・中・後・晩期の各土器少量ずつ

弥生時代 中期竪穴住居址1棟 同掘立柱建物址1棟 中・後期土器・石器

平安時代 竪穴住居址19棟 掘立柱建物址2棟 土壇墓1基 木棺墓1基 土器・陶器・鉄製品・

石製丸柄・鍛冶関係品 他

整理作業は市埋蔵文化財センター（旧第三中学校寄宿舎）で行った。遺物の接合・復元等は10月より行ったが、遺物の洗浄、ネーミングは発掘と併行して行った。

なお全体図の作成は小林が、各遺構図は常盤井が主としてあたり、遺物の接合・復元、写真撮影は主として田村が担当し、遺物の実測・トレースは桃井が主として行っている。旧石器は望月が担当した。

B 調査日誌抄

平成4（1992）年

5月16日(土)～6月10日(休) 現地協議、作業員の募集、コンテナハウス設置、重機による表土はぎ（福沢建設）、基準杭打ち（写真測図研究所）、ベルコン用配電（高沢ラジオ店）、器材の搬入などの調査準備。

6月11日(休) 調査開始式 バイパス拡張部を南からジョレンかけ精査開始、重機による表土はぎ続行。

6月12日(金) ジョレンかけ精査続行、15・16区で平安時代の土器出土し始める。重機表土はぎ完了。

6月15日(月)～19日(金) 拡幅部南半の精査、S K 24分割掘り下げ、遺物出土状態の写真撮影を続行。18区で竪穴住居址（H13住）検出、調査地西外へ延びているので地主の許可をえてトレンチを西に拡張する。16日地元向け発掘だより「かわら版上野」を発行、上野区・小学校等関係機関へ配布。

6月22日(月)～27日(土) 拡幅部北部24区（Ⅱ区）のジョレンかけに入る。H13号住居址掘り下げ、石組みのカマド検出、平板測量。おとし穴S K 25掘り下げ縄文土器出土、遺構全体図を40分の1平板図で作成。I-11区でH14号住居址検出。27日常盤小6年生遺跡見学（宮沢先生引率）。

6月29日(月) H14号住居址完掘。数か所で地山を掘り下げ旧石器の確認を行う。平板測量、道具のかたづけを行いバイパス拡幅部分の調査を終了。商工観光課と取り付け道路部分の調査日程について打合せ。7月8日以降になるとのこと。

7月7日(火) 上野区役員と市道の掘削と排土の処理について現地協議、上野地区北の穴へ排土することとするがそれについては市、平用水組合、福沢建設の三者で事前協議をもつこととする。

7月9日(休) 排土処理について三者現地協議。発掘排土を埋める前に赤土で底をならすこと等を打ち合わせる。

7月13日(月) 取り付け道路部分樹木伐採開始。

7月15日(休) 樹木伐採と併行して重機による表土はぎ開始。

7月16日(休) 取り付け道路部分発掘開始。南からジョレンかけを始める。

7月16日(休)～18日(土) 表土はぎ続行、ジョレンかけ続行。縄文晩期土器・弥生土器・平安時代の土器続々と出土。H13号住居址カマド10分の1実測図作成。17日戸狩小歴史クラブ16名発掘体験学習（若上先生引率）。

7月20日(月)～24日(金) 20日表土はぎ終了。Ⅲ区（28区）ジョレンかけ精査。H15・16号住居址検出、掘り下げ。おとし穴S K 27～29検出、掘り下げ。24日戸狩小歴史クラブ発掘見学（若上先生引率）。

7月27日(月)～31日(金) Ⅳ区（23区）ジョレンかけ精査に入る。27日基準杭打ち（写真測図）、28区全景写真撮影、平板測量。H17号住居址検出。

8月3日(月)～7日(金) Ⅳ区ジョレンかけ続行。黒色土が厚く数回に分けて行う。H17号住居址掘り下げ続行、カマド内で土器多量に出土。

8月8日(土) 調査続行。午後常盤公民館と共催で現地見学会を開催。途中夕立があったが決行。約40名参加、高橋団長の説明、遺跡の見学を行う。

8月10日(月)～11日(火) Ⅲ区全景写真撮影。Ⅳ区ジョレンかけ続行。P・Q-6区の遺物集集中地点は竪穴住居址の可能性が出る。H13・15・16号住居址カマド石組みとり上げ。Ⅲ区O・P-19区で礫群を検出。

11日夕方現地コンテナハウスで上野区役員・調査団で中間反省会。

8月12日(水)～16日(日) 盆休み

8月17日(月)～21日(金) IV区ジョレンかけ続行。H17号住居址カマド実測、遺物とり上げ、H18号住居址検出。III区完掘状態平板測量。

8月24日(月)～28日(金) IV区ジョレンかけ続行。H18号住居址掘り下げ。H19・20・21号住居址掘り下げ開始。IV区南1～4区完掘状態平板測量。28日上野集落北端の上野B遺跡(8区)重機による表土はぎ(大島重機)。

8月31日(月)・9月2日(水) B遺跡ジョレンかけ精査、遺構掘り下げ、写真撮影、平板測量を行い3日で調査終了。低地にもかかわらず平安時代の住居址2棟を検出。

9月3日(木)・4日(金) IV区ジョレンかけ続行。H19・20号住居址掘り下げ続行。H21号住居址カマド実測。

9月7日(月)～11日(金) IV区ジョレンかけ続行。H19・20号住居址完掘、写真撮影。木棺墓SK32掘り下げ、灰釉椀1個出土。おとし穴SK33掘り下げ。10日午後台風17号の雨で作業中止。5～7区平板測量。11日「かわら版上野」No.11配布。

9月14日(月)～18日(金) IV区ジョレンかけ続行。大型竪穴住居H22号住居址検出、掘り下げ。H19・20・21号住居址平板測量。22号住居址西でH23号住居址検出掘り下げ。18日ベルコン4台返却。

9月18日(金) 常盤公民館と共催で午後2時より現地見学会開催。体験学習を目的にH21号住居址を復元し住居址カマドでトン汁を煮る。遺跡見学および高橋団長の説明。約120名参加。

9月21日(月)～25日(金) H22・23号住居址掘り下げ。住居址内ヒットより完形土器出土。IV区ジョレンかけ。平板測量。IV区15区以北V区にかけて重機による表土はぎ(21・22日)。22日市議会文教委員視察。常盤小5年生見学(松本先生引率)。V区ジョレンかけ。おとし穴、竪穴住居址Y9号・H24～28号住居址検出、掘り下げ。IV区P-15、P-16礎群検出、掘り下げ、実測。

9月28日(月)～10月2日(金) V区遺構掘り下げ、実測。IV区実測、V区でも3か所の旧石器石器群検出。土坑墓SK49検出掘り下げ。国土座標による基準杭を来年度調査地へもってゆく。2日Q-9旧石器群の写真撮影、実測、とり上げを終え、器材の撤去を行い現地作業を終了。地元上野区と調査団で終了式を上野公民館で行う。「かわら版上野」No.12発行。



遺跡見学会用復元住居の前で

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

上野遺跡は、長野県飯山市大字常盤字外和柳ほかに所在する(図1)。

甲信国境に源を発する千曲川が信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると千曲川は、信越国境の峡谷(通称市川谷)を下刻曲流しつつ新潟県津南町に至り、ここで信濃川とその名を改め、いわゆる津南段丘群を形成してやがて日本海に注ぐ。

飯山盆地は南北に16km、東西6kmの紡錘形を呈し、盆地底の標高は300~320mを計る。西縁は、黒岩山(938.6m)、鍋倉山(1288.6m)等比較的低い開田山地によって画されている。ここは越後へ通ずるいくつかの峠道が、ブナ・雑木林の中に存在している。一方東縁は、毛無山(1640.98m)等三國山脈の支脈によって、また断層構造線の横走によって急峻な山地で画されている。平地は、盆地のほぼ中央を流れる千曲川によって東西に二分される。西側は、飯山市街地より戸狩地区に至る長さ7kmに及ぶ長峰丘陵を介在させて、西側に外横平、東側に常盤平が広がり、当地方最大の穀倉地帯となっている。東側は、その南半にかつての千曲川氾濫原である木島の平が広がるが、千曲川が東縁に近接するにしたがって段丘・丘陵などの微高地が開折谷を隔てて連続的に連なるという地貌を呈している。この遺跡の所在する上野丘陵は、常盤平の東端に位置し南北に約0.8km、東西0.3kmの細長い残丘状となっている。西の常盤平へはなだらかに傾斜し、東側は千曲川の攻撃斜面で断崖となっている。

上野遺跡は、大倉崎遺跡の北側に位置し、丘陵全体が遺跡と考えられる。丘陵西側の傾斜地に上野区の集落が点在し、東側頂部一帯は雑木林が繁茂し、樹高30mもあろうかと思われるナラの大木が林立し、古くから上野の森として親しまれ、緑豊かな中に位置している。

また、平坦地には見られないと思われるブナの大樹が見られるとともに、山ゆり・リンドウも植生し、所々に湧水もあって人々の生活に潤いを与えている丘陵であり、なお、山菜もとれる丘陵でもある。

しかしながら、昨年国道117号線バイパスの開通と本年の工場団地の取付道路で緑と遺跡が半減したところでもある。誠に残念と言うほかはなく、今後に於て景観保持に併せ、森と遺跡の保全とその利活用が望まれる。

また、この森の北端にあった大倉崎館跡を南北に分断して架けられた常盤大橋の西岸直下で、現在護岸工事が行なわれている所が、千曲川通船時代の上野船着場である。大倉崎館跡も上野区側の橋のためとて、日毎にふえる車のドライバーに、分断された形でその姿を見せている。

2 歴史的環境

遺跡の所在する上野地区周辺には、多くの遺跡が存在している。分布については、必ずしも明確に把握しているわけではないが、以下明らかな部分について時代別に述べていくことにする。(図2)

(1) 旧石器時代

この地域は、飯山地方で旧石器の遺跡が濃密に分布することが認められているところである。発掘調査がなされた遺跡は、太子林(15)、関沢(14)がある。

また、昭和63年調査の日焼(18)では当該期の良好な石器群が検出されている。これらの遺跡は石器出土が認められている大倉崎(6)、瀬附(7)の両遺跡を含め千曲川河岸の段丘上に立地しており、千曲川との密接な関係を想像するに難くない。なお、常盤平を狭んで西の長峰丘陵上の大塚(31)、尾崎(38)でもこの

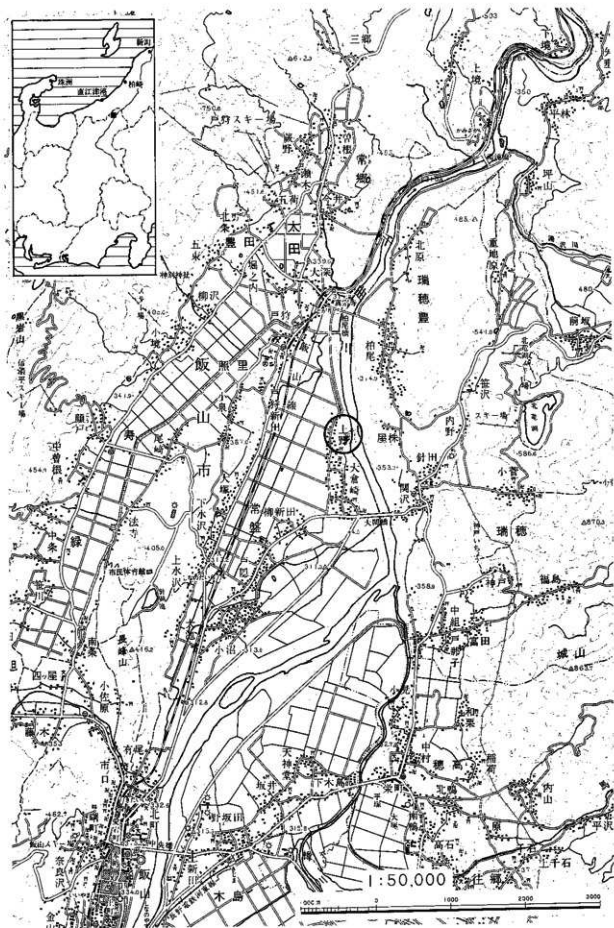


図1 上野遺跡の位置

時代の石器、刃器が認められている。

(2) 縄文時代

飯山地方で最も古い遺跡は、北竜湖遺跡で草創期・早期に位置づけられる。このほか小佐原遺跡(草創期)等がある。

前期の遺跡では、多量の遺物が出土している大倉崎(6)遺跡をはじめ、少量の遺物が認められている北竜湖、瀬附(7)、宮中(11)、太子林(15)、岡峰(24)遺跡がある。

中期の遺跡には、上ノ原遺跡(22)が挙げられる。調査は行われていないが、舌状台地の縁辺からは蓮華文・格子文を特徴とする北陸系の土器片が多量に採集されている。このほか宮中では古くから土器片が採集され、また柳沢A(41)遺跡が所在する関田山地の東麓にはこの時代の遺跡が点在している。

後期では宮中遺跡(11)が重要である。昭和55年調査では、わずか100㎡の範囲で23基の石棺墓が検出されている。また、顔戸南木ノ下遺跡からは、ほぼ完形の後期の浅鉢などが出土している。

また、晩期では外椽平に柳沢A(41)をはじめ顔戸南木ノ下、釜淵遺跡などがある。

(3) 弥生時代

この地方においては、秋津の田草川尻遺跡・長峰丘陵上の諸遺跡(24~40)が著名である。特に長峰丘陵上の小泉遺跡(35)では、昭和63年、平成2・3年の発掘調査により弥生中・後期の大集落址や、中期の木棺墓群などが検出されている。この上野遺跡においても住居址を確認できたことから、外椽平・常盤平が水田として活用されていたものと推定される。

なお、照丘遺跡からは、弥生中期栗林式土器・建築用材と推定される木製品等が出土している。

(4) 古墳時代

現在、上野古墳(4)をはじめ、向峰古墳群(16)・長峰丘陵上の古墳群(27・28・32)等が確認されている。上野遺跡では北陸系の土器を伴った前期の竪穴住居址と方形周溝墓が検出されている。

(5) 古代・中世(奈良時代以降)

ここ飯山においては、奈良時代に比定できる遺跡は発見されていない。平安時代の遺跡に尾崎(8)屋棟大倉崎II(5)があげられる。この上野遺跡でも集落址・墓址が確認されている。また、外椽平にも釜淵、桜沢(44)遺跡など多くの遺跡が点在している。

平安時代末から中世にかけては判然としない部分が多い。城館跡については、対岸の穂穂地区に多く見られるとともに関田山地東麓にも点在している。その中であって千曲川にのぞむ位置にある大倉崎館跡(3)は注目される場所である。

参考文献

- 飯山市教育委員会 1986『飯山の遺跡』
- 飯山市教育委員会 1990『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告書II』
- 常盤村史刊行委員会 1986『村史ときわ』
- 飯山市・飯山市誌編纂委員会 1991『飯山市誌自然環境編』

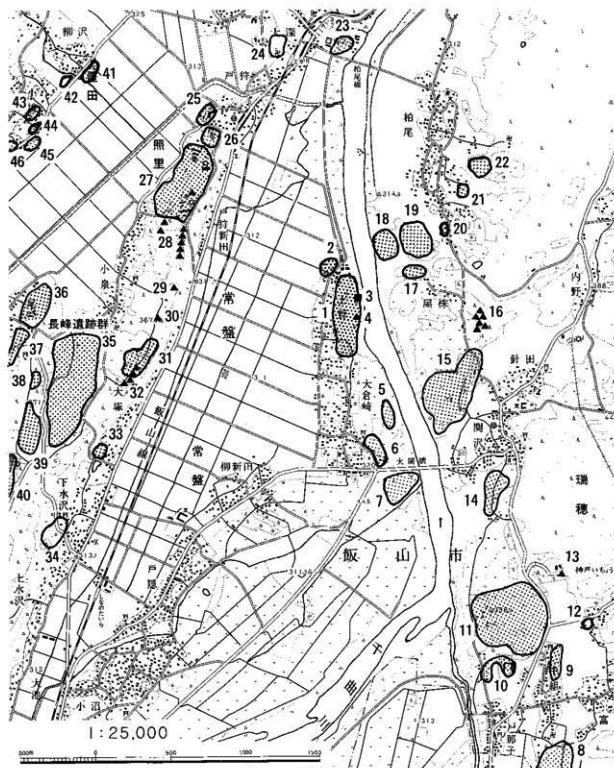


図2 周辺の遺跡分布図 (1:25,000)

- 1.上野 2.上野II 3.大倉崎館 4.上野古墳 5.大倉崎II 6.大倉崎 7.瀬附 8.尾崎 9.城の前 10.千苅・大飼館 11.宮中 12.猿飼田 13.飯綱堂古墳 14.関沢 15.太子林 16.向峰古墳群 17.屋株 18.日焼 19.南原 20.榎ノ沢 21.柏尾南館 22.上ノ原 23.真宗寺 24.岡峰 25.旧照里小学校 26.光明寺前 27.照丘 28.照里古墳群 29.30.茶臼山古墳 31.大塚 32.大塚古墳群 33.水沢 34.下水沢 35.小泉 36.柳町 37.山崎 38.尾崎南 39.東長峰 40.西長峰 41.柳沢A 42.柳沢B 43.鶴屋敷 44.桜沢 45.小境 46.押出

第3章 遺跡の概要

1 上野丘陵の遺跡と過去の調査

上野丘陵は常盤平の東端、千曲川に接して南北に延びている。丘陵は西にゆるやかに傾斜して常盤田んぼにいたるが、田んぼから丘陵へ登ってくると、田んぼの次に上野集落があり、次に畑、丘頂部は背の高い木の繁る森となる。東は比高約15mの断崖となって千曲川に落ちてゆく。

この上野丘陵は古くより遺物の散布していることや古墳のあることが知られており、また雄大な濠をめぐらした「お城跡」(大倉崎館跡)があることが『村史ときわ』などに紹介されている。

昭和63(1988)年国道117号線小沼・湯滝バイパスが上野丘陵を縦断して通ることとなり、それに伴って同年秋に館跡の発掘調査が行われた。その結果、幅10m以上深さ5m以上の雄大な空濠をもつ鎌倉・室町時代(14、15C)の館で、輸入磁器の食器類、越前焼・珠洲焼の大甕、銭貨、茶臼、瀬戸・美濃系の香炉・花瓶、瓦質の茶道具「風炉」などの豪華な出土品があり、県内でも貴重な中世館跡であることが判明した。また炭や焼土の多量出土や火にあった遺物が多いことから当館が火ぜめに達したことが推察され、古文書の少ない当地の中世史を解明する上で重要な資料を提供することとなった。

翌平成元(1989)年には国道117号バイパス路線約500mにわたって全面に発掘し、その全面から旧石器・縄文・弥生・古墳・平安の各時代にわたる遺構・遺物を検出、上野遺跡が上野丘陵全体に広がる複合遺跡であることが確認された。特に旧石器時代末期の5石器集落地点・2礫群の検出と玉髓製品の多用、弥生時代中・後期の竪穴住居址と木棺墓群の検出、古墳時代前期北陸色の極めて強い土器を伴う竪穴住居址と方形周溝墓の検出、鍛冶遺物や、オンドル用とも推定される施設をもつ竪穴住居址や土坑墓などの平安時代の遺構・遺物の調査地全域からの検出などは、北信の古代史解明の重要な資料となっている。

そして平成2(1990)年の丘陵を横断する市道7-335号線改良に伴う発掘調査や、この平成4(1992)年の調査で、丘陵全体にまたがる複合遺跡であることが再確認されるとともに、今回の北端部の調査では標高310mの低地でも平安時代の住居址が検出され、今の上野集落より低い所にも遺跡が広がることが確かめられた。

古墳は千曲川の断崖に接する所に1基確認できる。直径約13mの円墳で、高さ1.4mと低い。北側は杉の植林で少し改変されているが、残りは良い。古墳の西から南にかけて弧状に浅い凹部がめぐる。丘尾切断方式で築造されていることがわかる。出土品の伝承は今のところない。

以上が上野丘陵の遺跡の概要だが、述べたように飯山市内でも第一級の遺跡と言える。千曲川に面した景観の素晴らしいこの地にあつて遺跡の有効な保存・活用が計られることを願いたい。

2 大地区設定と調査方法

前節で述べたように上野遺跡は丘陵全体にまたがるので、今回国土座標第4座標系を基準に新たに大地区を設定した(図4)。大地区は100m四方で50区画、北西隅より付番している。座標は北西隅が $X=-9200$ $Y=100200$ 、南東隅が $X=-8700$ $Y=99200$ である。今回の調査地は18・23・24・28・29区と8区にあたる。しかしこの大地区設定を行ったのは現地調査終了後なので、発掘中は便宜的に付けたI～V区の大地区名を使用した。その対応は29区がI、24区がII、28区がIII、23区がIV、18区がV、8区がB地点である。

大地区内の地区割りについては、5m方眼とし、南から北へ1～20、西から東へA～Tの番号を付して

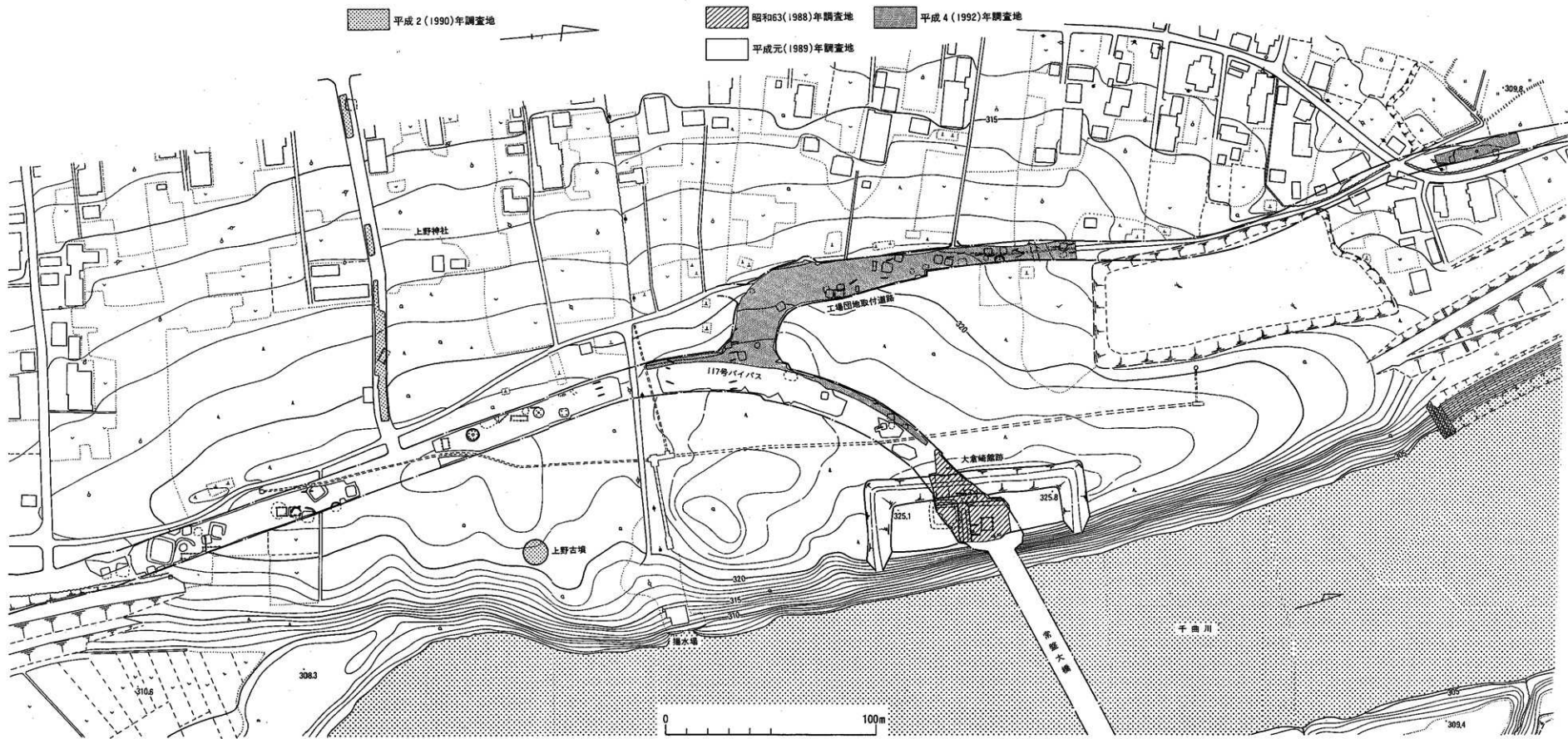


図3 調査地周辺の地形

いる(図5)。したがって、グリッドの呼称は現地では上野(UN)93 I-D-3というふうになり、I区は29区である。

なお、座標に乗る基準点の設定は(有)写真測図研究所が行った。

調査方法は、原則として表土はぎ、精査、写真撮影、測量、遺物の取り上げの順で行った。表土はぎは重機で黒色土の中間まで除去したが、18区と8区については時間の都合等で淡褐色土層(漸移層)ないし黄色粘質土層まで除去した。精査はジョレン・移植ゴテで慎重に遺構・遺物の検出を行ったが、遺物の出土状況などから推して黒色土中に遺構掘り込み面があることは確実ながら、黒色土中では遺構の肩を検出できなかった。黒色土中での検出方法については今後の重要な課題の一つである。遺構の掘り下げは移植ゴテで慎重に行い、適宜十字の畔を残す等土層観察を行っている。写真撮影は白黒とカラーを35mmフィルムで適宜撮影した。遺構全体図は40分の1平板図を作成、各遺構および遺物出土状態の微細図も適宜作成した。

遺構番号はこれまでのものを踏襲し通番とした。住居址は弥生時代であればY9号住居址というふうにし、土師器以降の時代のものはH13号住居址というふうに付けた。ただ、土壇についてはこれまで「Tピット」などと呼ばれる溝状の土壇にはMSKと付番していたが、土壇はすべてSKとした。したがってSKには落し穴・ゴミ棄て穴などが含まれているし、時代も分けていない。

遺物の取り上げは、遺構出土のものは遺構毎に、包含層のものはグリッド毎に取り上げたが、石器・縄文土器は1点ずつ位置と高さを測って取り上げた。

3 層 序

遺跡の基本的な層序は(図35H18号住居址土層図参照)、上位から茶褐色土(表土厚さ約20cm)、黒色土(厚さ約30cm)、淡褐色土(漸移層厚さ約10cm)、黄色粘質土(地山)である。土層図などで確かめられる平安時代の遺構掘り込み面は黒色土中であり、また縄文土器の出土層位や弥生時代の竪穴住居址の深さから勘案すれば、縄文時代以降の遺構面は黒色土中であろうと考えられるが、検出面はすべて淡褐色土層上面である。

地山の層序は(図24SK24・図45SK32等参照)、上位から、上層ほど色がうすくやわらかい黄色粘質土(厚さ約10~20cm)、スコリアを含みかたい黄褐色粘質土(厚さ約40cm)、スコリアを含みかたい黄白色粘質土となる。旧石器の出土層位は黄色粘質土層最上層から淡褐色土層にかけてである。

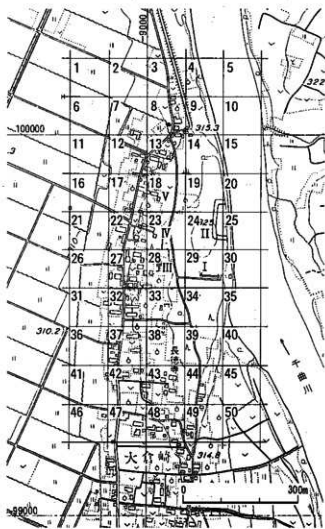


図4 上野遺跡大地区図 1:10000

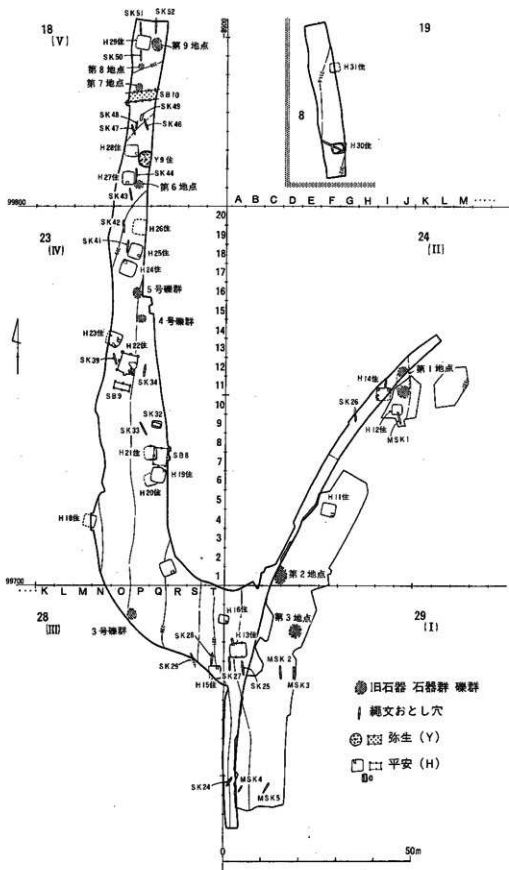


図5 主要遺構分布図 1:1000

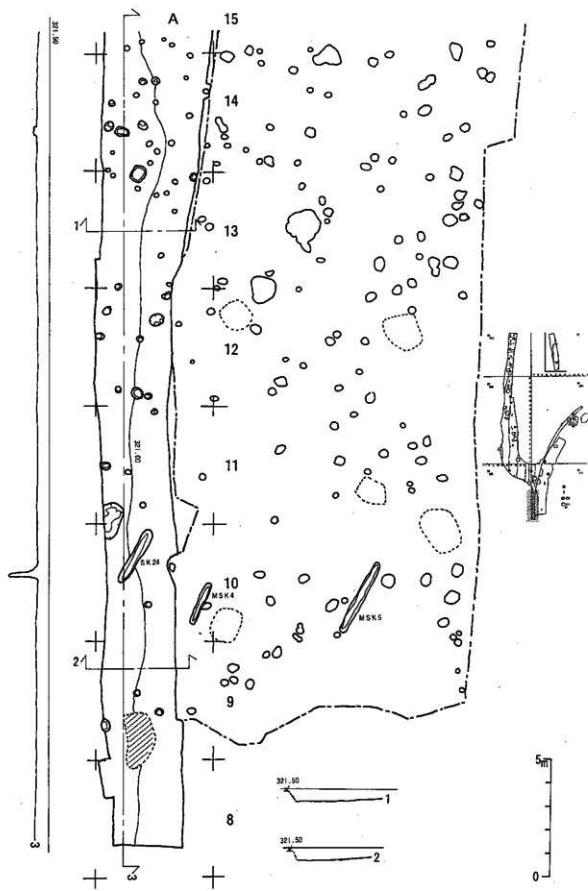


图6 遺構実測図(1) 1:160

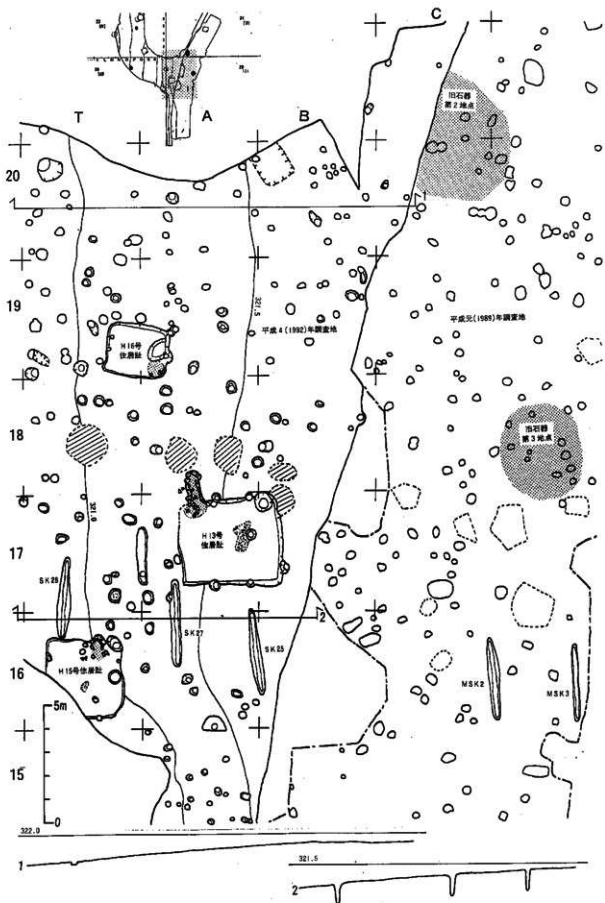


図7 遺構実測図(2) 1:160

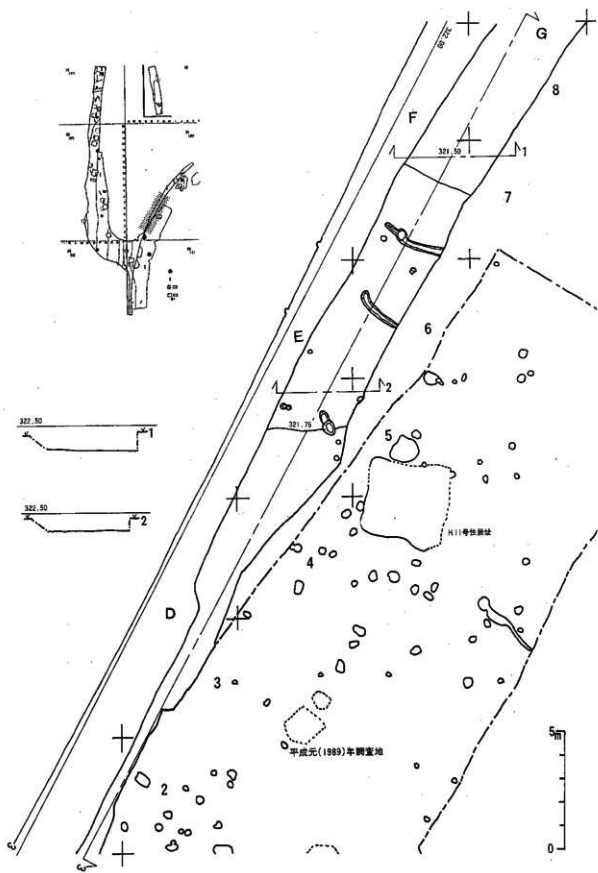


图8 遺構実測図(3) 1:160

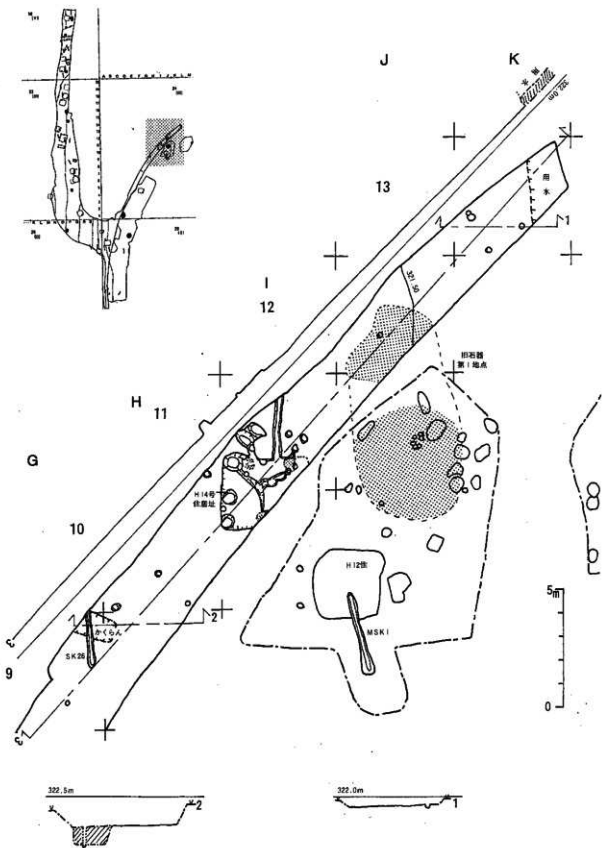


图9 道構実測図(4) 1:160

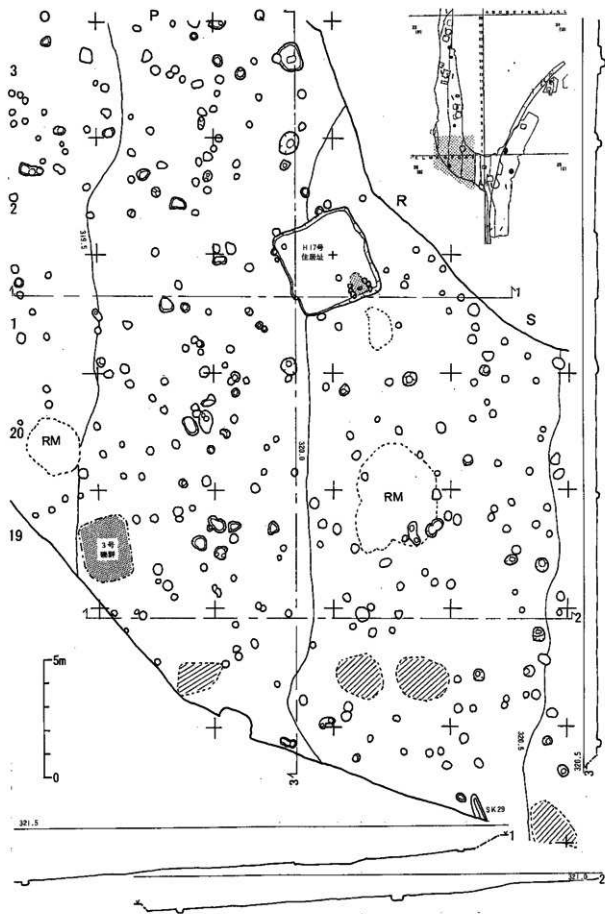


图10 遺構実測図(5) 1:160

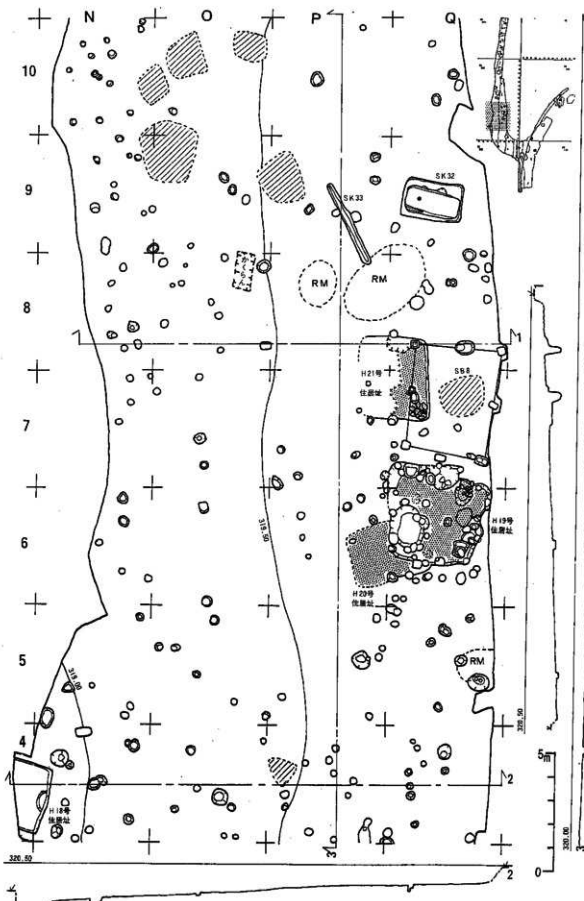


图11 遺構実測図(6) 1:160

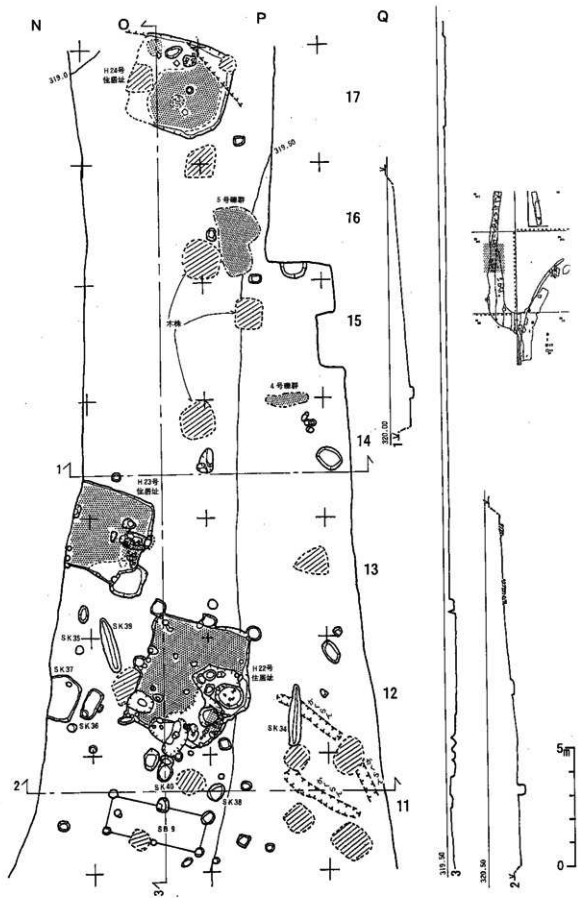


图12 遺構実測図(7) 1:160

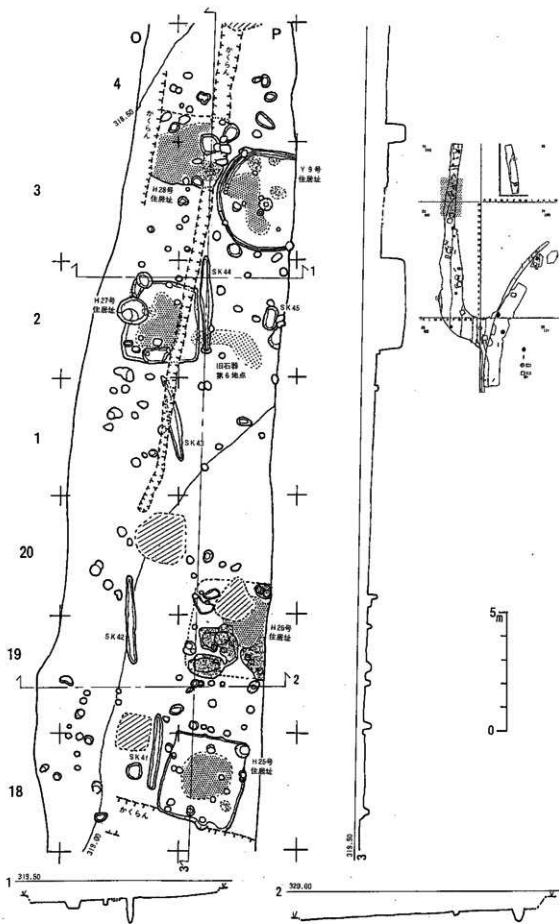


图13 遺構実測図(8) 1:160

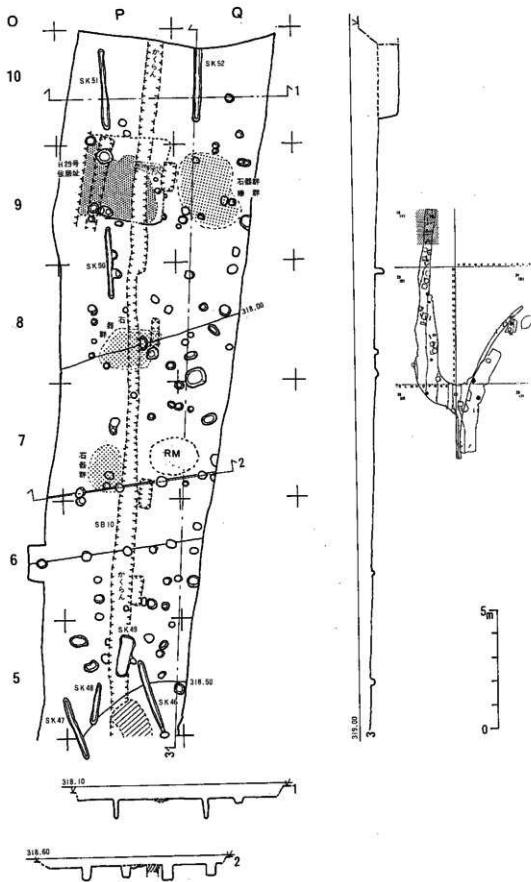


图14 遺構実測図(9) 1:160

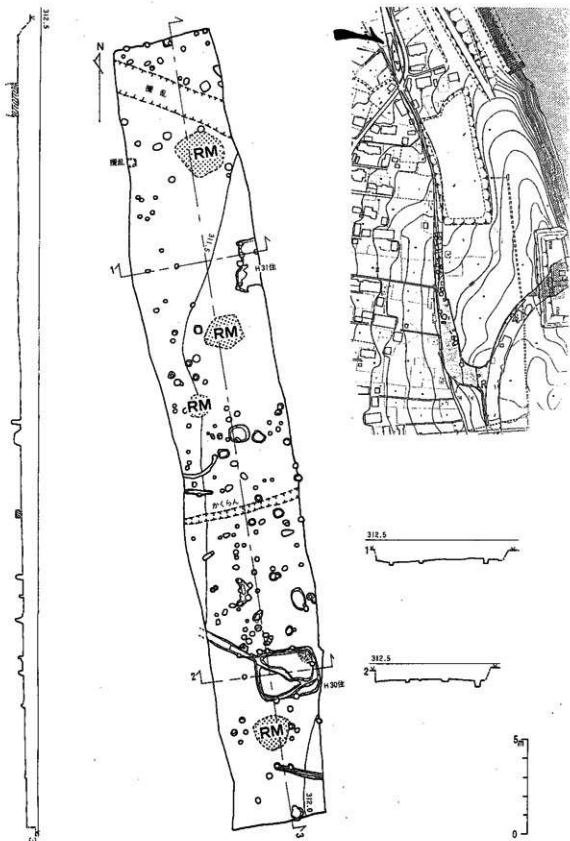


图15 遺構実測图 (10) 1:200

第4章 旧石器時代

1 層序と遺物の出土状態

A 層序と文化層

1) 過去における土層調査

上野遺跡が立地する丘は上野・大倉崎丘陵と呼ばれ、比較的新しい年代に離水したと考えられている。平成元年の調査時に段丘形成年代について調査を実施し、その成果が明らかにされているので（早津・小島 1990）、それを引用しながら触れていくことにする。

上野・大倉崎丘陵の高位である館跡地点での柱状図によれば（図16A）、下位から礫層（層厚2m以上）→砂とシルト～粘土の互層（約4.5m）、褐色風化テフラ層（20～30cm）→黒色腐食土層（数十cm）となっている。そして、褐色風化テフラ層内より約2.2万年前の鈴良Tn火山灰（AT）が混交した状態で産出する。また、旧石器第4地点の層序では（図16B）、褐色風化火山灰層の下位には乾裂とみられる不規則な割れ目がみられ、AT層は褐色風化テフラ層の下部やその下位の乾裂の割れめの間により多く含まれる傾向があり、褐色風化テフラ層の下限にATの降下があったことを示していると考えられている。

以上のような状況により、第4地点の離水時期は、水成堆積物であるシルト～粘土層の上に堆積される

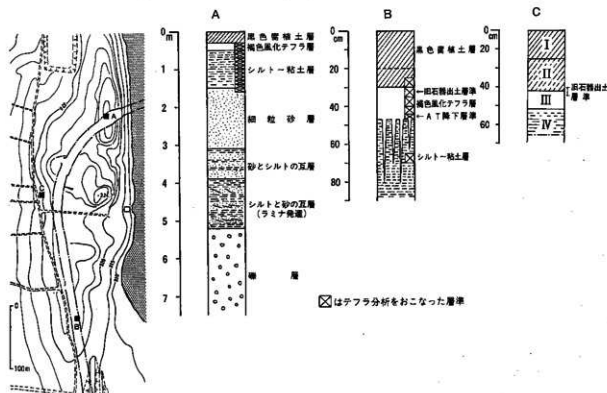


図16 地質柱状図（A・Bは1989年調査 Cは今回調査区280・P-19区標準層序）

乾陸成の褐色風化テフラ層の下限の年代だということになり、ATの降下直前、約2.2~2.5万年前ころと推定されている。第5地点の石器群は玉髓製の搔器が多量に出土しこれに尖頭器が伴うもので、層位的には黒色土直下の褐色風化テフラ層最上部で出土している。平成元年度調査時における旧石器時代石器群の出土層位はすべてテフラ層最上部であった。なお厳密には、テフラ層の上位に数cmの漸移層が認められ石器群はこの層からテフラ層上部にかけて出土している。

2) 今回の調査区の層序

指標的な層序は、3号礫群を検出した28 O・P-19区南壁において作成した(図16C)。前回の層序と比較すればほとんど層厚のなかった漸移層(II層)が約15cm~20cmと厚く認められている。ただし、調査区内によっても層厚は一定していないようである。これはIII層であるテフラ層のソフト化が進んだものと考えてよいだろう。また、このテフラ層の下限に発達していた乾裂は明確には認められていない。

今回検出した旧石器時代の石器群・礫群はII層下部~III層上部にかけて検出されたもので、基本的には前回調査で検出された石器群と層位的な差は認められない。ただし、テフラ層が層厚10cm程度とごく薄いので、よほど大きな時間差がない限り同一層準となろう。

B 地点分布

上野遺跡の発掘によって旧石器時代の痕跡が確認されたのは、平成元年の小沼・湯滝バイパス敷設に伴う調査によってであった。層序と文化層の項でも触れたが、本地域の陸化(離水)以降のテフラ層の層厚が10~20cmと薄いことから、地点別分布の石器群に時間差が認められるものの、層位的には区別できなかった。したがって、旧石器石器群分布や礫群分布については文化層を設定することなく、順に番号を付してきている。今回の調査での地点分布番号は、従前の調査からの続きとして踏襲している。すなわち、石器集中地点は第6地点~、礫群は3号礫群から始まっている。なお、今回の調査では第1地点・第2地点の分布範囲と思われる地区を調査し旧石器も検出しているが、もともと第1地点は平安時代等の遺構によって攪乱されており、また第2地点も1点のみの出土であったので遺構としては掲載しなかった。

1) 第6地点(図17)

18P-2に位置する。分布範囲は1m20cmほどで、礫1・石器4点のみの構成である。付近に平安時代の住居や溝状土坑があるので攪乱されている可能性がある。石器はすべて剥片で、安山岩製である。

2) 第7地点(図17)

18P-7に位置する。分布範囲は約1m50cm、礫3・石器5点からなる。第6地点と同様に周囲は後世の遺構が構築されている。また、約5m北側のP-8区においても同石材の石器が後世の遺構より出土している。石器は、黒曜石製の尖頭器・削器・形器各1点と少ないが指標的な石器で構成される。

3) 第8地点

18P-8に位置する。弥生・平安時代の柱穴が多くあり、石器はこれらの遺構内や周囲より出土しており、まとまりを持って出土したものの原位置ではない。黒曜石製の尖頭器・削器などが出土している。

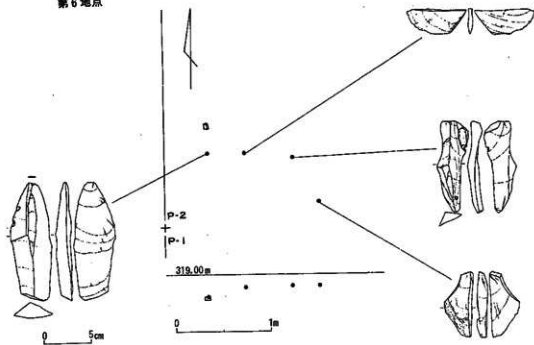
4) 第9地点(図18)

18Q-9に位置する。約30点で構成される礫群を取り囲むように、5×4mの範囲に石器が分布している。出土層位は、耕作土直下であるために褐色風化火山灰層(第III層)内ではあるが、どの層準であるか明確でない。石器は、黒曜石製の尖頭器・削器を指準とし、他は剥片である。砥石を除きすべて黒曜石製であることも第7・8地点と同様に注目される。

5) 3号礫群(図20)

28 O・P-19に位置する。II層下部より現れ、III層上部にまとまっている。範囲は2m60cm×1m60cmの

第6地点



第7地点

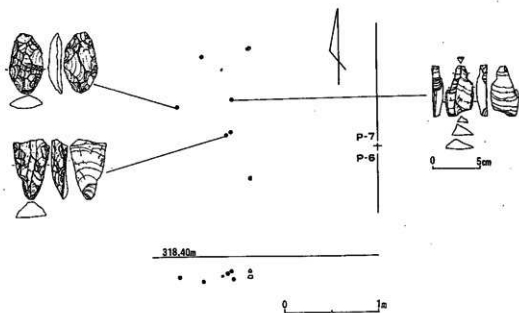


图17 第6·7地点遺物分布图(1:40)

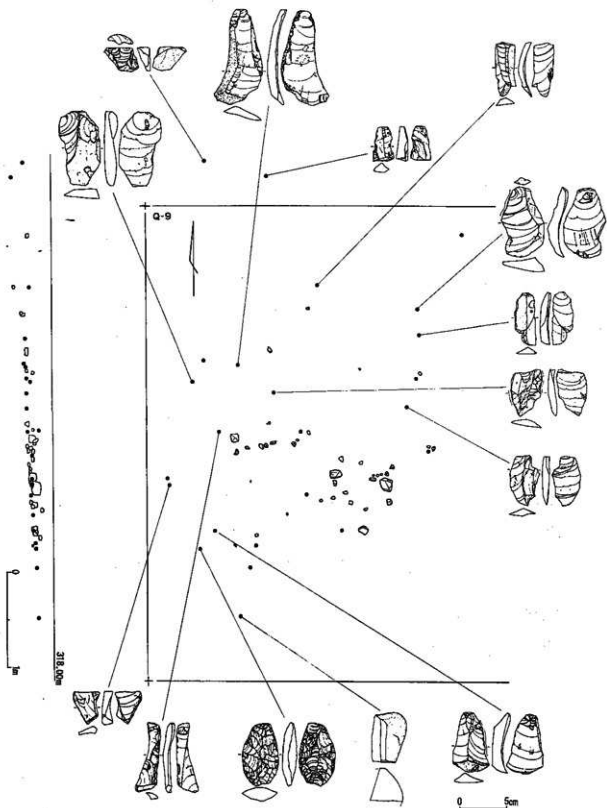
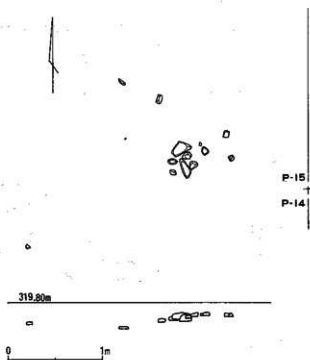


图18 第9地点遗物分布图 (1:40)

4号礁群



5号礁群

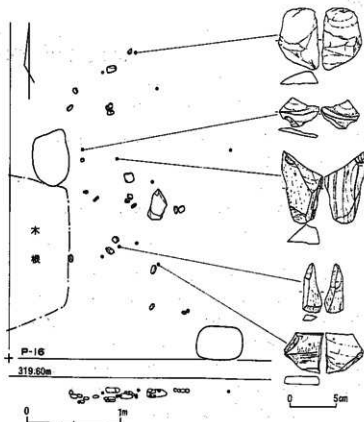


图19 4·5号礁群分布图 (1:40)

楕円形を呈し、拳大の礫約55点で構成される。破損礫が8割以上を占め、礫群内で接合する例も認められる。火熱を受けたと思われる赤化した礫は、明確なものとはほとんど認められない。本礫群内に2点の剥片石器が検出されている。

6) 4号礫群 (図19)

23P-15に位置する。50cmの範囲に約10点の礫が集合する礫群で、赤化した礫は認められない。層位はⅢ層直上～一部Ⅲ層にくだり込んである。遺物は認められないが、本グリット調査中において安山岩製の剥片石器数点が検出されているので、本礫群に関わるものと思われる。

7) 5号礫群 (図19)

23P-16に位置する。一部に平安時代の柱穴が掘られているが、範囲は3×1mで、楕円形を呈している。赤化した礫は約半数に認められる。出土層位はⅢ層の上部である。なお、本礫群に混在して安山岩製の剥片石器が検出されている。

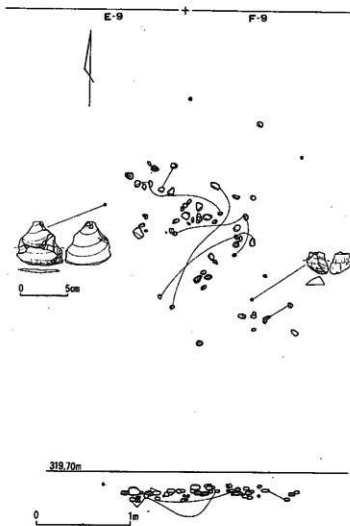


図20 3号礫群分布図 (1:40) (実線は接合、スクリントーンは完形礫)

2 出土遺物

今回の調査によって発見された旧石器は総数約70点である。1989年の調査では約200点出土している。石器は、第6～9地点の4か所と3～5号礫群の3か所および各グリットから検出されている。以下に地点別に説明を加える。

1) 第1・2地点およびグリット (図21 1～6)

1989年調査時に検出された第1地点および第2地点に近接する地点より検出された石器とグリットにおいて単独に近い状況で検出された石器を一括する。

ナイフ形石器 (1・3・6)

1は第1地点に含まれる場所の24J-12区より検出された。石刃技法に基づいた縦長剥片を素材とし、基部側の左側縁を、上・下両方より急斜なブランティング加工を施している。先端部を欠くが、推定長10cmのやや大形のナイフ形石器になるようである。基部側が鋭くしており、杉久保型といわれる形態を呈す。頁岩製である。3は29A-15区の単独出土である。先端部を2mm程欠くが、全長5.0cmのほぼ完形品である。縦長剥片を斜めに切断して切り出し形の形態にし、左側縁に鋭利な刃部を残している。茂呂型ナイフ形石器といわれる典型的な石器である。頁岩製である。6は23N-6区より単独出土したもので、1をやや小形化した形態である。先端部を欠くが、基部側の右側縁にブランティング加工を施して柳葉形に仕上げている。頁岩製。

削器(2)

24J-12区の出土で、1と同様第1地点に含まれる。玉髄製の幅広い縦長剥片を素材とし、左側縁に軽微な加工を施している。これは、加工というよりも使用による刃潰れ的なものである。

剥片(4・5)

4は29A-14区の出土で、3のナイフ形石器と位置的には近い。打面調整された石刃石核から作出されたものと推定される。安山岩製である。5は24E-6区より出土している。黒曜石製の縦長剥片で、石核調整剥片と考えられる。

2) 3号礫群出土石器(図21 7・8)

礫に混じって2点の石器剥片が検出されている。7は石核調整剥片であろう。頁岩製の薄い幅広い剥片である。8は玉髄製で、正面側に表皮を残す。

3) 4号礫群出土石器(図21 9~11)

4号礫群と同一グリッドで検出された石器で、ドットマップを作成していないが関係するものと考えられる。いずれも安山岩製で、9は目的剥片、10は石核調整剥片であろう。11は残核と考えられる。

4) 5号礫群出土石器(図21 12~16)

5号礫群内で検出された剥片石器で、12のチャート以外すべて安山岩である。12は火熱を受けている。また、13も火熱を受けているものと思われ、全体にひび割れが生じている。14はポイントフレークと称されるものに似る。

5) 第6地点出土石器(図22 17~20)

総数4点のみで構成されている第6地点出土石器のすべてである。いずれも安山岩であるが、同一母岩ではない。17は現存長12.4cmと大形の縦長剥片で、狭小ではあるが打面調整がなされていることが認められる。18は正面下部側に表皮を残す。右側縁は打面側から剥片を半割するように打撃が加えられている。19は湾曲し、ややねじれをもった縦長剥片である。

6) 第7地点出土石器(図22 21~23)

弥生・平安時代の遺構に近接しているためか、総点数5点と少ない。そのうち2点は碎片であり、他の3点が図示した石器である。点数は少ないがきわめて特徴的な石器である。

尖頭器(21)

下部側の裏面に打面があるので、分厚い縦長状の剥片を素材としているものと考えられる。正面側に比較的急斜で大きな剝離が加えられ、続いて裏面に平坦な剝離が加えられている。次に正面・裏面から部分的に細部加工が施されるが、規則的ではない。全体的には未製品と思われる。灰色のパatinaで覆われているが頁岩であろう。

削器(22)

黒曜石製の縦長剥片を用い、正面側の両側縁に加工を施して削器にしている。裏面の基部側は、打瘤の高まりを除去している。

彫器(23)

黒曜石製の縦長剥片を素材としており、下部部を欠く。基部側両側縁を打面側からソケット状に櫛状剝離を加えて彫刻刀面を作出している。また、右側側縁には細部加工が施され整形されている。

7) 第8地点出土石器(図22 24~28)

弥生・平安時代の遺構等によって破壊された地点であるが、ややまとまりをもって出土しているので地点として掲載している。したがって、厳密には一括ではない。

尖頭器(24・25・26)

24は約半分を欠くが、現存長6.0cm、幅4.7cmと大形の尖頭器である。黒曜石製の大型の縦長剥片を用い、表面右側縁に整形加工を施して尖頭器状に仕上げている。分類では半両面加工の尖頭器と呼称するものである。25は、全長6.5cmの完形品で、細身の尖頭器である。黒曜石製で、横長剥片を素材として、正面側は急斜に、裏面側には平坦な加工が施されている。細部加工は交互剝離によっている。

削 器 (27・28)

黒曜石製の縦長剥片を用い、両側縁に簡単な加工を施して削器としたものである。下端部には一部表皮が残る。また、左側縁先端部に近い部分はノッチ状となっている。全体的に刃こぼれ状の小剝離痕が多く認められる。28は不定形な黒曜石製の剥片を素材とし、基部側の裏面に加工を施している。なお、表面の先端部の加工は、高まりを取り除くためと思われる。正面右側縁に小剝離痕が認められる。

8) 第9地点出土石器 (図23)

礫群の周辺に石器がまとまって出土したもので、総数23点検出されている。比較的後世の擾乱が少ない地区であるので一括性は高いが、検出面は耕作土直下のテフラ層である。

尖頭器 (29)

全長6.1cmのやや楕円形に近い形態を呈している。裏面側先端・下端部にそれぞれ加工が加えられて丸みを帯びている。全体の整形工程から、この加撃は再加工によるものと思われ、原形は木葉形を呈したものであろう。ただし、再加工はむしろ基部・先端部とも先鋭していないことから別の器種として仕上げたものかもしれない。

削 器 (30・31・35)

30は大型の縦長剥片を素材とし、裏面左側を中心として加工を施したものである。表面には表皮を残している。31は打面調整されていない石核より作出された縦長剥片を素材としている。第一次剝離方向と180°反対方向からの加撃により半割されている。35は先端部を欠く。

小剝離痕を有する剥片及び剥片 (32~34・36~40)

縁辺に小剝離痕を有し、機能的には削器であろうが、明確な加工とは認められない剥片 (32~34) を小剝離痕を有する石器とした。32は、やや幅広い縦長剥片の基部側左側縁に小剝離痕が認められるものである。33は欠損しているが、両縁辺に細かな剝離痕がある。34は左側縁に槌状の剝離痕が加えられているが、彫刻刀面作出のための剝離であるのかもしれない。36は石核の端部より作出されたもので、打面も一部に自然面を有している。37・38は基部側を欠く。39は近接して出土したものが接合したもので、全体は火熱を受けたものと思われ白っぽくトロトロとしている。左側縁に加工痕が認められるが明確でない。削器かもしれない。

石 核 (41)

小形の石片であるが、形態上石核とする。裏面に自然面を有し、正面側には数回の剥片作出面が残る。

磨 石 (42)

礫群より離れて出土したものである。火熱をうけて赤化している破損礫である。全体は不明であるが、稜の部分に平坦な磨り面がある。

9) 小 括

各地点出土石器に説明を加えてきた。過去の調査においても言及してきたところであるが、地点別に使用石材や石器形態に大きな差が認められる。今回の調査においても、安山岩が主体の地点と黒曜石が主体の地点とに明確に別れている。これらを同一時期のそれぞれの石材加工別地点であったと考えることも可能であるし、時期的な使用石材の差であるともいえ一概に結論づけることはできない。

今回の調査では、6~9地点出土石器のうち6地点のみが安山岩で構成され、他は黒曜石石器群であっ

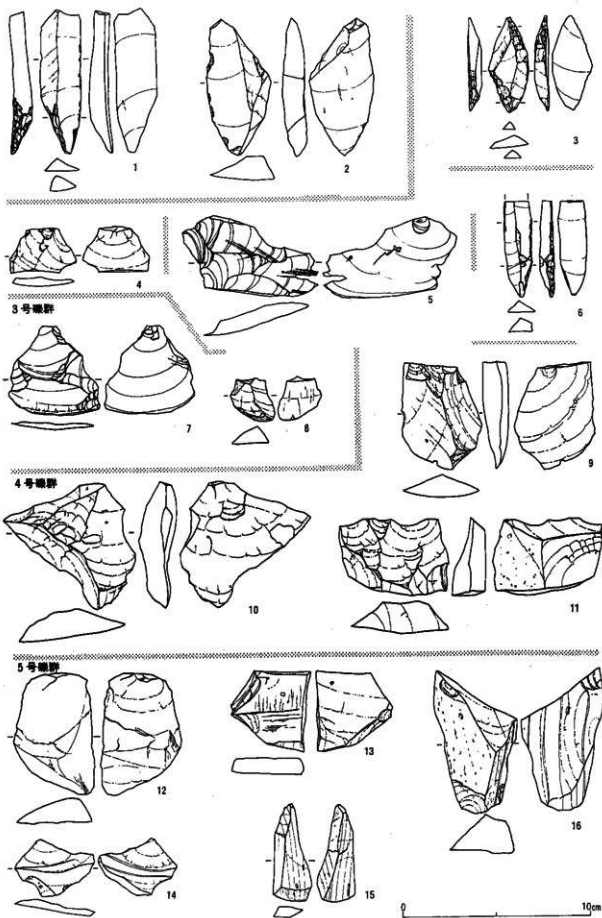
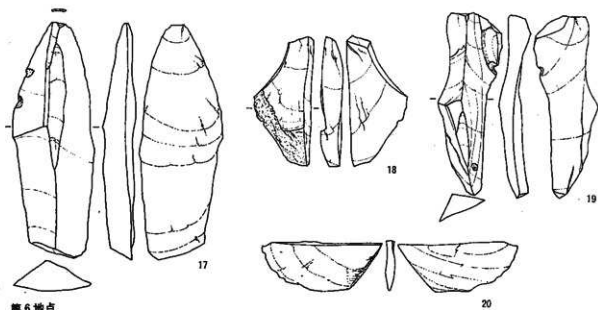
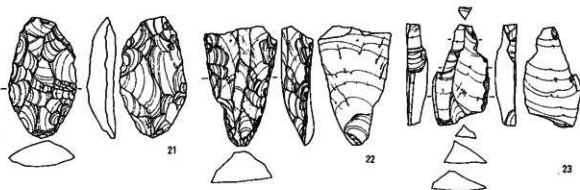


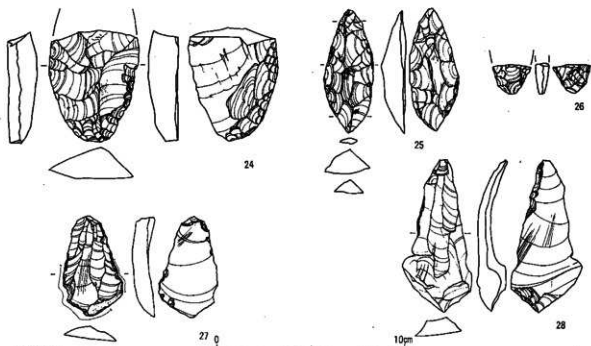
图21 旧石器实测图 1 (1:2)



第6地点



第7地点



第8地点

图22 旧石器实例图 2 (1:2)

第9地点

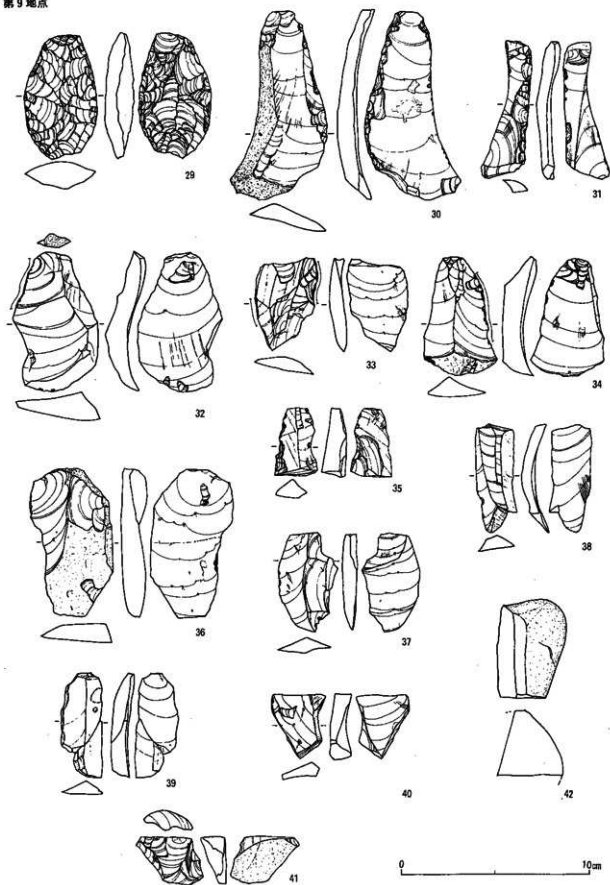


图23 旧石器实测图 3 (1:2)

た。6地点の石器は数量的に僅少であるので技術基盤や組成については不明といわざるを得ない。ただ、大形の縦長剥片が存在することは、技術基盤自体刃器技法に基づいているものであろう。一方、7～9地点出土石器は出土状態に一括性について不安な地点もあるが、すべて黒曜石製で尖頭器を組成とするなど類似性がある。また、剥片剥離技術はいずれも刃器技法に基づいている。したがって、7～9地点出土石器群は同一時期の所産として考えてよいであろう。なお、まとまりを持って出土したわけではないが、典型的なナイフ形石器が数か所において出土している。いずれも頁岩であり、これらの石器と黒曜石石器群、あるいは、1989年調査して上野遺跡の代表的な旧石器石器群とした玉髓製石器群（第4地点出土石器）との関係も大きな課題となっている。

今回の調査に続いて1993年にも上野遺跡の調査を行い、礫群をはじめとして多少の旧石器の出土をみたのでその中で明らかにしたいと考えている。

表1 旧石器計測表

番号	石器名	地点	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損 ○	備考	石器固体番号
1	ナイフ形石器		頁岩	7.5	2.2	1.0	14.0	○		I J-12-3
2	削器		玉髓	7.1	3.4	1.3	25.1			I J-12-8
3	ナイフ形石器		頁岩	5.0	2.1	0.7	15.9	○		I A-15-7
4	剥片		安山岩	2.4	3.5	0.5	5.6	○		I A-14-11
5	剥片		黒曜石	7.3	4.0	1.5	25.3			I E-6-1
6	ナイフ形石器		頁岩	5.1	1.5	0.8	5.5	○		IV N-6-1
7	剥片	3号磔群	頁岩	4.6	4.9	0.5	8.3			III E-9-1
8	剥片	"	玉髓	2.1	2.3	0.9	4.5	○		III 磔群10
9	剥片	4号磔群	安山岩	5.5	4.3	1.2	25.6			IV P-15
10	剥片	"	安山岩	6.6	7.0	1.9	57.2			IV P-15
11	石核	"	安山岩	4.0	5.9	1.8	44.6			IV P-15
12	剥片	5号磔群	チャート	6.4	4.3	1.3	51.2			IV P-16-34
13	剥片	"	安山岩	4.2	3.9	0.8	33.2		火熱	IV P-16-6
14	剥片	"	安山岩	7.6	4.4	2.0	6.6	○		IV P-16-26
15	剥片	"	安山岩	4.2	3.0	0.8	8.3			IV P-16-8
16	剥片	"	安山岩	5.2	2.0	0.6	57.5			IV P-16-24
17	剥片	第6地点	安山岩	12.4	4.4	1.6	73.0	○		V P-2-2
18	剥片	"	安山岩	7.4	3.1	1.2	25.1			V P-2-5
19	剥片	"	安山岩	9.5	3.3	1.6	28.2			V P-2-4
20	剥片	"	安山岩	2.6	6.3	0.5	7.6	○		V P-2-3
21	尖頭器	第7地点	頁岩	6.4	3.6	1.4	33.0			V P-7-1
22	削器	"	黒曜石	6.4	3.7	1.7	32.5	○		V P-7-2
23	彫器	"	黒曜石	5.3	3.0	1.1	14.1	○		V P-7-8
24	尖頭器	第8地点	黒曜石	6.0	4.7	1.6	40.7	○		V P-8-1
25	尖頭器	"	黒曜石	6.5	2.7	1.3	16.8			V P 8-P 1
26	尖頭器	"	黒曜石	1.6	2.0	0.7	2.0	○		V P-8
27	削器	"	黒曜石	5.3	3.2	1.2	12.2			V P-8
28	削器	"	黒曜石	8.0	3.7	1.5	23.0			V P-9-1
29	尖頭器	第9地点	黒曜石	6.1	3.9	1.6	33.2			V Q-9-2
30	削器	"	黒曜石	10.0	5.0	1.5	37.9			V Q-9-45
31	削器	"	黒曜石	7.2	2.3	1.0	8.8	○		V Q-9-42
32	剥片	"	黒曜石	7.3	4.5	1.6	33.7			V Q-9-56
33	剥片	"	黒曜石	4.8	3.3	0.8	10.1	○		V Q-9-47
34	剥片	"	黒曜石	6.2	3.9	1.6	23.4			V Q-9-3
35	削器	"	黒曜石	3.6	2.2	1.3	8.0	○		V Q-9-57
36	剥片	"	黒曜石	7.7	4.4	1.4	33.5			V Q-9-43
37	剥片	"	黒曜石	5.2	3.1	0.8	8.6	○		V Q-9-32
38	剥片	"	黒曜石	5.7	2.1	1.2	8.7	○		V Q-9-53
39	剥片	"	黒曜石	5.5	2.2	0.9	9.5		接合・火熱	V Q-9-63 V Q-9-52
40	剥片	"	黒曜石	3.4	2.9	1.1	8.4	○		V Q-9-61
41	石核	"	黒曜石	2.0	3.5	1.3	8.1			V Q-9-58
42	磨石	"	砂岩	5.0	3.7	3.4	73.5	○		V Q-9-1

第5章 縄文時代

1 遺 構

縄文時代の遺構には動物のおとし穴と推定される溝状土坑がある(図24)。今回の調査では19基検出されている。

前回の調査ともあわせてその分布をみると一定間隔をおいて主軸を並行して並ぶ列が、数十メートルの間隔で並んでいる。すなわち、MSK 6～8の列、MSK 4・5とSK 24の列、MSK 2・3とSK 25～29の列が30mの間隔をおいて並んでおり、その北にMSK 1とSK 26・34・39の列が70mの間隔をおいて、その北にまたMSK 14～17の列が30mの間隔をおいて並んでいる。いっぽう調査地北部のSK 41以北のものは並列しているとは言いがたい。注意されるのは溝状土坑どうしの切り合い関係がないことだ。

規模は長さ3～4mのものか普通だが中にはSK 48のように2mに満たないものもある。断面形は、SK 24・25のように2段に掘り込まれているものと、SK 46のように1段のもの、その中間のY字形を呈するSK 26のようなものがある。並列しているものどうしSK 25・27～29などは形状が似ている。

土層観察をしたものによれば、自然堆積の状況がうかがえる。

出土遺物はほとんどなく、SK 25の上層から縄文時代晩期と考えられる脚部が出土しているのみである。

2 遺 物

A 遺物出土状態(図25)

縄文時代の遺物として土器が少量あるが、年代は、早期・前期・中期・後期・晩期の各期にわたっている。遺構に伴うものは31の1点のみで、あとは包含層の黒色土出土である。

出土量の多い前期の土器の分布をみると、28A・B-18・19区に集中し、24F～H-7～9区と23N～Q-4～10区にややまとまっている。

B 土 器(図26・27)

(1) 早期の土器

押型文土器が1点29A-12区から出土している(1)。口縁部小片で磨滅がはげしい。5mm×6mmの楕円文を密に配している。淡褐色で焼成は良い。

(2) 前期の土器

2～4は羽状縄文の口縁部片である。2は波状口縁である。いずれも焼成は良い。

5～8は体部片で6・7は羽状縄文である。7は雲母および石英と思われる砂粒を多量に含み光をあてるとキラキラする。また結節の浮線文が縦についている。

9・10は繊維土器である。

11・15・16は半載竹管による平行沈線をもつもので、11は格子文と、一定間隔で半載竹管による刺突文をもつ平行沈線がめぐる。16は刺突文をもつ平行沈線をめぐるし、口唇部に押圧による刻み目をほどこしている。いずれも焼成は良い。

12はキャリパー状の口縁をもつもので、3本1単位の沈線2単位を口縁直下と頸部にめぐらす。砂を多量に含むが焼成は良くかたい。淡黄褐色を呈する。

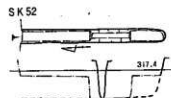
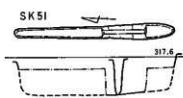
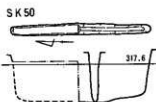
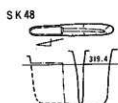
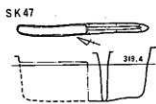
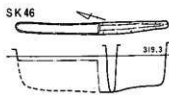
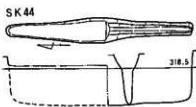
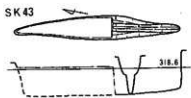
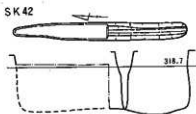
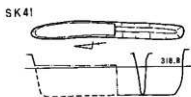
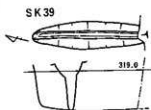
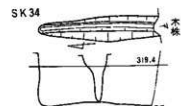
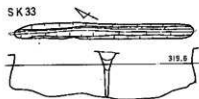
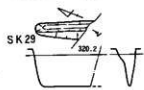
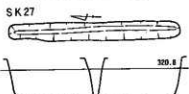
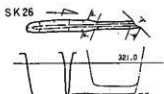
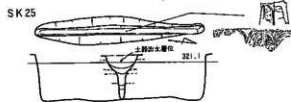
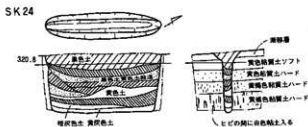
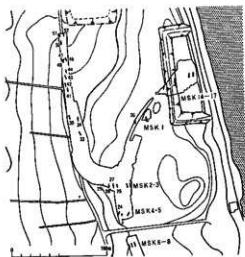


図24 おとし穴 1:80

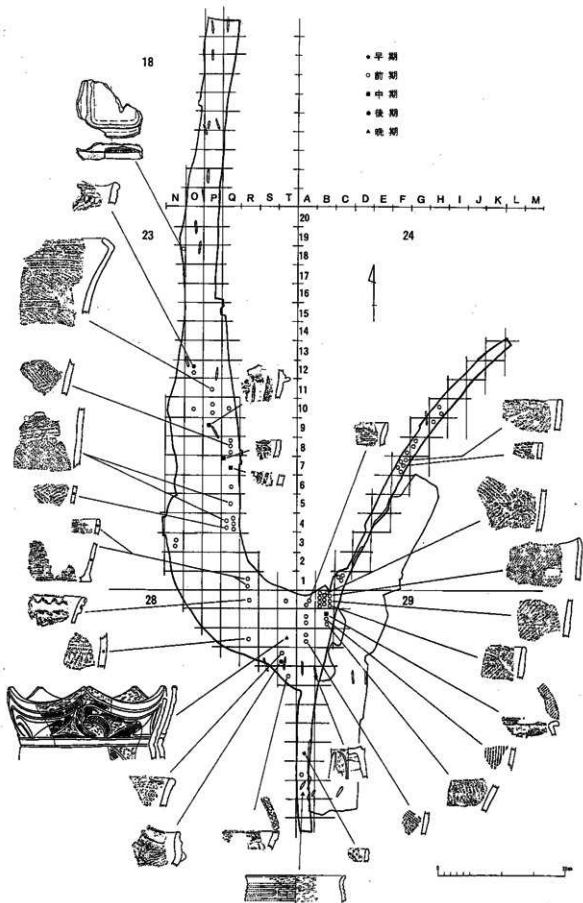


图25 绳文土器分布图 1:1000 土器は1:6

13・14は同一個体と思われる。繊維土器で半截竹管による平行沈線を全体にめぐらす。赤褐色を呈する。

17は沈線の間に半截竹管による連続爪形文が配されるもので、焼成は良い。

18・19は半截竹管による平行線文で18は縄文を地文としている。

20は口縁部に2帯の紐による波状文を付したものである。薄手で焼成が良い。

21は口縁部に輪状の浮文を連続してめぐらし、外面に結節の浮線文が付く。結節浮線文は2本しか残っていないが、2本の間に3本の剥離痕があり集合していたことがわかる。

29は縄文と結節浮線文をもつもので、前期と思われるが器形がよくわからない。隅丸正方形の底状のものから二重に体部が立ちあがっている。その外側の立ちあがりの表面に文様が付く。底面には貼り付けられた帯状部が剥離した痕跡がある。胎土に砂粒を含み焼成は良好、赤褐色を呈する。

以上の前期土器のうち、2～8、11・12・16～19は前期後半期の諸磯式併行期の土器で南隣の犬倉崎遺跡に類別がある。繊維を含む9・10・13・14はより古く位置づけられ、20・21はより新しいものと考えられる。

(3) 中期の土器

22・24・25は赤褐色薄手の土器で、粘土紐およびへら沈線で、垂下文・うず巻文・蓮華文風の文様を構成している。これらは中期中葉のもので北陸の系統を引くものであり、市内深沢遺跡に類別がある。

23は強く屈曲する口縁部をもつもので、上方に突出する波状口縁の内側に集合条線文をもつ。

(4) 後期の土器

26・27はいずれも口縁部が内湾する浅鉢の口縁部片で、隆帯文・縄文が施される。焼成は良く黒灰色を呈する。後期前葉細ノ内式に属するものであろう。

(5) 晩期の土器

28は大破片3片が近接して出土しているものである。5単位の山形口縁をもち胴がくびれる鉢で口頸部に蕨手文風の文様をめぐらす。太いへら沈線で囲まれた中は細かい縄文と磨り消し縄文を配する。赤橙色を呈し焼成良好である。晩期初頭の佐野I式に先行するものであろう。

31は溝状土坑S K25から出土した脚で、外周にへらによる柳葉文を3単位配している。胎土に砂を含み、焼成は良好、淡褐色を呈する。

30は「工」字文風の文様をもつ小型の鉢で全面がミガかれている。黒灰色を呈する。晩期後葉の水式に属するものであろう。

注1 31を晩期とすることについては中島庄一氏よりご教示を得た。

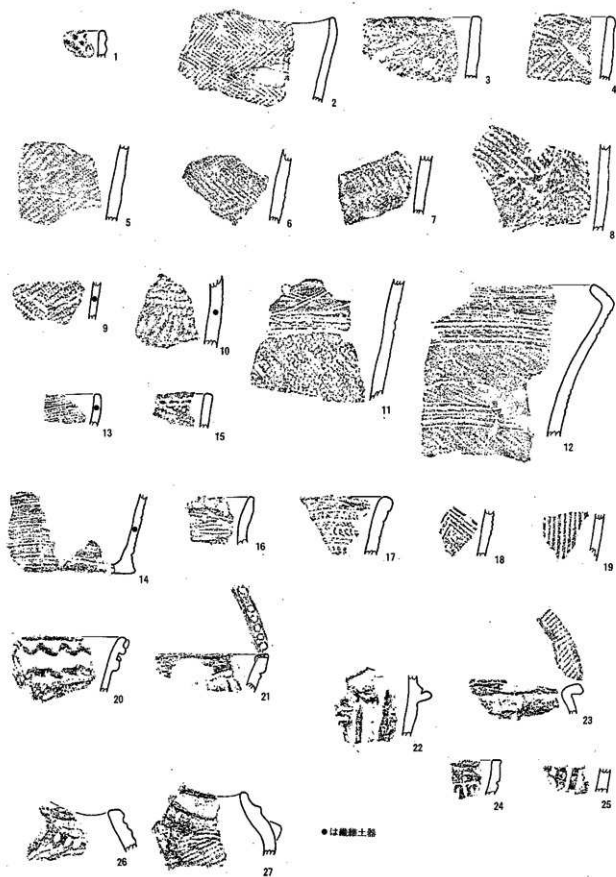


图26 縄文土器実測图 1 1:3

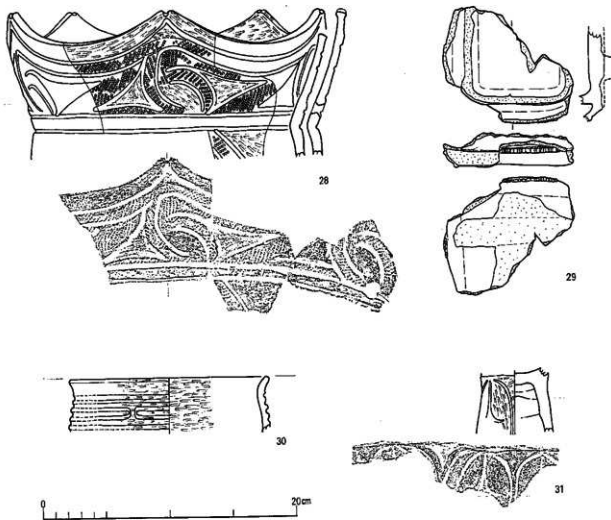


图27 绳文土器实例图 2 1:3

第6章 弥生時代

1 遺 構

弥生時代の遺構は、竪穴住居址1、掘立柱建物址1などがある。

A 竪穴住居址 (図28)

(1) Y9号住居址

18P-3区にある。弥生中期の円形住居址である。幅約15~30cm、深さ10~15cmの周溝が、P1を中心にはほぼ円形にめぐるが、北側部分は直線に近い形になっている。さらに北西側約2mの長さにわたって二重に周溝のめぐる部分もある。

平面規模は、直径約4.0mであり、検出面から床まで掘り込みは、全体に浅い。

P1の北東側に近接し、45×60cmほどの焼床が検出されており、炉であると考えられる。

P1は摺鉢状を呈しており、住居址の中央ピットと考えられる。

主柱穴は、位置および深さから判断して、P2・P9・P12が推定される。さらに、それぞれの主柱穴の外側の位置、周溝に重なりP5・P6・P13があるが、やはりその位置・規模・形態から重要な柱穴であると推定される。

遺物は、北側2か所の焼土の間から、完形の甕1点が、横につぶれた状態で出土しており、他にも、床面から2~5cm程の高さのところから土器片が、住居址内南寄りの位置に、ある程度集中して出土している。

また石器についても、石鎌2点と叩き石3点が、土器片と同様に出土している。

B 掘立柱建物址 (図28)

18O・P・Q-6・7区にある1間(2.7m)×4間(7.2m)以上の建物である。桁行の柱間寸法は1.7~1.9m。柱穴掘形のプランは円形で直径32~40cm。柱穴の深さは、全体に45~60cmである。

遺物は、P4中部から、完形の蓋が出土している。柱を抜きとった後に納めたものであろうか。また、P6からは、壺の上部とその土器片が出土している。

Y9住

表2 弥生時代竪穴住居址・掘立柱建物址柱穴一覧表(床からの深さ:単位はcm)

No.	直径	深さ	備 考
1	55	27	すり鉢状
2	20	27	
3	17	25	
4	17	21	
5	30	18	
6	23	23	
7	40	12	
8	20	17	
9	10	18	
10	18	20	
11	30	20	

No.	直径	深さ	備 考
12	17	72	
13	30	27	

S B 10

1	32	45	
2	32	50	
3	40	58	
4	37	45	ふた出土
5	37	58	
6	38×47	55	2段 壺出土
7	37	60	
8	38	50	

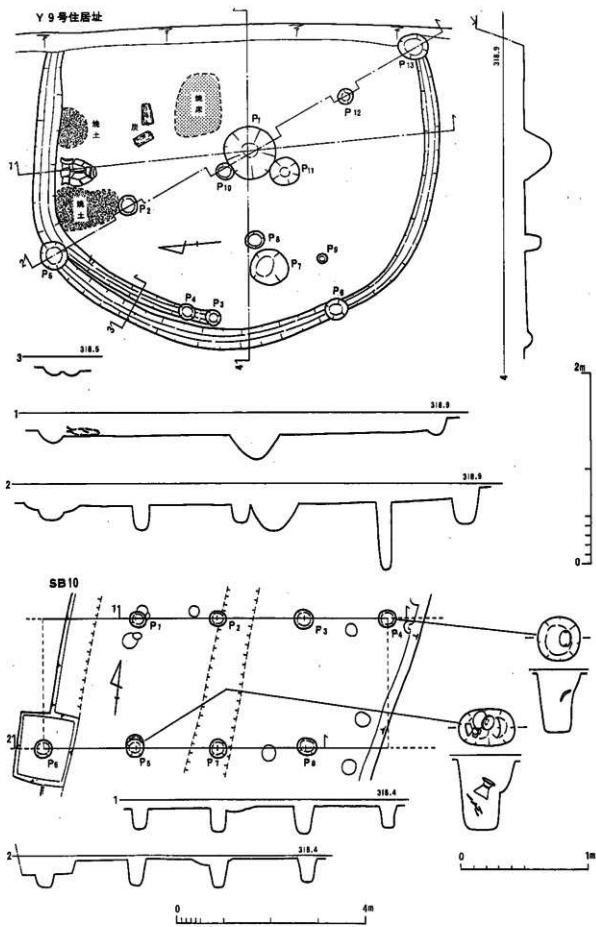


图28 Y 9 号住居址 SB10 1:40 1:80

2 遺物

A 土器 (図29・30)

(1) Y9号住居址出土土器

壺・甕などがあり、接合で完形に近い状態で復元できるものが2点ある。

1は壺の口縁～頸部である。口唇部には縄文がめぐり、口縁端部に刻み文をもつ。頸部中央よりやや下に、4条の横書き平行線文が2単位、横位に施されている。器壁は、内外面ともに、ていねいにヘラミガキされる。胎土は細かい砂粒を含んでいる。素地の色調は淡灰褐色～淡褐色。口径15.2cm。

2・3も壺の口縁～頸部である。いずれも口唇部に縄文がめぐる。

3は頸部中央よりやや下にヘラ描き沈線がめぐり、その間に縄文が施される。器壁は内外面とも、ていねいにヘラミガキされ、内面にはところどころに赤彩が残っている。胎土はこまかい砂粒を含み、色調は淡灰褐色～淡褐色である。

2は頸部よりやや下に2本の沈線がめぐり、内外面ともにナデの調整。胎土は細かい砂粒が含まれ、色調は淡褐色。2は口径14.0cm、3は口径7.8cm。

*4は壺の頸部～胴部である。縄文を地文とし、太いヘラ描き沈線による直線文と波状文、横書きによる5条の平行線文が組み合わされる。器壁の調整はナデとハケで、頸部内側には指圧痕が残るが、全体に磨減が激しく定かでないところが多い。胎土は細かい砂粒を含み、色調は茶褐色。

5も、4と同様の壺の頸部～胴部である。太いヘラ描き沈線による直線文と弧文が施される。上部直線文の間には一定間隔にて縄文が施されるが、下部分については磨減のため判断がつかない。調整も、内外面ともハケと思われるが、磨減はげしく定かではない。胎土は細かい砂粒を含み、赤褐色を呈する。

6は壺の胴部～下部である。太いヘラ描き沈線による直線文と弧状文、その間に、画文がつながり縄文を囲む島となる文様が、施される。器壁の調整は、外面はハケから部分的なヘラミガキ。内面はヨコハケ、ナナメハケで胴上部には指圧痕が残る。胎土は細かい砂粒を含み、色調は茶色。

7は口縁部が受け口状になる壺で、口縁部にのみ縄文がめぐる。器壁の調整は、外面はハケのちヘラミガキ。内面は胴部全体にハケ、頸部をナデ、口縁部をミガキで調整する。胎土は細かい砂粒を含む。素地の色調は茶褐色だが表面は暗い。口径18.0cm。

8は壺の下部である。調整は外面がハケのち粗いヘラミガキ、内面がヨコハケ。胎土は細かい砂粒を含み、色調は全体に黒灰色。底部径は7.0cm。

9は完形の甕である。住居址内北側から出土したもの。短く外方に屈曲する口縁部と倒卵形の胴部を持ち、平底である。内外面全体をハケで整えたのち、胴部外面に横書き羽状文を施し、その上部をヨコ方向のミガキ、下部をタテ方向のミガキで整えている。内面もハケからヘラミガキで調整される。胎土は細かい砂粒を含み、色調は淡茶色で、外面上半部には煤が付着している。口径21.6cm、高さ26.6cm。

15～17は壺の胴部片である。15はヘラ描き沈線の中に縄文を配し、沈線文の交点に円形浮文を貼り付ける。胎土は細かい砂粒を含み、素地は赤褐色、外表面は黒色を呈する。16・17はヘラ描き沈線を直線ないし波状にめぐらせ、その間に縄文と横書き平行線文を配する。砂を多く含み、淡褐色を呈する。

(2) その他の遺構および遺構外出土器

10は壺の上部～胴部である。口唇部には縄文が施される。頸部に太いヘラ描き沈線による直線文、胴部には同様の直線文と弧状文がめぐる。画文の間には6と同様の島状の文様が施される。調整は、外面がていねいなヘラミガキ、内面は胴部全体がハケ、頸部がナデ、口縁部がていねいなヘラミガキである。胎土

Y9 住

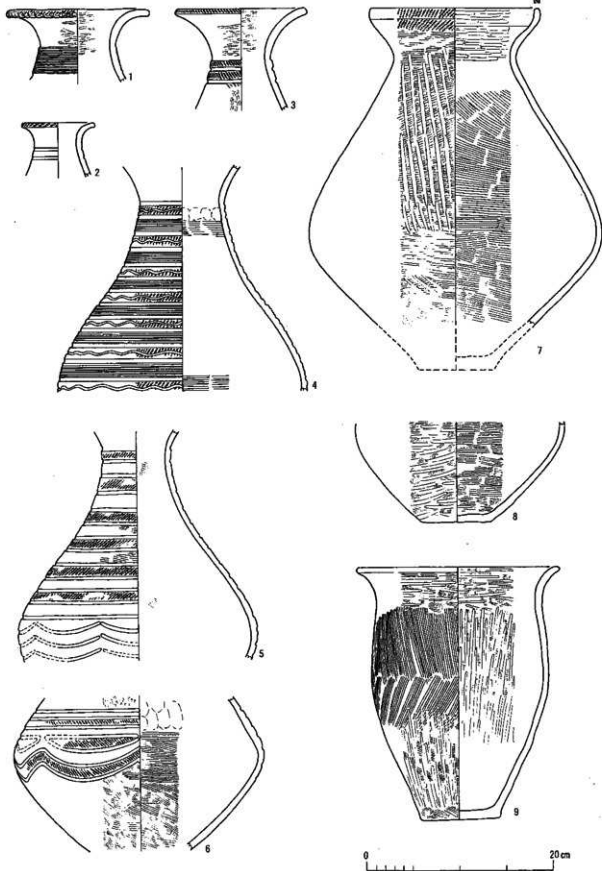


图29 弥生土器实测图 1 1:4

は細かい砂粒を含み、色調は淡褐色だが黒斑がある。口径11.2cm。SB10P6出土。

11は壺の上部である。口唇部に縄文がめぐり、頸部には太いへら描き沈線による直線文がめぐり、調整は、外面がへけからへらミガキ、内面は頸部ナデからハケ、口縁部はへらミガキ。胎土は細かい破粒を含み、色調は淡黄褐色。口径12.0cm。SB10P6出土。

12は甕の底部で外底に細物痕が残る。胎土は細かい砂粒を多く含み、色調は暗褐色。23P-10区出土。

13は掘立柱建物址SB10P4から出土した完形の蓋である。対極をなす2ヶ所の周縁に2つ並ぶ小孔をもつ。内外面ともていねいなへらミガキのち赤彩されている。胎土は細かい砂粒を含む。直径10.7cm。

14は高坏部と思われる。外面は磨滅がはげしく定かでないが、内面はていねいなへらミガキのち赤彩されたと思われる。胎土は、他の土器に比べて砂の含有は少ない。外面は赤褐色、内面は暗赤褐色。

18-26は壺の胴部片などである。いずれもへら描き沈線の間に縄文と櫛描き平行線文を配する。

18・19は胎土に細かい砂粒を含み、精良。白灰褐色を呈し、18の外表面にはわずかに赤彩の痕跡がのこる。

20は上位に重山形文がめぐり。胎土は精良で、色調は茶色。

21・22は胎土に細かい砂粒が含まれ、色調は黒灰色。

23・24ともに胎土に細かい砂粒が含まれ、色調は黄褐色。

25は口縁部である。荒い砂粒が含まれ、色調は淡赤褐色。

26は直線文と平行線文がタテ方向に施され外面をへらミガキ、内面をハケで調整する。

27-34は甕の破片である。

27-29は節描きの羽状文あるいは平行線文をもつ。細かい砂粒を含む胎土で、褐色-赤褐色を呈する。

30-32は不連続な節描きの波状文をもち、胎土は精良。30は黒色。31は上位に刺突文をもち、暗褐色を呈す。32は白灰褐色。

33・34は外表面をハケで調整する。ともに胎土に砂粒を多く含み、白灰褐色を呈する。

35は高坏の坏部片である。胎土に砂粒を含み、素地は白灰褐色であるが、内外面とも赤彩される。

(3) 小 結

これらの土器のうち30-32・35は後期的なものだが、Y9号住居址出土品および図示した多くは中期後半の粟林式におかれ、粟林式の中でも古い様相をもつものと考えている。

B 石 器 (図31)

(1) Y9号住居址出土石器

3・4ともに粗雑なつくりの小型の石鏃である。ともに安山岩製で、3は1.1g、4は2.3g。

8は安山岩製の打製石斧である。片面は加工されるが、裏面側は未加工である。重さ156.4g。

9・10・11は握るのに丁度良い大きさの細長い自然石を用い、敲打器として使用したものと思われる。いずれも使用の痕跡は1ヶ所にとどまらない。

(2) 遺構外出土石器

1・2ともにやや大型の石鏃である。

1は安山岩製のもので舌部が欠損するが、剥離はこまかく整っており、縁辺は鋸歯状になっている。長さ4.6cm、重さ3.9g。

2は黒曜石製で、若干幅広い形状の基部をもつ。剥離は全体に整っている。長さ4.3cm、重さ1.8g。

5・6はともに石鏃の未製品である。5は黒曜石製で重さ1.9g。6は安山岩製で重さ2.7g。

7は安山岩製の打製石斧である。重さ58.4g。

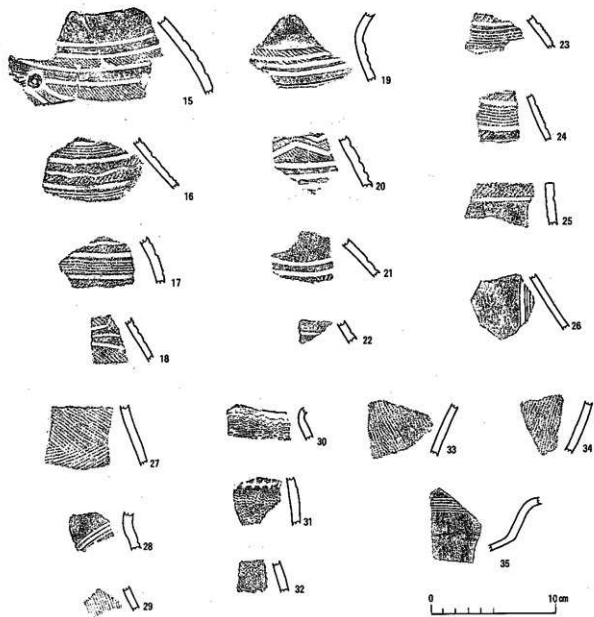
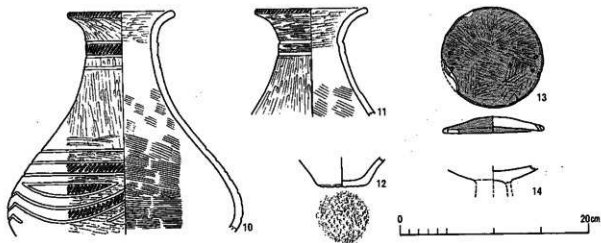


图30 弥生土器实例图 2 10-14 1:4 15-35 1:3

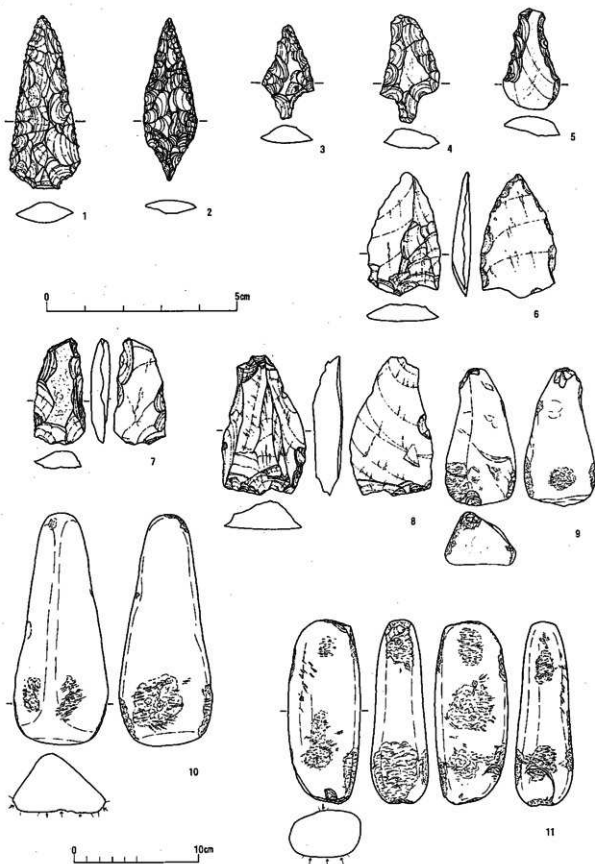


図31 弥生時代の石器 1-6 1:1 7-11 1:3

第7章 平安時代

1 遺構

A 竪穴住居址

竪穴住居址はH13号からH31号までの19棟が検出されている。住居址は2～3棟が一群となって調査地全体に散在する。重複しているのはH19とH20号住居址だけである。

(1) H13号住居址(図32)

29A・B-7区にありH15・16号住居址に近接している。南北3.5m×東西4.5mの長方形プランで、4本の主柱穴をもつ。主柱穴は壁に接してある。壁はゆるやかなカーブで立ちあがる。床は黄色粘質土層まで掘り下げられ、かたく締っている。

カマドは北辺の西端に石で構築されている。北壁より突出していることが特色で、主柱穴の位置と対応している。石は20～30cm角のはほぼ長方体の石をそろえて使っており、割ったり加工したりした石はない。カマド焚き口は南側のやや間口の広い部分で、5個の石を両側に据えて幅40cm、奥行30cmの空間を作り中央に細長い石を立てて支柱としている。支柱の南の床は赤く焼けておりまた、埋土には炭や焼土があり、ここで火を焚いたことがわかる。北に延びている所は煙道と考えられ、石は一段高く据えられている。煙道の底は黒色土である。石の頂部は表土に突出していたので上に蓋石等の施設があったかどうか不明。カマドの焚き口には杯・甕などが集中していたが、甕はそのまま押しつぶされたような恰好ではなく小片が散乱し、一個体に復元できるものはなかった。

住居址の埋土は自然堆積の状態、遺物の出土は多くない。P5の西で床面より5cm程の厚さで焼土が認められたが、その床は焼けておらず、二次的なものと思われる。

(2) H14号住居址(図33)

24I-10・11区にあり、平成元年の調査で検出された一辺2.9mの小型住居址H12号住居址と近接している。住居内と住居外へ延びる溝をもつ特色がある。南北3.1m×東西3.6mの長方形プランで、確認面からの深さは10cmと浅い。西辺に3か所大型のピットがあるが、埋土に焼土や炭そして土器片を多く含んでいたりに対応する位置に同様のピットがないことから柱穴とは考えにくい。

カマドは北東隅に石組みで構築されていたものと推定されるが、石組みは原形をとどめていない。カマド周辺には甕・杯が集中してあった。床面は他の竪穴住居址に比べ軟かい。

住居内の溝は周溝的ではなく、カマドから中央へ向う一本とP1から焼土3へ向かう一本が中央で連結する。溝の深さは床面から約10cmだが、カマドから中央へ向かって、焼土3からP1へ向かってゆるやかに傾斜する。

北辺のカマド寄りのところから北へ延びる溝は住居と一体のものと考えている。深さは約15cmで、住居から外へ向かって深くなる。排水溝と考えておく。

遺物はカマド周辺、焼土2・3、P1～P3などから主に出土しているほかは、小片が散在する程度である。

(3) H15号住居址(図34)

28T-16区にあり、H13・16号住居址と近接する。南北3.3m×東西3.4mの略正方形プランで、深さは東壁で26cm。壁の立ちあがりにはH13号住居址に比べ垂直に近い。床は黄色粘質土まで掘り込まれているが、

西端近くでは漸移層が床となっている。主柱穴はP3・P6が候補となるが根拠は弱い。床は壁ぎわとカマド周辺以外は堅く締まっている。

カマドは北辺東寄りに石組みで構築されている。残りは良いのだが、カマドに使われたと思われる石が6個カマドの南にあったのでもとはより多くの石で構築されていたのであろう。残りの状態では東・西辺とも2個の石を立てて壁とし、中央奥に支柱を立てている。使用されている石は加工品でなく適当な石を選んで使っている。支柱の南の床はよく焼けている。カマドの北は少しくほめられ掘出しとしている。カマド内および南には遺物が集中していた。遺物はほかにP2からまとまって出土している以外は小片が散在的に出土している程度である。

(4) H16号住居址 (図34)

小型ながらしっかりした住居址である。28T-19区にあり、H13・15号住居址に近接する。南北2.2m×東西2.6mの長方形プランで、壁の立ちあがりはやわらかである。主柱穴は2本で(P1・P3)長軸の中央に壁に接して来る。床は堅く締まっている。

カマドは南辺東隅に石組みで構築されている。石組みは東辺のみ残る。支柱は他に比べ大型の石である。規模は支柱を中心に推定すると幅約50cm、奥行き約60cmと他の住居址例と同じである。支柱の手前の床はよく焼けている。遺物はカマド内には少なく、南接するP2より多く出土した。また住居内からも灰陶陶器壺・小壺などの遺物が多く出土している。

当住居址は床面積3畳弱とごく小型ながら生活の痕跡が各所に認められる。住居にまちがいない。

(5) H17号住居址 (図35)

23Q・R-1・2区にある。カマドから多量の土器が出土した。南北3.9m×東西3.6mの長方形プランで、壁の立ちあがりはやわらかである。床はカマド周辺と壁ぎわをのぞき堅く締まっている。埋土は自然堆積の状態で、埋土中には遺物は少ない。ピットは幾つかあるが主柱穴と推定できるものはない。

カマドは南辺東隅に石組みで構築されている。石組みは残りが良い。東に3個、西に4個の20cm角の石を据えて壁としているが、石は小ぶりですり平でない。中央やや奥に支柱を立てるが、他の住居址例に比べ支柱の幅が広い。カマドの規模は幅・奥行きともに約60cm。このカマドの特色は完形ないしそれに近く復元された土器が多く出土したことと、支柱の手前に石がかぶっていたことである。壁は大破片が多く、その場で壊したような恰好であった。また底部に墨書のある略完形の坏がカマドの東から伏せた状態で出土している。

(6) H18号住居址 (図35)

23N-4区にあり、調査地外へ続く。南北3.2m。土層観察で掘り込み面が黒色土中であること。深さが43cmであることが確認された。床は地山でも一段とたかい黄色粘質土まで掘り込まれ、また堅く締っていた。埋土は自然堆積の様相で、埋土からはごく少量遺物が出土している。東壁ぎわに長楕円形の浅いピットがある。主柱穴はみあたらない。

(7) H19号住居址 (図36)

23Q-6区にあり、H20号住居址を切り、H21号住居址・SB8に近接する。また、調査地外だが東隣のR-7区で地主の中原英吉氏がかつて焼石と土器を掘り出しており、竪穴住居址の存在が予想される。住居内に柱穴が多い。南北3.8m×東西3.8mの方形プランで、壁の立ちあがりはやわらかである。直径が小さいながらも深いピットが北辺をのぞいて壁ぎわにめぐっているが、それらが主柱穴であろう。まず東辺ではP9とP1の北端柱穴が深さ40cm以上で候補となり、南辺では同様にP13・16があたる。西辺ではP5とP23が相当する。つまり東・南・西の3辺に2個ずつの主柱穴が想定できる。隣のP7・P11・P12は深さ約30cmで、主柱穴の補助的な柱であろうか。北辺はP6とP27が候補としてあげられよう。P10

は貼床がかぶり、床構築時に埋められたことがわかる。方形プランのP2・12・15・26などは、北隣の掘立柱建物址SB8の柱穴と形状がよく似ている。

床は黄色粘質土まで掘りくぼめられ、堅く締まっている。

カマドは北辺東寄りに石組みで構築されている。西壁は石が1個しか残っておらずその石も動いた形跡がある。西隣のP3にカマドに使用したと推定される石が転落している。東壁は20~30cm角の石を4個、焚き口から奥へ向って高くなるように立て並べている。中央に支柱が立つ。規模は幅推定50cm、奥行き80cmと他の例に比べやや細長い。遺物はカマド内に裏が大破片で2個体分以上あったほか、東隣のP8周辺から灰釉陶器広口壺の口頸部や、黒色土器小型坏完形品が出土している。また、住居址上面の黒色土中からも小片が多く出土している。P20は住居址と方向が同一で、住居址に伴うものと考えている。埋土は黒色土に黄色粘質土ブロックが混じった土で、住居址の埋土に切られている。しかしP10のように上面に貼り床はない。出土遺物は、住居址埋土には散在したが、P20からはほとんど出ない。

なお、当該住居址を中心とするQ-4~7区はふいご羽口・鉄滓が集中して出土しており、鍛冶の存在が推定される。

(8) H20号住居址 (図36)

23P・Q-6区にありH19号住居址に切られている。確認面からの深さは5cm未満と浅い。南辺および東辺の一部は壁を検出しているが、他は貼床の範囲と遺物の分布から推定している。その推定によると南北2.7m×東西3.3mの長方形プランとなる。床は黄色粘質土まで掘り込まれておらず、黄色粘質土塊を含む黒色土を叩き締めて貼床としている。P1・P2が主柱穴の候補となるが根拠は弱い。遺物は上面黒色土中と床面上より少量出土している。

(9) H21号住居址 (図39)

23P・Q-7・8区にあり、SB8と重複する。S・B8との切り合い関係は確かめられていない。2本柱の浅い住居址で、西辺は確認していない。主柱穴を中心に西辺を推定すれば、南北2.5m×東西3.0mの長方形プランとなる。床は高位の東側では黄色粘質土まで掘り下げられているが、西側はおそらく黒色土が床であったと考えられる。主柱穴は壁に外接してあり外側が深くなっている。つまり柱は壁の外側に立つ。

カマドは南辺の東端に石組みで構築されている。残りは良い。側壁は東西とも30cm角の石を立て、奥壁は15cm~20cm角のひとまわり小さい石を並べている。中央奥寄りに支柱を立てる。規模は幅50cm、奥行き70cm。特色は大きな板石が2枚かぶせられていることだ。板石の下に裏を主体とする土器が集中していたが、完形に復元できる個体はない。焚き口の北に接して浅いピットP3があるが、P3からは焼土や炭が出土したものの遺物の出土は少ない。

(10) H22号住居址 (図37・38)

今年度調査では最も大型の住居址で出土遺物も多い。23O・P-12・13区にありH13号住居址・SB9に近接する。プランは南東隅がややいびつな長方形で、南北5.0m×東西4.0mをはかる。主柱穴は柱穴の深さ・位置などからP6~8・13・14・16・17・33・39と考えられる。中でもP15・16・33・39が中心柱であろう。他にも西壁ぎわのP2・18・19・27・29~31や、P26は重要なものと思われる。床は東南隅のP12からP33に至る一角をのぞき、平坦で堅く締まっている。壁の立ちあがりは垂直に近い。

特色は周囲に方形のピットがめぐることだ。P3~5・20・32・40で、P41・37が加われば一周する。土層観察ではP14は住居址埋土を切り、P20では住居址埋土に切られるように観察されたが、切り合い部分が少なくどちらともいえない。ピットの形状や位置などから一連のものと考えたい。用途は今のところわからないが、P37は一連のものとするれば柱穴であろう。

もう一つの形態上の特色は南辺の中央が住居内に突出していることだ。P36は埋土が他とずいぶん異なるので住居址以前の穴と考えれば、主柱穴P33・39の間が住居内に突出することとなる。そしてこの突出部は内にゆるく傾斜する。あるいは入口か。

カマドは原形をとどめていないが、おそらく石組みで、焼け石の集中してあった東辺南寄りP25付近に構築されていたものと推察される。出土した焼け石はカマド壁体に格好のものや支柱と考えられるものである。

P1は焼土や炭を多量に含むビットで、上層より遺物の出土は多かったが、下層より完形の環類がまわって出土した(図38)。住居廃棄時の祭祀跡か。しかし環類は置き並べられてはいないし、完形品のみではない。

出土遺物は量および種類とも豊富で、石製丸柄・軽石などがあり、環は100個以上を数える。

(1) H23号住居址 (図40)

23N・O-13・14区にあり、H22号住居址・SB9に近接する。西壁は調査地外へ延びるが、柱穴より推定すれば、南北3.7m×東西推定4.1mの長方形プランとなる。東西隅に接して方形の浅い土坑があるが、住居址に伴うものかはわからない。その土坑の接する住居址東南角は住居内に「L」形に入り込んでいる。

主柱穴はP3-6の4本だが、全体に南に寄っている。床は東南隅の一部をのぞき堅く締っている。壁の立ちあがりは垂直に近い。

カマドは焼床や焼土のある東南隅に構築されていたものと推定され、住居内よりカマドに使われたと思われる石が数個出土しているので、石組みのカマドと考えられる。

P1およびその南から完形ないし略完形の環が6個と・甕が大破片で出土している。またカマドに使われていたと思われる石が出土している。石のうちP1とP2の間にある大型のものは置かれたような恰好であった。H22号住居址同様に住居廃棄時の祭祀跡か。

P2は上面に貼り床があり、埋土は住居址埋土と変わらない黒色土で、遺物も出土している。形態がP1とよく似ており、P1の前身とも考えられる。

遺物はP1に集中していた他は、小片が少量散在していた。

(2) H24号住居址 (図41)

23O・P-17・18区にあり、H25・26号住居址に近接する。南北3.7m×東西4.0mの長方形プランで、東南隅がやや丸くなる。検出面からの掘り込みは浅く、西辺は検出していない。

住居内には主柱穴と考えられるビットはない。床はカマド推定位置以外は堅く締っている。

カマドは、焼床のある北辺西端に構築されていたと思われ、住居内からカマドに使用されたと推定される石が出土しているので、おそらく石組みであったと考えている。

遺物は散在的に少量出土しているが、中に鉄滓1片がある。

(3) H25号住居址 (図41)

23O・P-18区にありH24・26号住居址に近接する。南北3.6m×東西3.5mの略正方形プランで、東南隅がやや張り出している。検出面からの掘り込みは浅い。床はP5・P7・P8・P10に囲まれた中央のみが堅く締っていた。

主柱穴は形状・深さなどからP8・9・2・12が候補としてあげられる。P8とP9が椽を支える柱であろう。

P1からは完形の環2個が正位で重ねた状態で出土した。下の環には「本」と読める墨書がある。

(4) H26号住居址 (図42)

23P-19・20区にありH24・25号住居址に近接する。本住居址は掘り込みの肩は検出しておらず、貼床

の範囲と焼土を含むピット、柱穴などから範囲を推定した。

主柱穴はP8とP11で、H13号住居址のように4本柱が壁に接してある形と推定した。P1、P2～6、P15・16、P19～22は焼土を多く含んだピットで、埋土は似ている。P1からはカマドに使用したと思われる石が出土している。この焼土を含むピットを囲む形で住居を推定した。南北はおよそ4m程となる。

遺物は焼土を含むピットから主として出土しているが量は両掌に2杯分と少なく、完形に復元できるものはない。

⑩ H27号住居址 (図42)

180-2区にあり、H28号住居址に近接する。南北3.6m×東西3.2mのやや台形に近いプランで、畑の耕作が漸移層までおよび検出面からの掘り込みはごく浅い。主柱穴と思われるピットはない。床は中央のみが強く締っている。

カマドは焼床のある南辺西隅にあったものと思われる。

遺物はP1からまとまって出土した他はごく少ない。黒色土器片口鉢が出土している。

⑪ H28号住居址 (図43)

180・P-3・4区にありH28号住居址に近接する。掘り込みは浅く北辺は検出していないし西辺は畑の擾乱で切られている。北辺は東辺北端がやや曲がり始めていることや、貼床の範囲などから図の点線の位置に求めた。そうすると南北3.0m×東西3.0m以上の長方形プランに復元できる

主柱穴はP8とP11が候補であるが、いずれにしても樫持柱2本の構造となる。

カマドは焼土が多く出土したP3と思われる東辺南寄りに推定される。

遺物はP3を中心に出土しているが少ない。

⑫ H29号住居址 (図43)

18P-9区にある。掘り込みが浅く南辺と東辺のごく一部が確認された他は、貼床や焼土から北辺を推定した。西辺は擾乱で切られている。そうすると南北3.6m×東西3.5m以上となる。

主柱穴はP4とP5が候補だが根拠は弱い。カマドは焼土の細長くあった東辺北寄りに推定される。遺物の出土は少ない。

⑬ H30号住居址 (図44)

周溝と排水溝をもつ。上野丘陵北端の8区にあり、標高311.5mの所にあたる。従来は上野B遺跡としており発掘作業中はB-SIO1と命名していたが、今報告では通し番号でH30号住居址とした。

住居址は南北2.6m×東西3.3mの小型隅丸長方形プランで、畑の耕作のため検出面からの掘り込みは浅い。壁ぎわに周溝がめぐり(溝1)、溝1に連続して住居内から住居外へ長く延びる溝(溝2)がある。溝1は溝2に向かって深くなり、溝2は外へ深くなるので排水溝の役目もあったことはまちがいない。床は他の住居に比べ堅さが軟らかい。

主柱穴はP1～P4の4本で、壁に接している。柱穴の深さは浅い。

カマドは東北隅の焼土および土器が集中していた所に推定される。

遺物はカマド以外の出土は多くない。

なお当地点は発掘中も地山からにじみ出る湧水があり溝2西端は常に冠水していた。

⑭ H31号住居址 (図44)

8区H30号住居址の北20mの所にあり、西半分を検出した。東部は調査地外へ続く。掘り込みは浅い。南北2.8m×東西1.4m以上の方形プランの小型住居址と推定される。北辺に沿って周溝らしき落ち込みがあり、柱穴は西辺に並ぶ。出土遺物は少ない。

B 掘立柱建物址

掘立柱建物址の柱穴と思われるピットは数多くあったが、建物としてまとめられたのは2棟である。遺構番号は掘立柱建物址は年代を特定することがむずかしいことから、時代を問わず通番としている。

(1) SB8 (図46)

23Q-7・8区にありH21号住居址と重複するが、切り合い関係は確かめられていない。南北棟の小型の建物で、南北2間(約4.5m)×東西2間(約3.6m)である。柱間寸法は北側柱列が東から1.74m・1.94m、南側柱列が東から1.96m・1.52m、東側柱列が北から2.26m・2.42m、西側柱列が北から1.90m・2.36mと不ぞろいである。また南側柱列中央の柱穴は外にややずれている。柱穴掘形は、一辺30~40cmの方形ないし長方形プランで、柱痕跡の残るものをみれば柱は直径15cm程に推定される。

(2) SB9 (図46)

23O-11区にあり、H22号住居址に近接する。小型の東西棟の建物で、東西2間(約4.1m)×南北1間(1.56m)である。柱間寸法は北側柱列が東から2.12m・2.02m、南側柱列が東から2.0m・2.08mである。柱穴掘形は直径30~40cmの円形プランで、両端の柱穴がより深い。

C 土壇墓・木棺墓

墓と推定される土壇が2基検出されており、これまでの例とあわせて6例となった。

(1) SK82 (図45)

23Q-9区にある。2段墓塚で、上段は東西2.5m×南北1.6mの長方形プラン、下段は東西2.35m×南北0.95mの長方形プランで、上段と主軸をややずらして掘り込まれている。塚底の幅は丘陵高位側の東が0.84m、低位の西が0.74mと東が広い。東が頭位か。深さは0.8m。土層観察から黄色粘質土と黒色土の混土が上・下段ともに埋め戻され、木棺が腐蝕し陥没した後に黒色土が堆積したことがわかる。

遺物は灰粘陶器の完形の椀が中央西寄りの塚底から、正位で置かれていたものが土圧でつぶれたような状態で出土している。ほかに棺に使用されたと考えられる鉄釘が1本出土している。釘には木質が1.5cmの厚さで鋳着しているので板材の厚さの目安となるが、1.5cmでは薄すぎるような気がする。また出土数は1本だが本来はもっと多く使用されていたのであろう。

本土壇は形態や釘の出土から木棺墓と考えられるが、よく似た例が南隣の大倉崎遺跡からみつまっている。

(2) SK49 (図45)

18P-5区にある。南北1.75m×東西0.65mの長方形プランで、深さは検出面から35cm。塚底の幅は北が52cm、南が40cmと北が広い。北は丘陵低位である。遺物は黒色土器環完形品が南隅から出土しているほかに、黒色土器環3分の1片が中央上層から出土している。

本土壇は今のところ土壇墓と考えている。

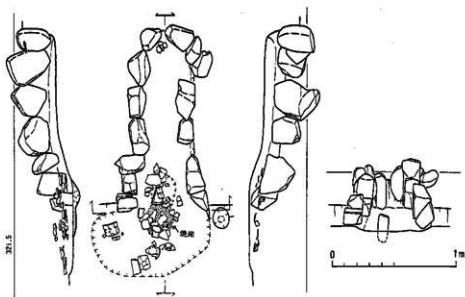
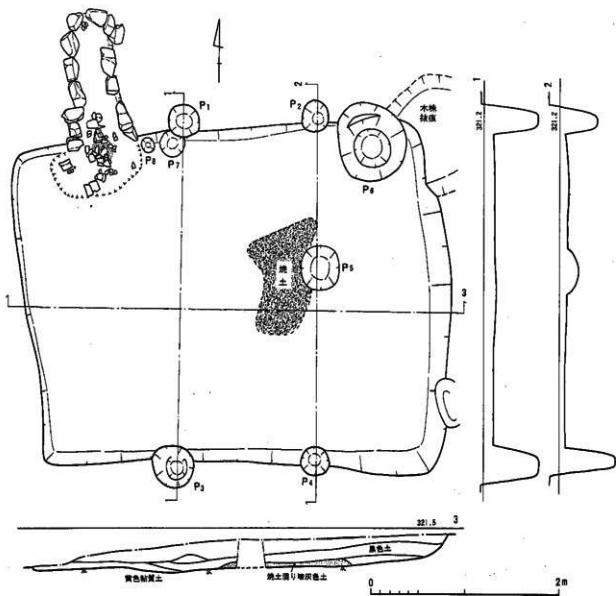


図32 H 13号住居址 1:40 カマド 1:30

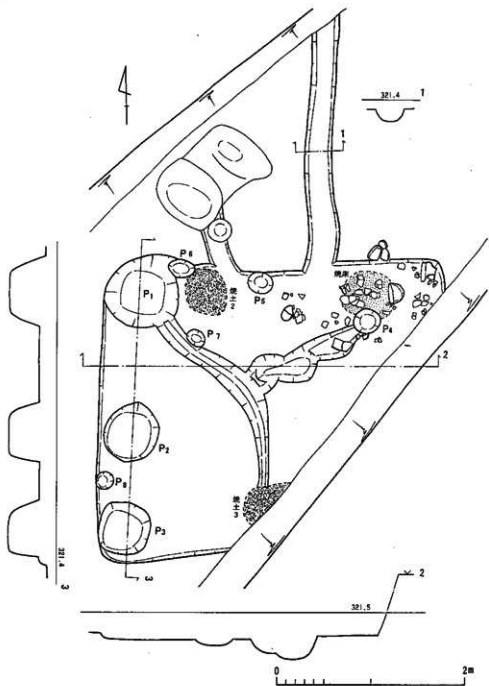


图33 H 14号住居址 1:40

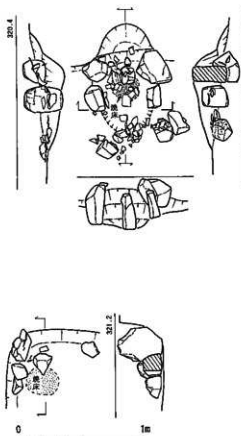
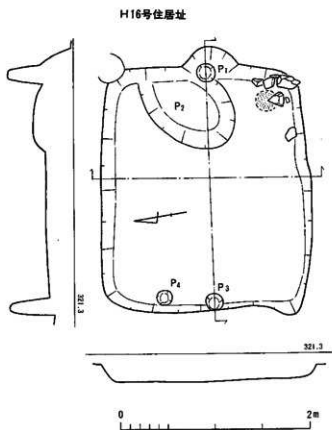
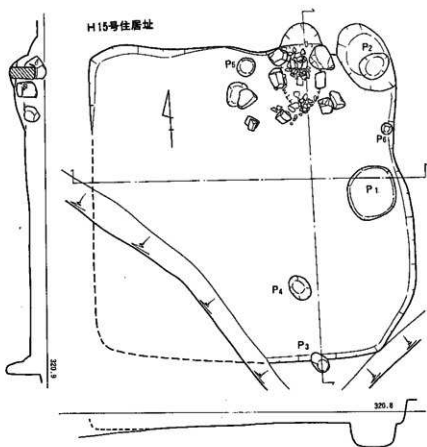


図34 H15・16号住居址 1:40 カマド 1:30

H17号住居址

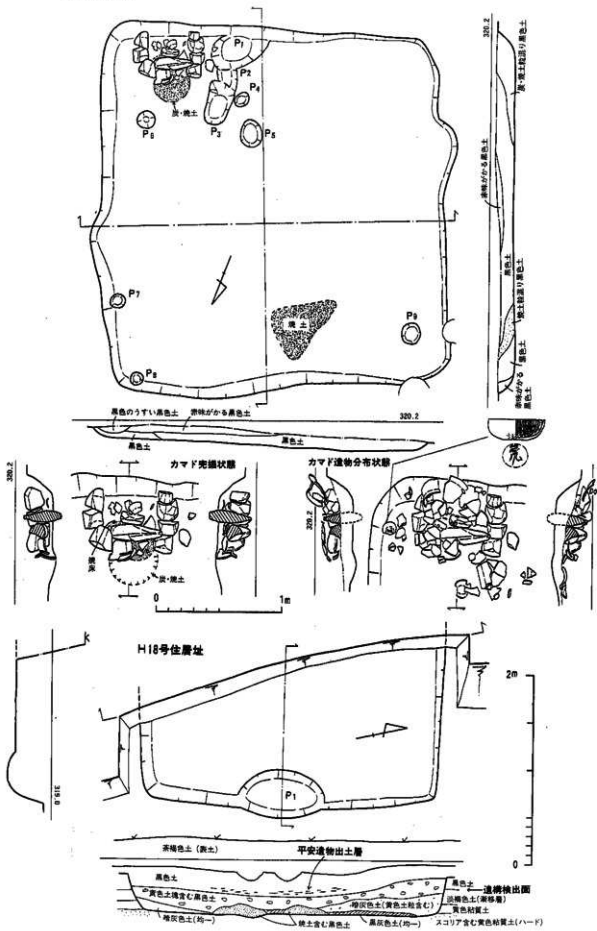


図35 H17・18号住居址 1:40 カマド 1:30

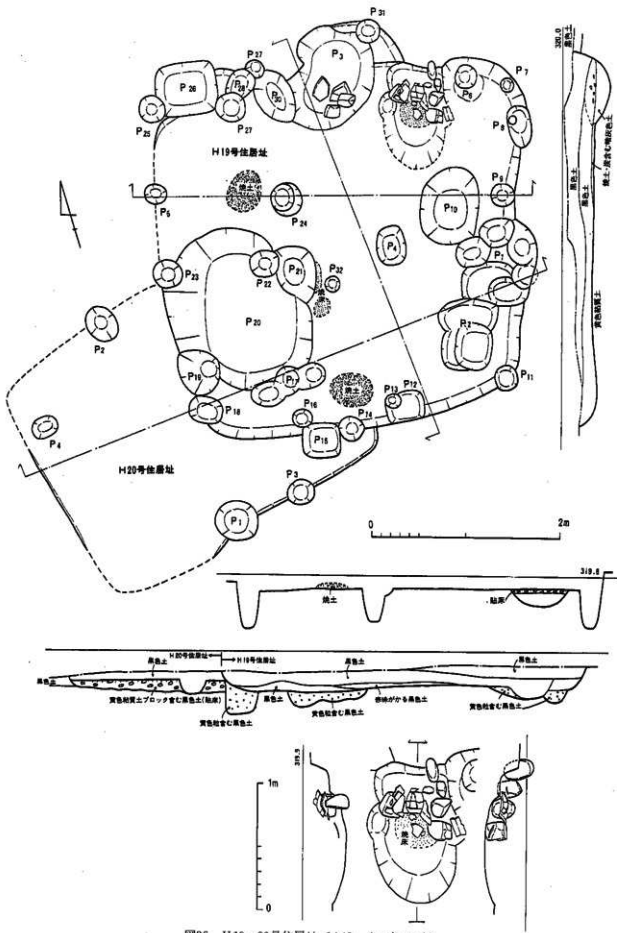


図36 H19・20号住居址 1:40 カマド 1:30

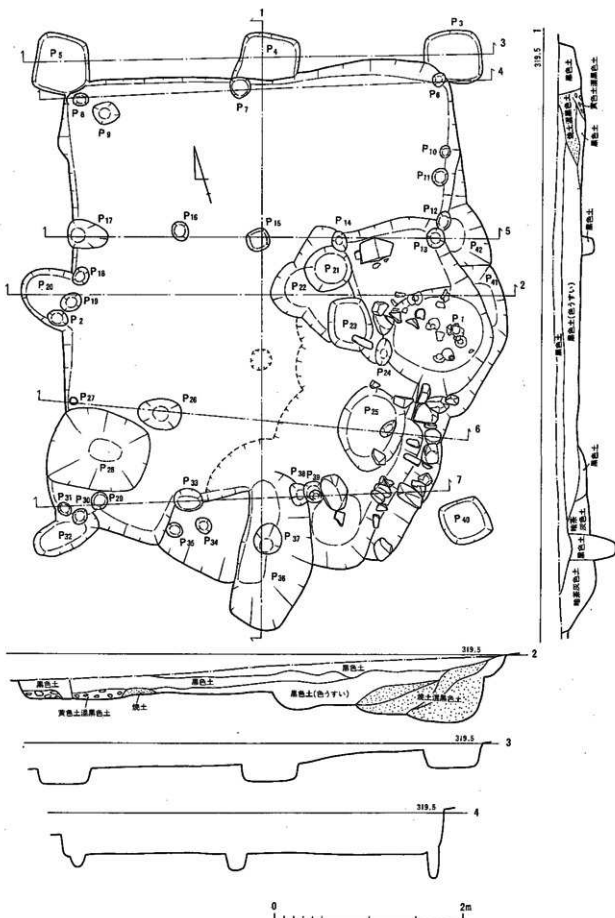


图37 H 22号住居址 1:40

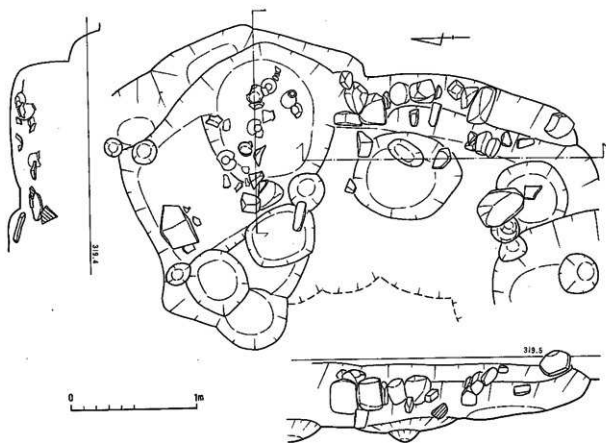
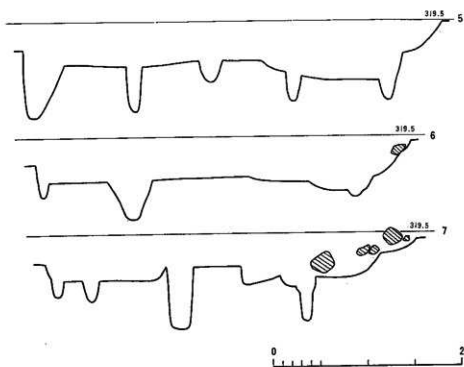


図38 H22号住居址 1:40 カマド 1:30

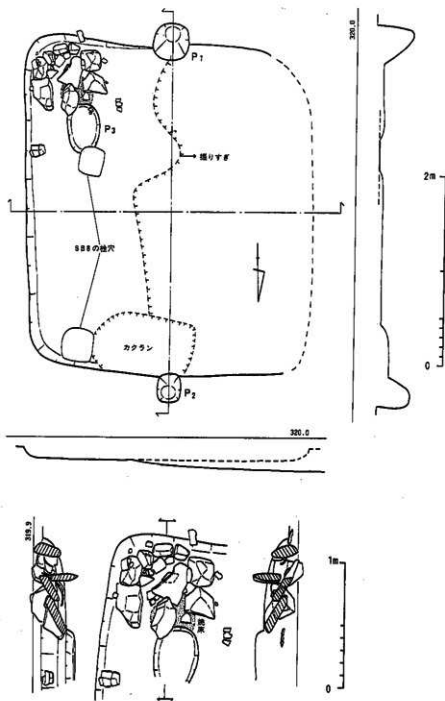


図39 H21号住居址 1:40 カマド 1:30

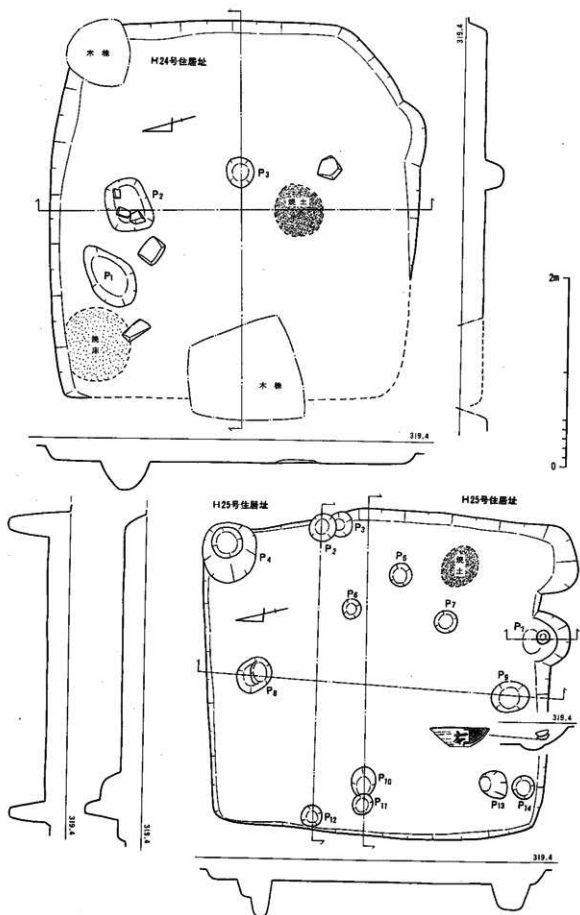


图41 H24·25号住居址 1:40

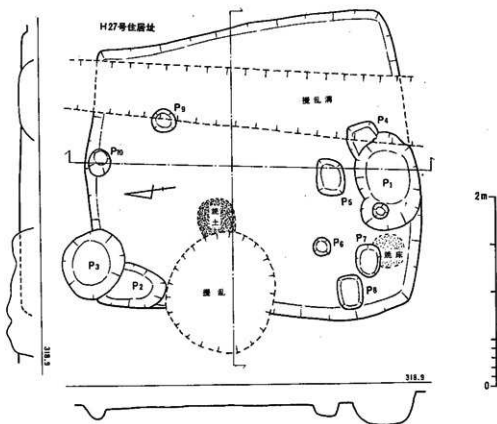
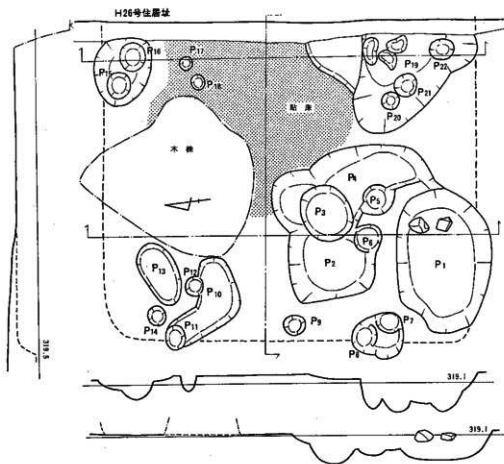


图42 H26·27号住居址 1:40

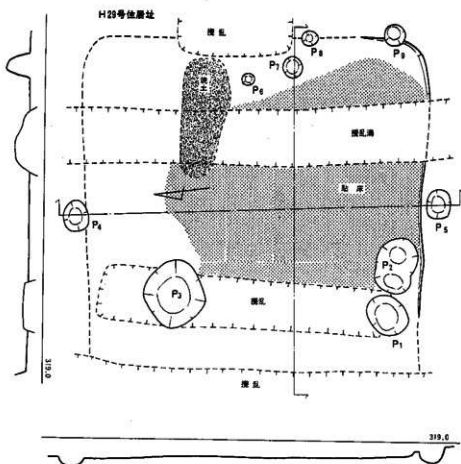
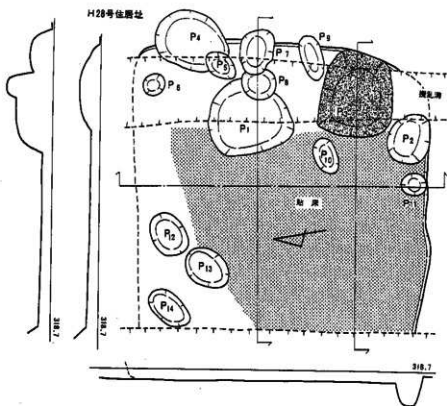


图43 H28·29号住居址 1:40

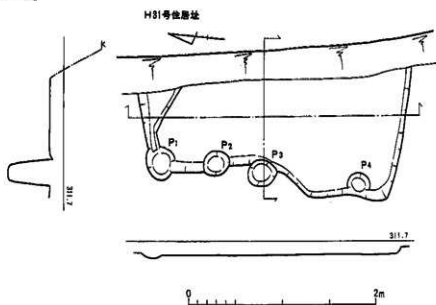
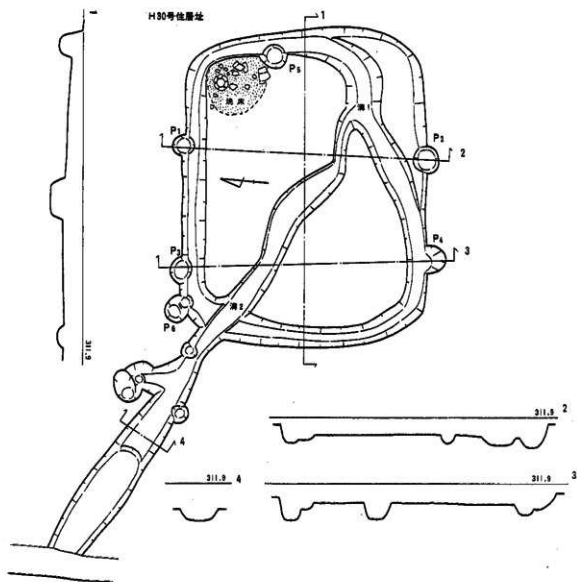
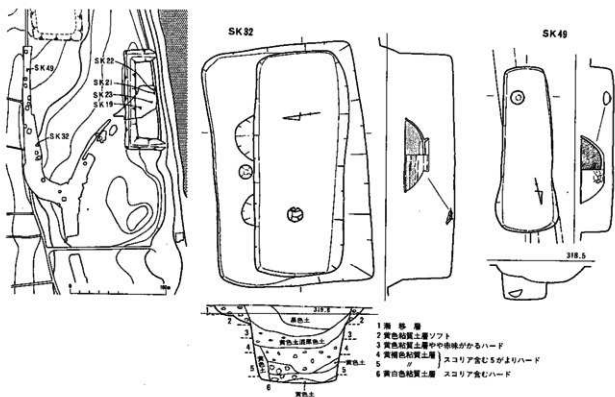


图44 H30·31号住居址 1:40



平成元(1989)年検出土城

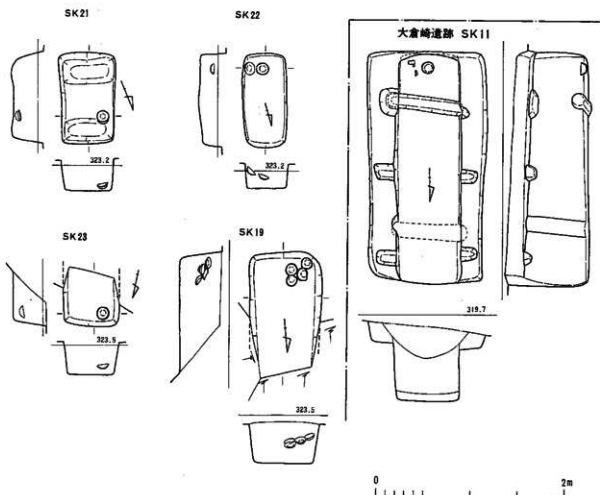


図45 土城墓・木棺墓 1:40

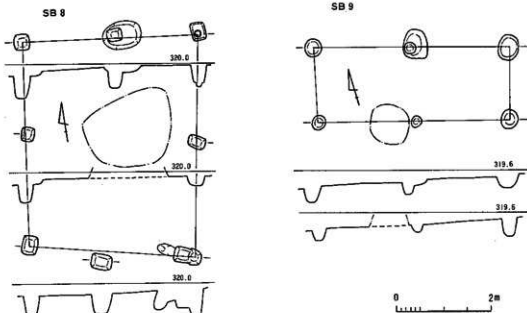


図46 掘立柱建物 1:80

表3 平安時代整穴住居址・掘立柱建物址柱穴一覧表 (床からの深さ:単位はcm)

H13住

No.	直径	深さ	備考
P1	30	50	底に石 2段
2	30	35	
3	40	47	
4	30	54	
5	45	12	
6	80	38	
7	25	9	
8	15	11	

H14住

1	80	40	焼土・炭多し
2	60	40	〃
3	58	40	〃
4	28	23	
5	25	9	
6	23	27	
7	18	15	
8	20	32	

H15住

1	52	30	2段 方形
2	60	27	
3	20	26	

4	20	10	
5	18	6	
6	13	25	

H16住

1	20	42	カマド北隣
2	90×50	14	
3	18	44	
4	16	16	

H17住

1	50	20	カマド周辺
2	30	16	〃
3	35	14	〃
4	16	8	〃
5	22	6	〃
6	20	11	〃
7	16	8	
8	14	14	
9	22	7	

H18住

1	40×90	13	楕円形
---	-------	----	-----

H19住

1	25~40	16~40	複数
2	40~60	10・27	3個重複

No.	直径	深さ	備考
3	90×110	23	石転落
4	32	18	方形
5	25	42	
6	25	26	
7	15	23	
8	25	19	
9	25	40	
10	60×80	18	貼床かぶる
11	25	30	
12	40	13	方形
13	16	50	
14	26	34	
15	40	20	方形
16	20	40	
17	30	16~23	3個連続
18	35	33	
19	42	21	
20	150×170	21	
21	50	18	
22	32	32	
23	30	41	
24	34	34	
25	28	29	
26	56×65	22	方形
27	30	32	
28	28	15	
29	20	11	
30	40	20	
31	25	10	

H20住

1	45	22	
2	30	20	
3	28	10	
4	27	7	

H21住

1	36	33	
2	25	33	
3	50×32	15	

H22住

1	120	30	完形环等出土
2	20	40	
3	60	20	方形
4	60	20	
5	60	18	
6	15	30	
7	20	20	
8	16	15	
9	25	10	
10	10	20	
11	18	10	
12	14	20	
13	18	43	
14	15	45	
15	25	12	
16	18	50	
17	20	57	
18	16	33	
19	20	20	
20	60	23	方形
21	50	26	
22	45	20	
23	44	36	
24	18	36	
25	70	20	
26	32×45	42	
27	10	15	
28	85×105	38	炭多く出土
29	16	20	
30	16	14	
31	14	18	
32	35×75	17	隅丸方形
33	30	51	
34	18	10	
35	18	10	
36	80×160	20	
37	30	40	
38	20	14	

No.	直径	深さ	備考
39	22	52	
40	50	24	方形
41	60	22	
42	65	32	

H23住

1	60×107	30	坏完形品出土
2	60×75	20	上面贴床
3	50	42	2段
4	50	32	
5	27	30	
6	20	16	
7	20	14	

H24住

1	75×44	15	
2	58×45	23	石出土
3	30	22	

H25住

1	50	22	完形坏2重
2	26	43	
3	25	28	
4	60	54	2段
5	24	10	
6	20	25	
7	25	10	
8	36	40	2段
9	40	30	
10	24	20	
11	20	37	
12	22	38	
13	30	35	
14	24	10	

H26住

1	150×100	20	
2	90×70	17	遺物番号 焼土1
3	55	30	"
4	80×170	12	"
5	36	14	"
6	30	20	"

7	25	30	同上P3
8	25	45	"
9	24	8	
10	100×40	10	
11	24	40	
12	20	15	
13	40×70	30	
14	20	10	
15	25	23	遺物番号 焼土3
16	30	20	"
17	15	15	
18	15	16	
19	170×100	25	遺物番号 焼土2
20	20	15	"
21	24	22	"
22	28	34	"

H27住

1	100×65	20	
2	45×55	20	
3	70	30	
4	35	5	方形
5	30	12	
6	20	15	
7	30	20	
8	34	15	方形
9	25	37	
10	25	15	

H28住

1	90	32	
2	45	21	
3	80×95	12	焼土多含 カマドか
4	60×80	20	
5	30	27	
6	25	20	
7	35×45	20	
8	35	40	
9	25×50	35	
10	24×40	20	
11	25	30	

No.	直径	深さ	備考
12	35×45	18	
13	40×50	23	
14	30×50	22	

H29住

1	50	21	
2	40×60	14	
3	60	19	
4	27	12	
5	25	18	
6	12	5	
7	20	24	
8	16	9	

9	23	15	
---	----	----	--

H30住

1	22	10	
2	30	15	
3	25	18	
4	28	12	
5	25	13	
6	25	11	

H31住

1	30	38	
2	28	34	
3	30	45	
4	25	20	

2 遺物

A 竪穴住居址出土土器 (表4 図47~57)

(1) H13号住居址出土土器^(註1) (図47)

黒色土器杯・皿、土師器杯・甕、須恵器甕、灰釉陶器瓶がある。

黒色土器杯は体部が内湾し深い形態のもの(1・3~5)と、体部が開き浅いもの(2・6・7)がある。底部の調整は5をのぞいてすべてクロ糸切り痕が残る。5は内外面ともヘラミガキされ黒色処理されている珍しいものである。

黒色土器皿(8)は口縁部小片だが、高台のつくものと思われる。

土師器杯(9)は、口径約11cmの小型品で、焼きの悪い須恵器かもしれない。

10は土師器小型甕で、P6から約3分の2個体分が出土した。外面に煤が多量に附着している。

土師器甕(11~16)は口径20cm~24cm、器高推定25cm程のもので、口縁端部がやや内傾するもの(11~13)と平坦ない丸くおさめるもの(14~16)がある。内傾するものは越後型といわれるが、典型的な越後型(166・258・262など)とは異なりシャープではない。

17は須恵器の甕体部片で、内面に細かいハケが施されている。

ほかに図示していないが、灰釉陶器瓶の肩部小片が1点出土している。

(2) H14号住居址出土土器 (図48)

黒色土器杯・甕、土師器甕、灰釉陶器瓶がある。黒色土器杯の底部調整はいずれも糸切り痕をそのまま残している。土師器甕は小型品(21・22)と中型品(23~27)がある。確かめられる限りでは、小型品の底は平底、中型品は丸底である。胴下半の調整はケズリを加えるもの(23・26)と加えないもの(27)があり、胴部片をみるとケズリを加えるものがやや多い。口縁端部はいわゆる越後型はない。

(3) H15号住居址出土土器 (図48)

黒色土器杯・鉢、土師器杯・甕がある。黒色土器杯は図示したものは3点だが、13個体以上ある。28は大型の杯で口縁部に油煤が付く。大型品でも灯明用に使用されている。底部の調整は1点のみヘラケズリがあるが、5点は糸切り痕をそのまま残す。

38は黒色土器の鉢で口縁端部が肥厚して内傾する珍しいものである。

土師器杯は図示していないが2点あり、形態は黒色土器杯に等しい。甕は小型品が2点中型品が6点ある。中型品の胴下半の調整はケズリとナデである。不思議なことに甕の底部片が出土していない。

(4) H16号住居址出土土器 (図49)

黒色土器杯、土師器甕、灰釉陶器碗・瓶・小壺がある。

黒色土器杯は全形のわかるものはないが、体部が強く内湾して深いものはない。しかし底部調整はヘラケズリ3、糸切り痕残るもの3でヘラケズリの割合が高い。

灰釉陶器碗(46)は高台の断面形が三ヶ月状でなく、また見込みと高台端に直接重ねて焼いた底がのこる。瓶(47)も底部片で内底に灰釉が厚く付着する。小壺(48)は頸より上がないだけのもので外面の灰釉はごくうすい。

(5) H17号住居址出土土器 (図49・50)

カマドから多量の土器が出土した。黒色土器杯・皿、土師器甕、須恵器甕がある。

黒色土器杯は16個体以上あり、形態も多種ある。深く古相を呈するもの(50・51など)や、体部が強く内湾するもの(52)が目立つ。底部の調整はヘラケズリ7点、糸切り痕が残るもの6点とヘラケズリの割合が高い。皿はいずれも高台付のものである。

土師器甕は小型品(63~66)と中型品(67~73)があり、中型品は完形に復元できたものをはじめ、完形近くに復元できる破片数がある。中型品はいずれも胴上半は横ナデ、胴下半は縦のヘラケズリののちナデを加えている。ちなみに67~69の容量はいずれも頸より下で、約5.2ℓ(2.9升)となる。72・73は口縁端部が内側へ折り返され肥厚するものである。

74・75は須恵器甕体部片でいずれも底近くの破片である。

(6) H18号住居址出土土器 (図50)

土器出土量は少なく両手一杯程である。黒色土器杯と土師器甕小片がある。

黒色土器杯は2点あり、76は略完形品で黒色がうすい。底部調整は糸切りとヘラケズリが1点ずつである。

(7) H19号住居址出土土器 (図51)

黒色土器杯・皿・鉢、土師器甕・鉢、須恵器杯、灰釉陶器碗・瓶がある。

黒色土器杯は大型品(78・79)と普通のもの(80~84他)、小型品(85)がある。87は須恵器杯の形態を模倣したものか。底部の調整は図示したもの以外も含めて、ロクロケズリ3、ヘラケズリ9、ヘラケズリからヘラミガキ1、ロクロ糸切り痕が残るもの14と、ケズリ等の調整を加えているものの割合が高い。

土師器甕は表・図示したもの他3~4個体ある。基本的な形態・調整はよく似ている。

土師器鉢(102)は内湾する形態のもので珍しい。

灰釉陶器碗(104)はハケ塗りと思われるもので、見込みに磨痕がある。墨は認められず少し赤味がかかるので、朱墨を磨ったのかもしれない。

(8) H20号住居址出土土器 (図52)

外面のみの検出のため出土量は少ない。図示したものでははずすべてである。黒色土器杯、土師器杯、甕がある。

土師器杯(108)は形態が他の例とやや異なり体部の内湾が弱い。土師器甕(113)は口縁部が強く外方に開くが、小片なのでたまたまいびつな所が残ってそこを实测しているせいかもしれない。

(9) H21号住居址出土土器 (図52)

黒色土器杯、土師器杯・甕がある。いずれもカマド周辺の出土である。

120は底部をのぞいて略完形、119も復元しえなかつたが約1個体分の破片がある。また図示しなかつたが須恵器環に似た土師器環の口縁部片がある。

(10) H22号住居址出土土器 (図52~54)

住居址北・東の覆土中から多量に出土しているほか、住居廃棄時の祭祀土坑と推定されるP1の底近くから略完形の坏などがまとめて出土している。石製丸瓶も当住居址から出土している。

黒色土器環・甕・鉢、土師器環・甕・壺・鍋、須恵器壺・瓶・甕、灰粘陶器碗・皿・瓶がある。

黒色土器環は40%以上残っているものが11個体あるほかに約100個体分くらいの破片が出土している。図示していないもので表示したものは口縁部片では約4分の1周以上残っているもの、底部片では底が略100%残っているものに限っている。坏の形態的には、体部が内湾して深いもの(121・126など)と、体部が直線的で開き浅いもの(136・141など)があり6:4ぐらいの割合で内湾するものが多い。法量は直径15cm以上の大型品と、直径11~13cmの中型品、直径10cm以下の小型品があり、中型品が最も多い。中には直径19cmをはかるものや底部径8.5cmの特大的なものもある。底部調整は、ロクロケズリが1、ヘラケズリが2点あるほかはすべてロクロ糸切り痕をそのまま残す。高台の付くものは3点のみである。

135には墨書(「万」か)がある。

土師器環は量が少ない。図示した3点を含め数個体である。

土師器甕は破片数はコンテナ約1個分あるが完形に復元できるものはなかつた。形態は基本的には倒卵形の胴部に短く外方に開く口縁部が付くものと思われるが、平底のものも少しあると考えられる。また中には頸の屈曲が弱いもの(155・163)も含まれている。調整はロクロナデのち胴下半を叩いているもの(187・188)や、ケズるものがある。内面はロクロによるハケいいわゆるカキ目を施すものがある(152・153など)。口縁端部の形態は内傾するもの(151・161など)とそうでないものがあるが、他の点では両者は等しい。

166は鍋と考えられるもので口縁端部が内傾する。171は高台付の壺と思われるものである。須恵器の模倣品か。

須恵器は、坏などの食器はなく、すべて壺・甕類である。甕は大型品と思われる胴部片があり、中には紺色に発色した自然釉がかかる肩部片もある。

灰粘陶器は碗・皿・瓶で、碗は体部下半以下が施釉されないもので、漬け掛けと思われるものである。調整はいずれも体部外面下半にロクロケズリ、外面をロクロケズリないしロクロナデを施している。181は直接重ね焼き痕が見込みと高台によく残る。182の胎土は砂を含まず緻密である。これらは猿投折戸53号窯式、東濃大原2号窯式の古い段階のものと考えられる。181・182は見込みに磨痕があるが墨痕はない。

(11) H23号住居址出土土器 (図55)

住居廃棄時の祭祀土坑と推定されるP1から略完形の坏がまとめて出土している。

黒色土器環、土師器環・甕、須恵器瓶・甕、灰粘陶器環・皿・小壺がある。

黒色土器環は体部が内湾し、底部にロクロ糸切り痕が残るものがほとんどで、1点のみ底部をヘラケズリするものがある。土師器環は黒色土器環に比べて体部が開き浅い。

土師器甕は完形に復元できるものではなく小片が多い。いずれも形態が似ているが、214は大きく開く口縁部をもち特異である。胴下半を叩くもの(220)がある。

灰粘陶器は図示した4点のみ。218には見込みに磨痕がある。須恵器は図示していないが、瓶・大甕の胴部片がある。

(12) H24号住居址出土土器 (図56)

出土量は少なく両手2杯程である。黒色土器環、土師器甕、須恵器四耳壺がある。黒色土器環は体部が内湾する。底部調整は1点がロクロケズリ、他の5点はロクロ糸切り痕が残る。甕の胴下半はヘラケズリであり、叩きの破片はみられない。

⑬ H25号住居址出土土器(図56)

P1から完形の環が2個重なって出土し、1点は墨書がある。

黒色土器環、土師器環・甕、須恵器環・四耳壺がある。

黒色土器環は口径の割に底径が小さく浅いものが多い。224の墨書は「本」か。土師器甕の胴下半は平行ないし格子タタキが目立つ。

須恵器環(230)は焼成は須恵器だが、形態・成形ともに黒色土器環に等しい。

⑭ H26号住居址出土土器(図56)

焼土坑P1～P6、P15・16、P19より出土したものを本住居址出土品としている。出土量は両手に3杯程である。

黒色土器環、土師器環・甕、須恵器甕、灰釉陶器碗がある。黒色土器環の底部調整はヘラケズリが2、ロクロ糸切り痕が残るものが2点である。

灰釉陶器碗は見込みに磨痕があり朱墨の痕跡がある。

⑮ H27号住居址出土土器(図56)

出土量は両手に2杯程と少ない。黒色土器環・鉢、土師器甕がある。黒色土器環は体部が内湾し底部にロクロ糸切り痕が残るものである。鉢は片口のもので全形がうかがえる資料は始めてである。

⑯ H28号住居址出土土器(図57)

出土量は両手に2杯程と少ない。黒色土器環、土師器環・甕がある。黒色土器環はいずれも口径13cm程のもので体部が内湾する。甕は口縁部の開きが大きい。

⑰ H29号住居址出土土器(図57)

出土量は両手に1杯程とごく少ない。表・図示のほかに土師器甕胴部片が少量ある。

⑱ H30号住居址出土土器(図57)

本住居址は上野丘陵の北端の8区にあり、周溝と排水溝をもつ。遺物はカマドから出土している。黒色土器環、土師器甕、須恵器環がある。

土師器甕は3個体ありいずれも完形に近く復元できる破片がある。口縁端部がやや異なる以外形態・調整とも同じ。特色は他の住居址出土例に比べ器壁がごくうすいことである。須恵器環(257)は砂を含み軟質である。

⑲ H31号住居址出土土器(図57)

本住居址も8区にあり、約3分の1を検出。出土量は両手に1杯程である。262の甕はH30号住居址258とよく似ている。263は口縁部が長い。

注1 ここでいう土器は土器・陶器の総称である。また環と柄については高台をもつものを柄とする意見もあるが本報告では黒色土器・土師器については環、灰釉陶器は柄としておいた。また土師器と黒色土器の区別についても判然としない個体がある。

B その他の遺構出土土器(表4・図57)

(1) SK32出土土器(図57)

木棺墓の副葬品である。灰釉陶器碗の完形品で胎土は緻密である。形態・成形手法などから猿投黒笹90号窯式期・東濃光ヶ丘1号窯式期にあてられる。見込みに弱い磨痕がある。

(2) SK49出土土器 (図57)

土坑墓の副葬品である。253は完形品、254は残40%で破片で出土。254は壊してから納められたものであろう。いずれも深い椀形で底部外面をヘラケズリする。竪穴住居址出土例より古式のものである。

C 線刻・墨書土器 (図58)

ここでは線刻土器と遺構に伴わない墨書土器をとりあげる。

1～6は墨書土器でいずれも坏の体部に墨書されている。3は「人」と読めそうだが、他は判読不明。1は口縁部までヘラケズリされる坏に書かれているが、文字というより記号に近い感がある。出土地点をみるといずれも竪穴住居址の近くである。

7・8は線刻土器で両方とも竪穴住居址出土品である。7は黒色土器坏の底部に「X」が細線で刻まれている。8は甕の胴部に「井」が刻まれている。

D 鉄製品・ふいご羽口・鉄滓・石製品 (図58)

(1) 鉄製品

刃器・棒状品・釘がある。11は刀子様の刃器であるが、茎が斜めに付き、刃部は直線部である。

12は木棺の釘である。角釘で頭部も四角い。頭部に木質が1.7cmの厚さで鑄着している。

13・14も釘で13は断面形が隅丸方形、14は四角い。

(2) ふいご羽口

ふいご羽口は7点あり、出土地点はH19～21号住居址付近に集中する。9・10は大破片2点で、推定復元直径7.0cm。先端は溶変している。

(3) 鉄滓

鉄滓は11点あり総重量は575g。15・16は大きい2片で、いわゆる椀形滓である。15が118g、16が135g。鉄滓の出土地点はふいご羽口と同様、H19・20・21号住居址を中心とする一角に集中している。

(4) 石製品

丸柄・砥石・軽石がある。

17は朝官の帯飾である丸柄でH22号住居址より出土、飯山市内では初の出土である。裏面に3か所に装着するための穿孔がある。石材は黒灰色の堆積岩系である。幅4.2cm、高さ2.7cm、厚さ0.7cm。

18～20は砥石で、3点とも破損品ではない。いずれも四面とも使用されている。灰白色で軟質。仕上げ砥であろう。

21は軽石で一部欠損している。灰白色を呈する。浮子であろうか。

H13住

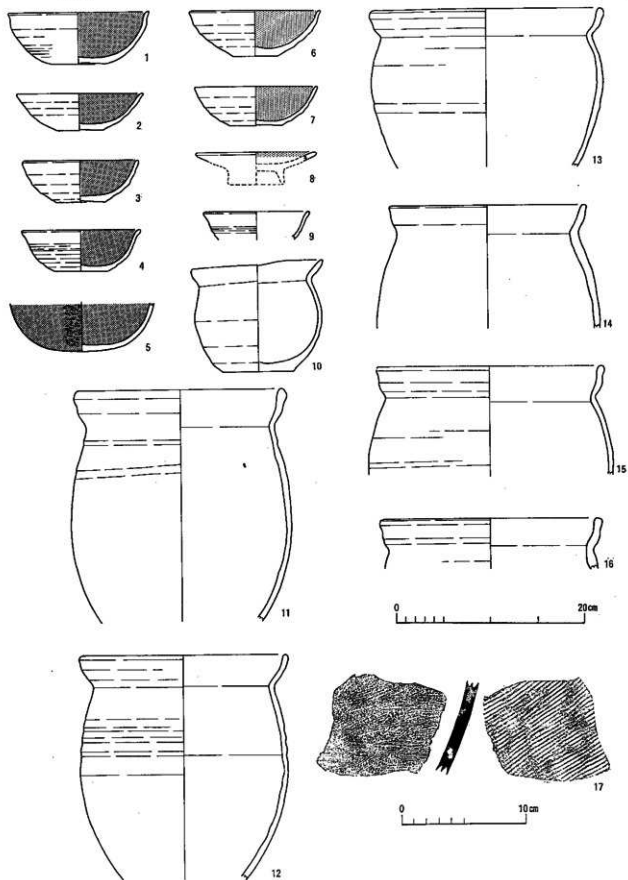


図47 平安時代の土器 1 1:4 1:3

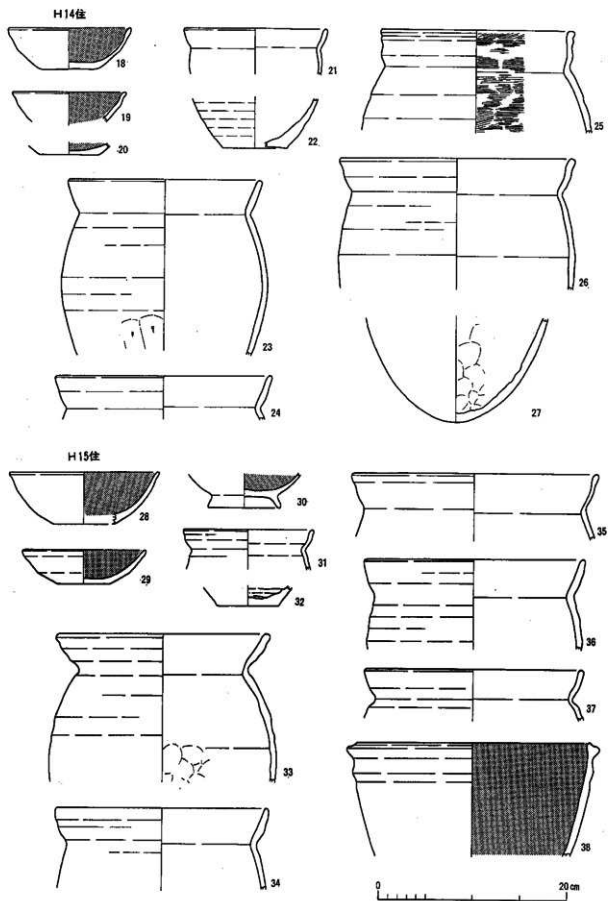
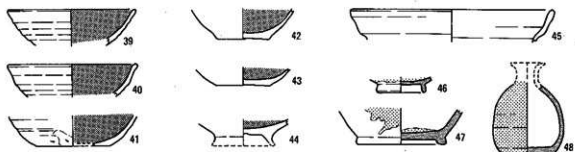


図48 平安時代の土器 2 1 : 4

H16住



H17住

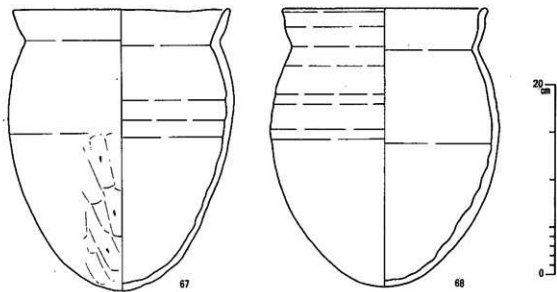
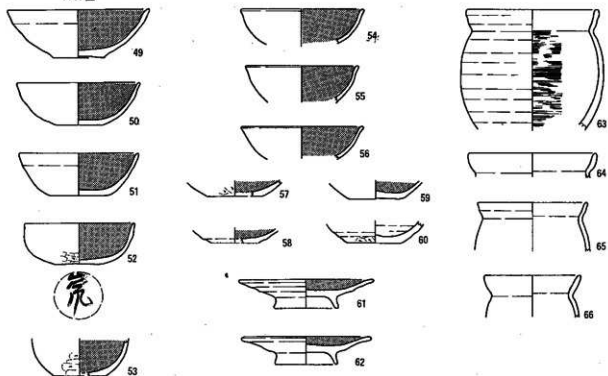
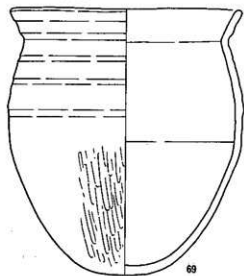
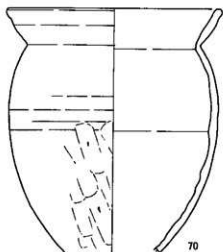


図49 平安時代の土器 3 1:4

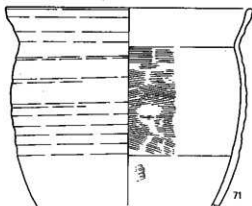
H17住



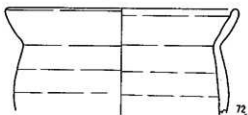
69



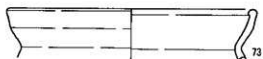
70



71



72



73



74



75

H18住



76



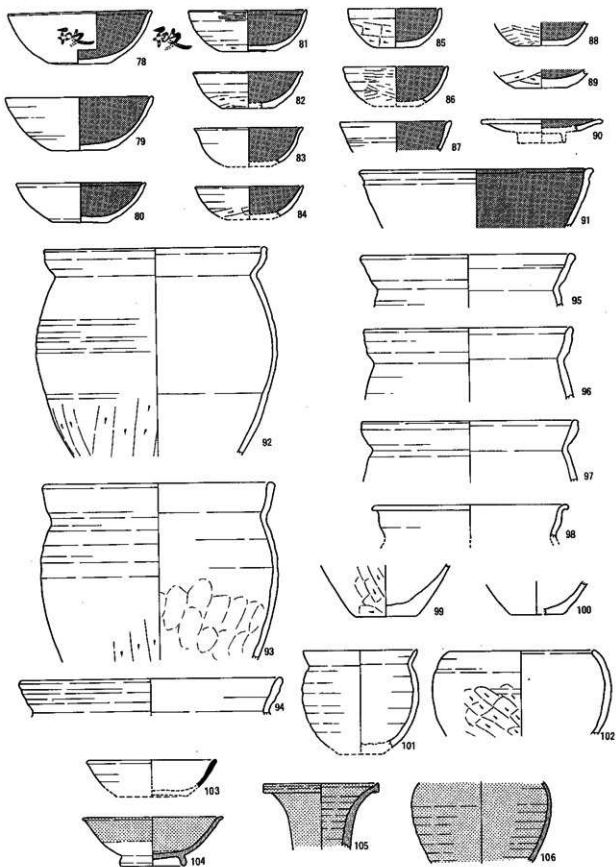
77



20cm

図50 平安時代の土器 4 1:4 1:3

H19住



0 20cm

図51 平安時代の土器 5 1:4

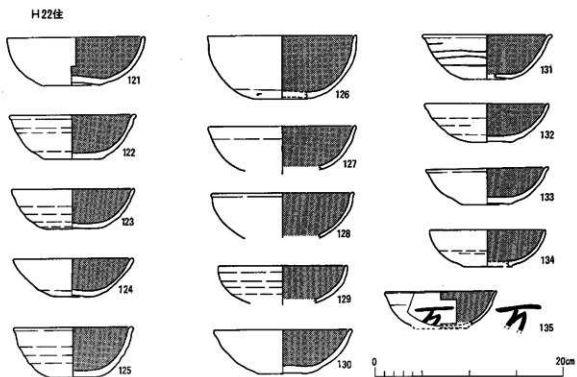
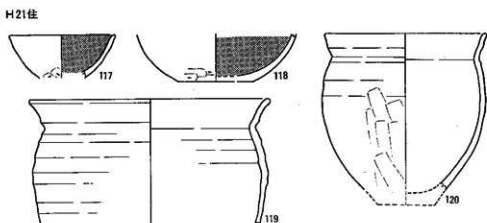
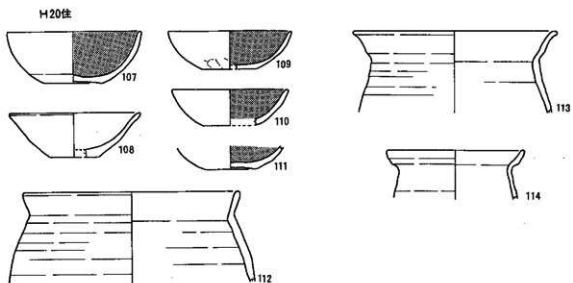


図52 平安時代の土器 6 1 : 4

H22住

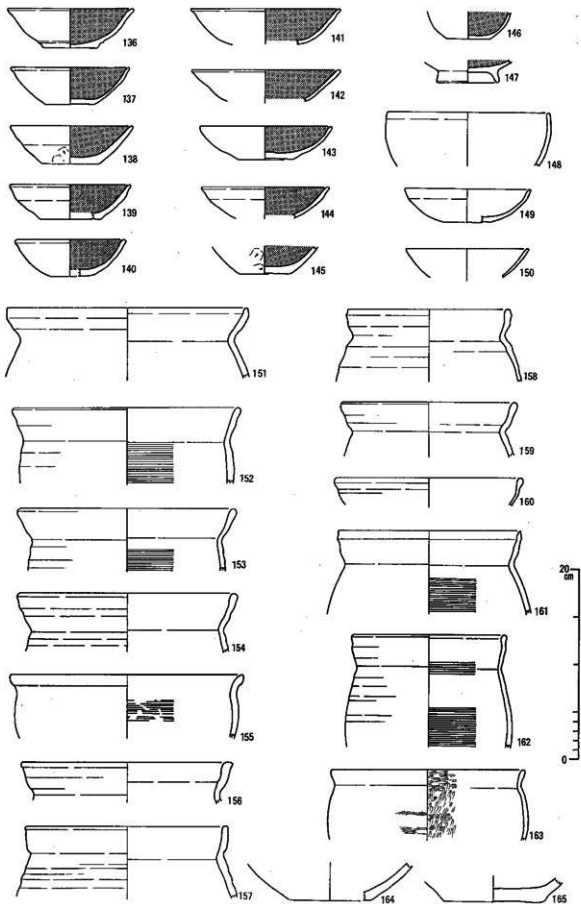


図53 平安時代の土器 7 1:4

H22住

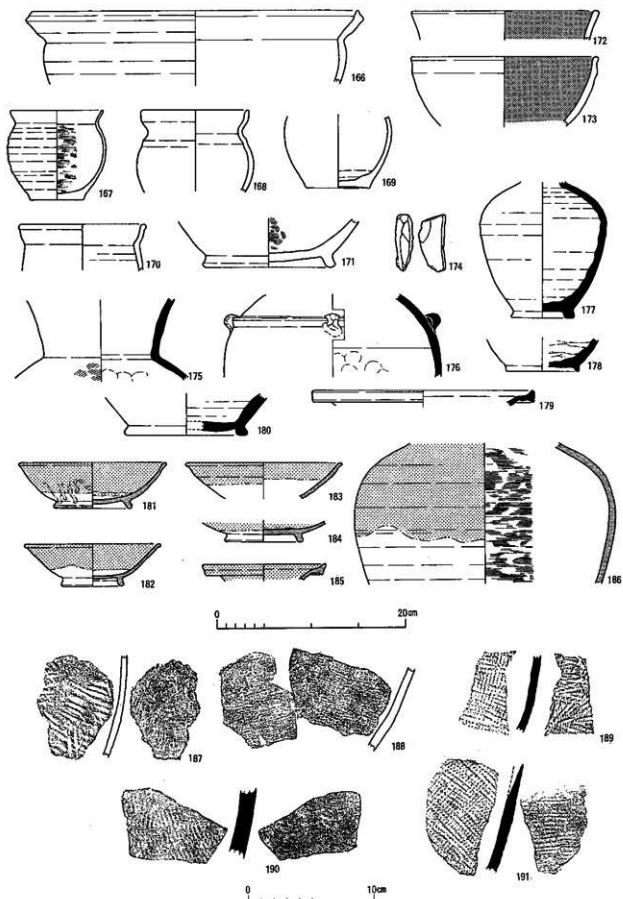


図54 平安時代の土器 8 1:4 1:3

H23住

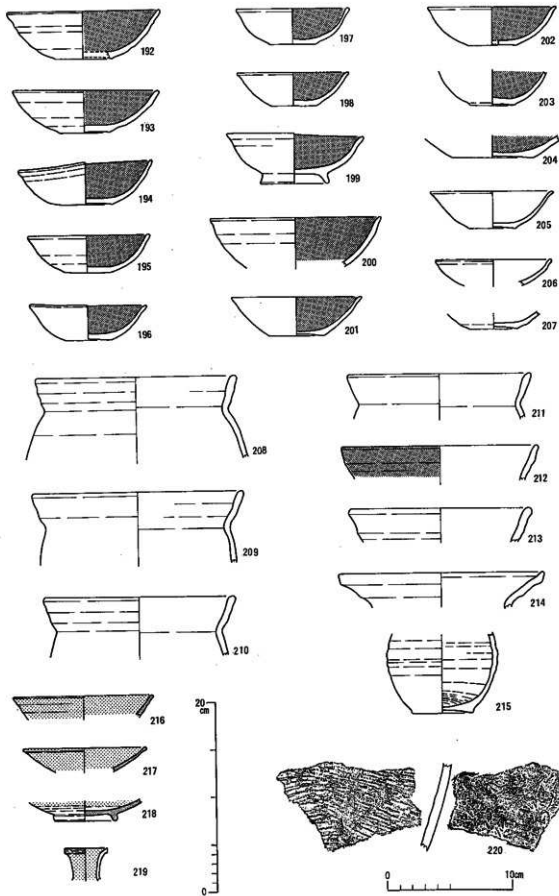
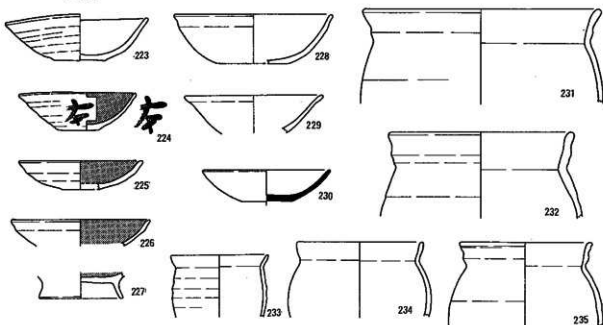


図55 平安時代の土器 9 1:4 1:3

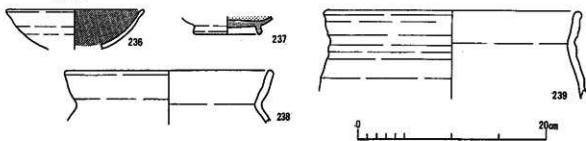
H24位



H25位



H26位



H27位

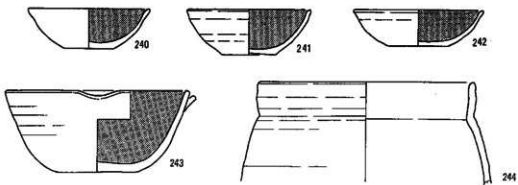


図56 平安時代の土器 10 1 : 4

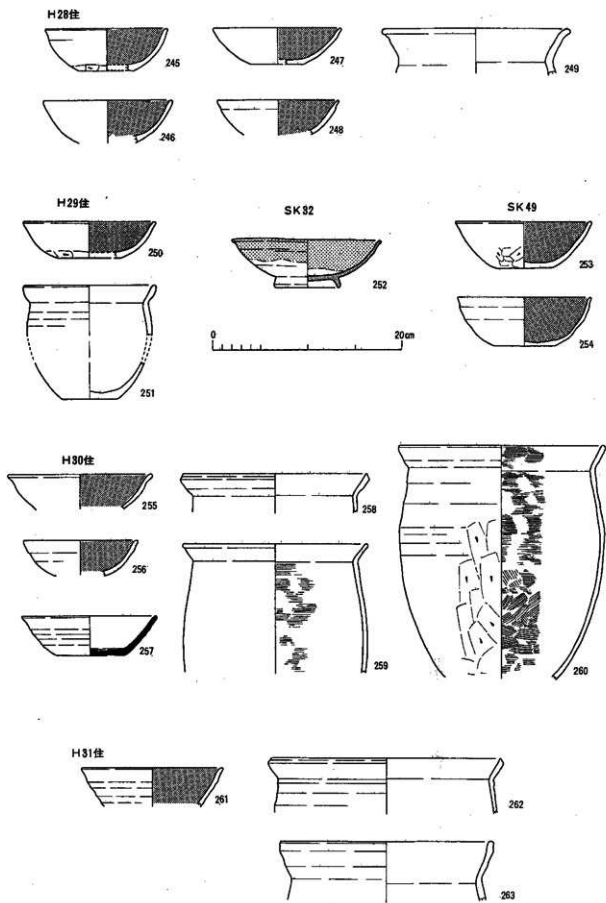


図57 平安時代の土器 11 1:4

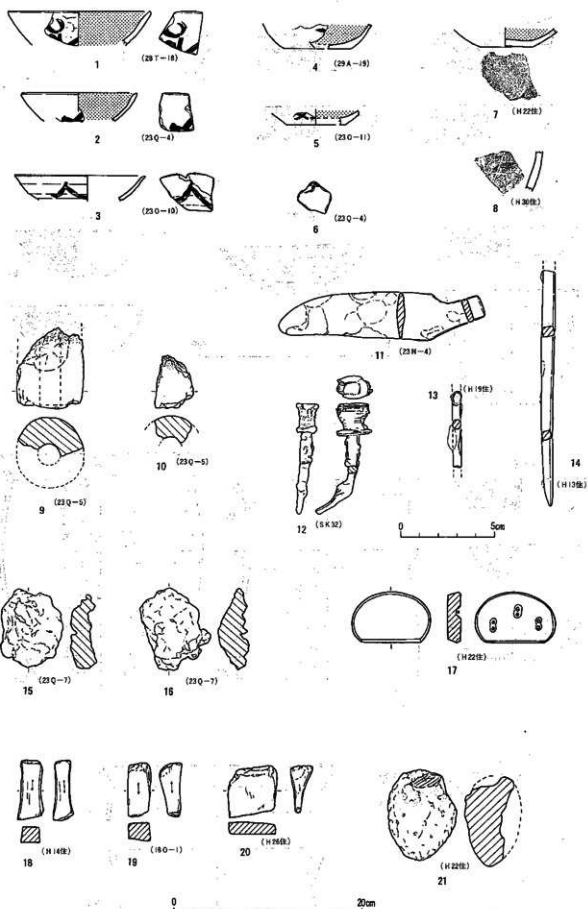


図58 墨書土器(1-6)・線刻土器(7-8)・ふいご羽口(9-10)・鉄製品(11-14)・鉄滓(15-16)・石製品(17-21) 11-14:17:1 2他1:4

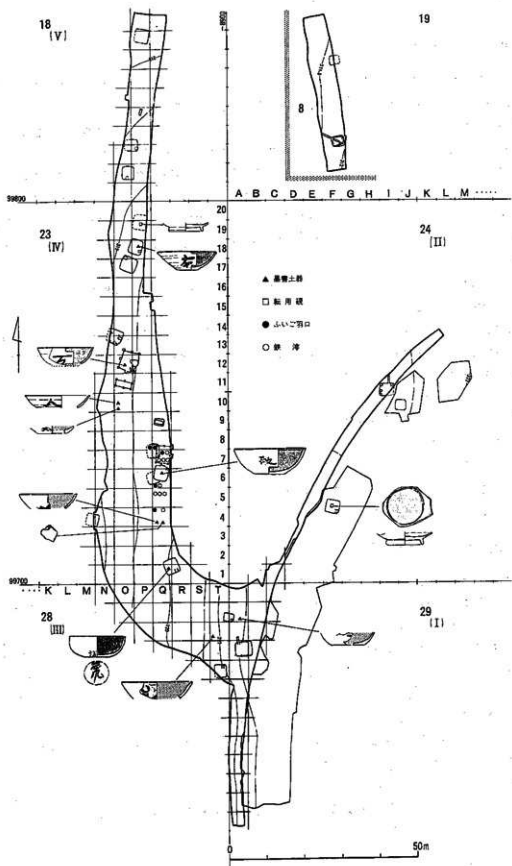


図59 墨書土器・転用碗・ふいご羽口・鉄滓分布図 1:1000 土器 1:8

3 小 結

A 平安時代遺構の年代

今回の調査で検出された遺構には竪穴住居址、掘立柱建物址、木棺墓・土塚墓があるが、いずれもその土器組成をみると、供膳形態では黒色土器がほとんどで、須恵器はごく少量しかみられない。灰釉陶器は椀・皿が少量含まれる。煮沸器も土師器の甕が主体で、他は少量である。貯蔵器は須恵器大甕である。このような組成は前回の調査例と等しく、長野県史の見解でいうⅣ・Ⅴ期にあたる。^(注1)

土器の形態、調査手法をよりくわしくみれば、黒色土器環は内湾が強く深いものでロクロないしヘラケズりされるものが古く、内湾が弱く浅いもので糸切り痕が残るものが新しいとすれば、S K 49が最も古く、次いでH 19・20・21号住居址が古く、次いでH 16・17・13・27・28・29号住居址であり、H 25号住居址が最も新しい。多量に環類が出土したH 22号住居址やH 23号住居址はH 16号住居址の例とH 25号住居址例の両者をもつ。

甕は、丘陵端に位置するH 30・31号住居址例のみが、口縁端が内傾し、器壁がうすい点で他と異なるが、他は形態・調整ともほぼよく似ている。

灰釉陶器はS K 32出土例、H 19号住居址出土例が黒笹90号窯式期（東濃光ヶ丘1号窯式期）におかれ、他は折戸53号窯式期（東濃大原2号窯式期）におかれる。絶対年代は、橋崎・斉藤（1983）^(注2)に従えば、光ヶ丘1号窯式期が10世紀前半、大原2号窯式期が10世紀後半となる。

以上のことより今回の調査地では、S K 32・49の墓がまずあり、後に住居区として竪穴住居等が構築され数軒ずつが数期にわたって継続していたものと考えられる。

丘陵北端のH 30・31号住居址については黒色土器環が小片で比較することはむずかしいが、甕が古い黒色土器に伴う越後型に近いことや、須恵器環の存在から10世紀代でも古い方と考えている。

注1 笹沢浩「古代の土器」『長野県史考古資料編全1巻4』1988

注2 橋崎彰一・斉藤孝正「愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ」愛知県教育委員会 1983

B 石組みカマドについて

今回検出した竪穴住居址のうち半数以上が石組みのカマドが残っており、残っていないものでもカマドに使われたと思われる石が住居址内から出土しているので、丘陵北端のH 30号住居址をのぞき石組みのカマドを有していたものと考えられる。

カマドの構造は、人頭大の自然石を両壁ないし両壁と奥壁に一列に並べ、中央に支柱をもつものである。壁は石のみで、裏込めの粘土等は検出していない。H 13号住居址例では煙道と考えられる施設を同様の石でカマドから住居外へ延長させている。

カマドの位置は住居の角よりやや中央寄り、方位は一定していない。

注意されるのは、H 17号住居址に典型的にみられるように、カマド廃棄の際にカマド内もしくは焚き口周辺まで破壊した土器を置いていることだ。これは土器の量こそ異なるものの遺存したカマドにはすべて認められる。カマド廃棄時の祭祀と考えられる。

なお、H 22・23号住居址は住居廃棄時に住居の一辺に穴を掘り、環類を納める祭祀を行っていると考えられている。

C 遺跡の性格

上野丘陵のこれまでに検出された平安時代の遺構から、本遺跡は一般的な農村集落と考えている。住居のあり方は1～数軒の堅穴住居群が散在し、数棟の小型の掘立柱建物が加わっている。住居の規模は小さく床面積は10～15㎡(6～9畳)が普通で、16号住居址(3.5畳)、30号住居址(5.2畳)などの小型住居もある。22号住居址はやや大型で20㎡(12.1畳)あり、構造もやや異なる。また丸柄も出土しており土器の出土量も格段に多い。特殊な性格をもつ住居址であろうか。

墨書土器はすべて黒色土器や土師器の坏ではぼ住居址1軒に1個の割合で出土している。数百点を数える坏の中にあって今回の10点は少ない。

明らかな転用硯はH26号住居址出土の1点で朱墨が残る。ただし他の灰釉陶器でも見込みが残っているもの6点中5点は磨痕がある。注意が必要だ。

ふいご羽口・鉄滓の出土が集中することから、集落内で特定の家が鍛冶を行っていたことがわかる。前回の調査でも群中の特定の2か所の住居址に製鉄関係遺物が集中した。

鉄製利器の出土は前回のH11号住居址の鎌と今回のH18号住居址出土の刀子様刃器の2点と少ない。鉄器の所有が集落全戸にゆきわたっていなかったのか、あるいは貴重品で大切に伝世されたのか。砥石が3点のもの少ない感がある。

表4 平安時代遺構出土土器一覧表 (単位:cm)

※ 黒・黒色土器 土・土師器 須:須恵器 灰・灰釉陶器 糸切りはすべてロクロ糸切りである。

H13号住居址							H14号住居址													
器種	器形	図番	口径	器高	底径 脚径	底部調整・他	備	考	器種	器形	図番	口径	器高	底径 脚径	底部調整・他	備	考			
黒色土器	環	1	14.6	5.4	5.6	糸切り痕残る			黒色土器	環	18	12.9	4.3	5.9	糸切り痕残る					
		2	13.4	3.9	5.0	"					19	12.0	-	-	不明					
		3	12.3	4.4	5.4	"	完形				20	-	-	6.0	糸切り痕残る					
		4	12.6	4.3	5.6	不明	残70%				-	-	-	8.4	ヘラミガキ	内外面ともにミガキ、黒色				
		5	-	-	6.5	ケズリからミガキ	内外面ともヘラミガキで黒色				-	-	-	-	-	-	小型腹			
		6	13.8	4.8	4.4	糸切り痕残る					21	15.3	-	-	-	-	"			
		7	13.0	4.1	5.4	"					22	-	-	-	-	-	"			
		-	(15.4)	-	-	-					23	20.6	-	-	22.0	-	胴下半ヘラケズリ			
	土師器	皿	8	12.6	-	-			土師器	甕	24	23.0	-	-	-	-	-			
			9	11.3	-	-					25	24.0	-	-	-	-	-			
		環	10	13.9	11.2	13.4	糸切り痕残る	小型器 外面煤多量に付着				26	20.4	-	25.0	-	-	-		
			11	22.6	-	23.4		口縁端やや内傾				27	-	-	-	-	-	-	砲弾形底部	
			12	22.3	-	22.2		"				-	-	-	-	-	-	口縁小片		
			13	24.9	-	24.5						-	-	-	-	-	-	口縁小片		
			14	20.8	-	23.6		胴器壁厚い				-	-	-	-	-	-	-	-	
			15	24.1	-	25.8						-	-	-	-	-	-	-	-	
16	23.4	-	-				-	-	-	-	-	-	-	-						
須	17	-	-	-				灰	碗	-	-	-	-	-	-					
灰	18	-	-	-		肩部片		H15号住居址												
								器種	器形	図番	口径	器高	底径 脚径	底部調整・他	備	考				
								黒色土器	環	28	16.6	5.5	6.4	糸切り痕残る	油椀付着					
							29			13.1	3.5	5.6	"							
							30			-	-	7.7	"	高台付						
							-			-	-	5.8	"	底部片						
								-	-	-	-	-	"	"						

黒色土器	環	—	—	—	—	糸切り痕残る	底部片
		—	—	—	—	ケズリ	〃
		—	13.0	—	—	—	口縁小片
		—	15.4	—	—	—	〃
		—	12.6	—	—	—	〃
	鉢	—	—	—	—	—	〃
		38	24.8	—	—	—	〃
		—	13.1	—	—	—	口縁小片
		—	—	—	—	—	底部小片
		—	—	—	—	—	小型甕
土器	環	31	14.0	—	—	糸切り痕残る	〃 底部
		32	—	—	6.6	—	〃
	33	22.8	—	24.2	—	—	口縁小片
	34	22.8	—	22.2	—	—	底部小片
	35	26.2	—	—	—	—	小型甕
	36	23.5	—	22.8	—	—	〃
	37	23.0	—	—	—	—	〃
	—	22.4	—	—	—	—	口縁片

H16号住居址

器種	器形	器番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考	
黒色土器	環	39	13.5	—	—	—	—	—	
		40	13.7	—	—	—	—	—	
		41	—	—	5.6	—	ヘラケズリ	—	—
		42	—	—	5.4	—	糸切り痕残る	—	—
		43	—	—	5.6	—	〃	—	—
	鉢	—	—	—	—	—	—	高台付	—
		—	—	—	—	—	糸切り痕残る	底部片	—
		—	—	—	—	—	ヘラケズリ	—	—
		—	—	—	—	—	〃	—	—
		—	—	—	—	—	—	口縁片	—
土器	筒	45	21.5	—	—	—	口縁小片	—	
		—	—	—	—	—	—	—	
	46	—	—	4.9	—	ロクロナデ	直接重ね焼き痕あり	—	
灰小壺	47	—	—	9.3	—	〃	—	—	
	48	—	—	5.6	—	糸切り痕残る	—	—	

H17号住居址

器種	器形	器番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考	
黒色土器	環	49	15.0	5.0	5.4	糸切り痕残る	—	略完形	
		50	13.0	4.5	4.9	—	〃	—	
		51	12.8	4.4	6.0	—	ヘラケズリ	〃	—
		52	11.6	4.3	5.0	—	〃	墨書あり 残70%	
		53	—	—	5.6	—	〃	—	—
		54	13.1	—	—	—	—	—	—

黒色土器	環	55	12.0	—	—	—	—	—	
		56	12.8	—	—	—	—	—	
		57	—	—	6.0	—	ヘラケズリ	—	—
		58	—	—	5.0	—	糸切り痕残る	—	—
		59	—	—	5.6	—	〃	—	—
	鉢	—	—	—	—	5.0	ヘラケズリ	底部片	—
		—	—	—	—	6.0	〃	〃	—
		—	—	—	—	—	〃	〃	—
		—	—	—	—	5.0	糸切り痕残る	—	—
		—	—	—	—	5.2	〃	—	—
土器	皿	61	14.3	3.0	6.8	ロクロナデ	高台付	—	
		62	13.8	2.9	6.6	〃	黒色うすい	—	
	60	—	—	5.6	—	ヘラケズリ	小型甕	—	
	63	14.0	—	15.0	—	—	〃	—	
	64	13.5	—	—	—	—	〃	—	
	65	11.7	—	—	—	—	〃	—	
	66	10.2	—	—	—	—	〃	—	
	67	22.9	29.7	24.0	—	胴下半ケズリ からナデ	略完形	—	
	68	21.8	29.4	24.2	—	—	50%復元	—	
	69	24.4	28.0	24.8	—	—	70%復元	—	
土器	須	70	22.8	—	22.0	—	3/4周復元	—	
		71	26.2	—	25.0	—	3/4周復元	—	
		72	24.8	—	22.8	—	—	〃	—
		73	26.6	—	—	—	—	〃	—
		74	—	—	—	—	内面ナデ	胴部片	—
		75	—	—	—	—	〃	〃	—

H18号住居址

器種	器形	器番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考
黒色土器	環	76	13.0	4.2	5.0	糸切り痕残る	—	略完形
		77	—	—	5.8	—	ヘラケズリ	—

H19号住居址

器種	器形	器番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考	
黒色土器	環	78	15.3	5.4	6.6	糸切り痕残る	—	略完形 墨書あり	
		79	15.6	5.7	5.6	—	〃	残75%	
		80	13.6	4.3	5.8	—	糸切り痕残る	残60%	
		81	12.4	4.3	6.0	—	ロクロナデ	残60%	
		82	11.4	3.9	5.4	—	ヘラケズリ	—	
		83	11.4	—	—	—	—	—	—
		84	11.4	—	—	—	ヘラケズリ	—	—
		85	9.8	4.1	4.3	—	〃	略完形	
		86	11.0	—	—	—	—	外面ミガキ	
		87	11.6	—	—	—	—	—	—
88	—	—	5.4	—	ヘラケズリ からヘラミガキ	—	—		

黒	色	環	89	-	-	5.5	ヘラケズリ	大型品	
			-	12.8	-	-	-	-	-
			-	13.3	-	-	-	-	-
			-	14.2	-	-	-	-	-
			-	13.2	-	-	-	-	-
			-	13.8	-	-	-	-	-
			-	13.6	-	-	-	-	-
			-	-	-	6.0	ロクロケズリ	-	
			-	-	-	5.6	"	-	
			-	-	-	5.8	ヘラケズリ	-	
土	器	鉢	-	-	-	5.2	"	-	
			-	-	-	5.4	"	-	
			-	-	-	6.0	"	-	
			-	-	-	6.0	"	-	
			-	-	-	5.6	糸切り痕残る	-	
			-	-	-	6.0	"	-	
			-	-	-	5.8	"	-	
			-	-	-	5.6	"	-	
			-	-	-	4.7	"	-	
			-	-	-	6.2	"	-	
土	師	鉢	-	-	-	6.2	"	-	
			-	-	-	5.0	"	-	
			-	-	-	4.8	"	-	
			-	-	-	5.4	"	-	
			-	-	-	5.0	"	-	
			-	-	-	4.8	"	-	
			-	-	-	5.2	"	-	
			-	-	-	6.5	"	-	
			90	12.8	-	-	-	杯ないし皿の高台	
			91	24.8	-	-	-	高台付と推定	
土	器	鉢	92	23.4	-	24.3	-	-	
			93	24.5	-	25.0	-	-	
			94	27.8	-	-	-	-	
			95	22.6	-	-	-	-	
			96	22.0	-	-	-	-	
			97	22.8	-	-	-	-	
			98	20.6	-	-	-	-	
			99	-	-	6.4	胴下半ヘラケズリ	小型鉢	
			100	-	-	5.8	底糸切り痕残る	"	
			101	12.1	(11.0)	12.4	-	"	
土	師	鉢	102	15.4	19.0	-	外面ヘラケズリ		
			103	13.7	-	-	-	-	
灰	瓶	104	14.8	5.2	7.2	外面ロクロケズリ 底外瀬ロクロナデ	見込みに磨痕あり		

灰	瓶	105	12.2	-	-	-	-	頸片
		106	-	14.8	-	-	-	胴片

H20号住居址

器種	器形	器番号	口径	器高	底径 胴径	底調整・他	備	考
黒	色	107	14.0	5.5	6.0	ロクロケズリ	残65%	
		109	13.0	4.0	5.6	ヘラケズリ		
土	環	110	12.2	3.8	5.4	糸切り痕残る		
		111	-	-	5.4	"		
土	器	108	13.7	4.7	6.1	"		
土	師	112	23.0	-	26.0	-		
		113	21.6	-	-	-		
		114	14.5	-	-	-	小型鉢	

H21号住居址

器種	器形	器番号	口径	器高	底径 胴径	底調整・他	備	考
黒	色	117	11.0	-	-	ヘラケズリ		
		118	-	-	8.0	ロクロケズリ	大型品	
		-	13.0	-	-	-	須恵器模倣か	
土	鉢	119	25.6	-	25.0	胴下半ヘラケズリ		
		120	17.0	-	17.2	"	底部以外完形品	

H22号住居址

器種	器形	器番号	口径	器高	底径 胴径	底調整・他	備	考
黒	色	121	14.6	5.0	6.0	糸切り痕残る	略完形 P1出土	
		122	13.4	4.6	6.2	"	残90%	
		123	13.0	4.2	5.8	"	残85%	
		124	12.8	4.0	4.2	"	残80%	
		125	12.7	5.3	4.8	"	残45%	
		126	15.9	6.6	5.8	ロクロケズリ	残40%	
		127	15.8	-	-	-	-	-
		128	15.2	-	-	-	-	-
		129	13.7	-	-	-	-	-
		土	器	130	14.7	4.6	5.2	糸切り痕残る
131	13.7			4.6	4.6	"	残25%	
132	13.2			4.0	5.2	"	残75%	
133	13.0			3.9	5.0	"	残70%	
134	12.3			3.8	5.1	"	-	
135	12.0			-	-	-	墨書あり	
136	13.3			4.0	5.7	マメツ著しく不明		
137	12.6			3.9	5.2	糸切り痕残る		
138	13.0			4.0	6.0	ヘラケズリ	残70%	
139	12.9			3.7	6.4	マメツ著しい		
140	11.8	3.8	4.0	"				
141	15.8	-	-	-				
142	15.7	-	-	-				

器	土	色	環	143	14.0	3.5	5.7	糸切り痕残る		黒	-	-	-	5.3	糸切り痕残る	
				144	13.5	-	-			色	-	-	-	5.2	"	
				145	-	-	5.2	ヘラケズリ		環	-	-	-	5.2	"	
				146	-	-	4.4	糸切り痕残る	残70%	土	-	-	-	5.2	"	
				147	-	-	6.6	"	高台付	器	-	-	-	5.2	"	
				-	19.2	-	-		体部内湾	95	-	-	-	5.0	"	
				-	17.6	-	-		"	96	-	-	-	4.7	"	
				-	17.3	-	-		"	81	-	-	-	6.0	ヘラケズリ	
				-	16.0	-	-		"	78	-	-	-	7.2		高台付
				-	16.0	-	-		"	97	-	-	-	-		"
				-	16.0	-	-		"	99	要	172	19.8			
				-	15.7	-	-		"	91	鉢	173	19.8			
				-	15.1	-	-		"	98	鉢	148	17.0	-	-	
				-	13.5	-	-		"	123	環	149	13.4	-	-	
				-	12.5	-	-		"	104	環	150	13.0	-	-	
				-	13.2	-	-		体部直線的 深い	106	土	151	25.7	-	-	
				-	17.0	-	-		体部直線的 浅い	89	土	152	24.4	22.8	-	
				-	16.3	-	-		"	92	土	153	23.4	-	-	
				-	14.4	-	-		"	120	土	154	23.2	-	-	
				-	14.0	-	-		"	86	土	155	25.0	24.0	-	
-	13.0	-	-		"	87	土	156	22.4	-	-					
-	12.9	-	-		"	121	土	157	21.4	-	-					
-	12.8	-	-		"	88	土	158	17.2	-	-					
-	12.6	-	-		"	105	土	159	18.6	-	-					
-	-	-	8.5	糸切り痕残る		133	土	160	20.2	-	-					
-	-	-	6.4	"			器	161	19.6	-	-					
-	-	-	6.4	"			器	162	16.6	-	-					
-	-	-	6.2	"	やや突出	136	器	163	20.8	-	-					
-	-	-	6.0	"			器	164	-	-	8.6	底部				
-	-	-	6.0	"			器	165	-	-	10.6	"				
-	-	-	6.0	"			器	167	9.8	9.4	10.4	小型壺 P1出土 残75%				
-	-	-	5.8	"			器	168	11.4	-	12.2	" 口縁内湾				
-	-	-	5.7	"	突出		器	169	-	-	11.2	" 残50%				
-	-	-	5.6	"			器	170	13.4	-	-	"				
-	-	-	5.5	"			器	187	-	-	-	胴外面タタキ				
-	-	-	5.5	"			器	188	-	-	-	"				
-	-	-	5.5	"			器	171	-	-	14.0	高台付				
-	-	-	5.4	"			器	166	34.5	-	-	口縁端内傾				
-	-	-	5.3	"			器	174	-	-	-	把手				
-	-	-	5.3	"			器	175	-	-	-	四耳壺頸				
-	-	-	5.3	"			器	176	-	-	23.0	四耳壺				
-	-	-	5.3	"			器	179	23.6	-	-	広口壺口縁				
-	-	-	5.3	"			器	177	-	-	13.2	P1出土 残80%				

137

須 瓶	178	—	—	7.5	胴部片	P1出土 直接重ね焼き 見込みに磨痕
	180	—	—	13.0		
	189	—	—	—		
	190	—	—	—		
	191	—	—	—		
灰 釉	181	15.8	4.8	8.0	口縁片	P1出土 直接重ね焼き 見込みに磨痕
	182	14.4	4.4	6.2		
	183	16.7	—	—		
陶 器	—	—	—	—	口縁片	P1出土 直接重ね焼き 見込みに磨痕
	—	—	—	8.4		
	—	—	—	—		
瓶	185	13.1	—	—	口縁片	P1出土 直接重ね焼き 見込みに磨痕
	—	—	—	—		
	186	—	—	27.6		

H23号住居址

器種	器形	器番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・係	備	考
黒 色 土 器	瓶	192	16.2	4.9	6.0	糸切り痕残る	残40%	P1出土
		193	15.5	4.4	5.3	"	残85%	"
		194	14.2	4.5	5.5	"	残75%	"
		195	12.9	3.9	4.9	"	完形	"
		196	12.4	3.6	5.0	"	完形	"
		197	12.0	3.7	4.6	"	残65%	"
		198	11.8	3.5	4.6	"	残60%	"
		199	14.4	5.3	7.2	ロクロナデ	高台付完形	"
		200	18.0	—	—	—	—	—
		201	13.7	4.0	5.8	糸切り痕残る	—	—
		202	13.6	4.0	5.0	"	—	—
		203	—	—	4.6	"	—	—
		204	—	—	8.6	ヘラケズリ	—	—
		—	—	—	14.8	—	体部内湾	—
		—	—	—	14.0	—	"	—
		—	—	—	12.0	—	"	—
		—	—	—	12.8	—	体部直線的	—
		—	—	—	—	5.6	糸切り痕残る	—
		—	—	—	—	5.4	"	—
—	—	—	—	5.4	"	—		
—	—	—	—	5.4	"	—		
—	—	—	—	5.0	"	—		
—	—	—	—	4.8	"	—		
205	13.0	3.9	5.0	"	器壁ごくうすい	—		
206	12.3	—	—	—	—	—		
207	—	—	5.0	糸切り痕残る	—	—		

土 師 器	須 瓶	—	12.2	—	—	糸切り痕残る	P1出土
		208	21.4	—	5.0		
		209	22.5	—	—		
		210	20.0	—	—		
		211	19.6	—	—		
		212	21.0	—	—		
		213	19.5	—	—		
		214	21.9	—	—		
		215	—	—	6.4		
		220	—	—	—		
		221	—	—	—		
須 瓶	環	216	15.0	—	—	糸切り痕残る	小型 胴部片 肩部片 胴部片
		217	13.1	—	—		
		218	—	—	6.6		
		219	4.6	—	—		

H24号住居址

器種	器形	器番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・係	備	考	
黒 色 土 器	瓶	221	11.4	4.1	4.0	糸切り痕残る	—	—	
		222	11.4	—	—	—	—	—	
		—	—	—	5.4	糸切り痕残る	—	—	
		—	—	—	6.2	"	—	—	
		—	—	—	5.8	"	—	—	
		—	—	—	4.8	"	—	—	
		—	—	—	—	6.4	ロクロケズリ	—	—
		—	—	—	—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—	—	—	—

H25号住居址

器種	器形	器番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・係	備	考	
黒 色 土 器	瓶	224	12.5	4.0	4.0	糸切り痕残る	P1出土	黒書あり	
		225	13.1	3.0	4.0	—	—	—	
		226	14.6	—	—	—	—	—	
		227	—	—	8.8	糸切り痕残る	—	高台付	
		—	—	—	13.2	—	—	—	
		—	—	—	14.2	—	—	—	
		—	—	—	15.8	—	—	—	
		—	—	—	—	5.6	ヘラケズリ	—	—
		—	—	—	—	5.0	糸切り痕残る	—	—
		223	15.0	4.5	5.4	"	—	P1出土	完形
228	16.6	5.2	7.4	"	—	—	—		

土 師 罫 器	環	229	14.5	-	-			
		-	-	-	5.5	糸切り痕残る		
		231	25.1	-	25.6			
		232	19.5	-	21.2			
		233	10.3	-	10.0		小型罫	
		234	13.3	-	15.0		"	
土 師 罫		235	13.9	-	16.2		"	
		-	-	-	-	平行タタキ	胸下半片	
		-	-	-	-	格子タタキ	"	
須 壺	環	230	13.4	3.3	5.2	糸切り痕残る	残40%	
	壺	-	-	-	-		四耳壺	

H26号住居址

器種	器形	図番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考
黒 色 土 環 器		312	14.6	-	-			
		-	11.6	-	-			
		-	12.4	-	-			
		-	12.2	-	-			
		-	-	-	-	5.4	ヘラケズリ	
		-	-	-	-	5.3	"	
土 師 罫 器		-	-	-	-	5.5	糸切り痕残る	
		-	-	-	-	6.8	"	
		238	22.2	-	-			
		239	27.4	-	28.4		平行タタキ	胸下半片
須 壺		-	-	-	-		ヘラケズリ	"
		-	-	-	-		胴半片	
灰 瓶		237	-	-	6.8	底外ロクロナデ	見込みに磨底	

H27号住居址

器種	器形	図番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考
黒 色 土 器 鉢 罫	環	240	12.8	4.2	5.2	糸切り痕残る		
		241	13.0	4.8	5.6	"		
		242	13.7	3.8	6.2	"		
		-	10.8	-	-			
		243	19.6	8.6	8.4	ヘラケズリ	片口鉢	
土 罫		244	23.0	-	26.6			

H28号住居址

器種	器形	図番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考
黒 色 土 器	環	245	14.9	4.5	7.0	ヘラケズリ		
		246	13.6	4.4	4.4			
	環	247	13.4	3.8	5.2	糸切り痕残る		
		248	12.9	-	-			
土 師 罫		-	-	-	5.0	ヘラケズリ		
		249	20.0	-	-			
		-	13.2	-	-			小型

H29号住居址

器種	器形	図番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考
黒 土 罫	環	250	14.0	3.8	6.4	ヘラケズリ		
	罫	251	14.0	-	5.8	底糸切り痕残る		

H30号住居址

器種	器形	図番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考
黒 土 師 罫 器	環	255	15.2	-	-			
		256	12.0	-	-			
		258	20.1	-	-			口縁端内傾
		259	19.5	-	19.4			口縁端内傾きみ
		260	21.8	-	21.6			
須 壺	環	257	14.2	4.2	7.2	糸切り痕残る	完形	

H31号住居址

器種	器形	図番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考
黒 土 罫	環	261	15.0	-	-			
		262	25.1	-	-			口縁端内傾
		263	22.7	-	-			口縁部長い

SK 32

器種	器形	図番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考
灰 瓶		252	15.7	5.0	6.7	体外ロクロケズリ 底外ロクロナデ	ハケ塗り 見込みに磨底	完形

SK 49

器種	器形	図番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備	考
黒 土 器 鉢 罫	環	253	14.3	4.9	6.0	ヘラケズリ	完形	
		254	14.0	5.1	6.2	"	残40%	

第8章 ま と め

昭和63年に始まった上野遺跡の調査は、今回で4回目となった。常盤平の東端に近い一隅にひっそりとたたずんでいた上野の林地は、国道117号線小沼・湯滝バイパスの開通とともに大きく変貌した。一本の幹線道路の通過が、その地域の景観を大きく変え、豊かな自然が瞬時にして破壊される典型的な例といえよう。

今回の調査は、戸狩工業団地造成のための取付け道路造成と、それに伴う小沼・湯滝バイパスの拡幅工事のための調査であった。上野遺跡は、上野丘陵と称される丘陵全体に及んでおり、面積的には20万㎡を超える当地方最大級の遺跡の一つである。時代的にも旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代と各時代にわたる大複合遺跡である。

調査の結果、各時代の豊富な遺構、遺物が私達の前に姿を現わした。以下、簡単にそれらについて触れてみよう。

旧石器時代関係では、石器群5ヶ所、燧群3ヶ所が発見された。調査のたびごとに地点を異にして、旧石器時代の痕跡が発見されている。このことは、上野丘陵が、旧石器時代人にとっていかに魅力ある場所であったかという証左といえよう。千曲川を挟んでこの地帯の兩岸には、日焼、屋株、瀬付、太子林、関沢、千苜等旧石器時代の遺跡が濃密に分布する。千曲川の果たした役割が、いかに大きかったかを物語っているといえそうである。

旧石器時代の調査のたびごとに、飯山地方における旧石器時代の問題点が望月によって指摘されてきた。今回の調査でも例外ではない。地点を異にして出土した石器群の石材組成の相異をどのように把握すればよいかという問題点がその一つである。この石材組成の相異が果して、時代的相異に基づくものなのか、はたまた石材加工の場所別に基づくものなのかという点である。平成元年度調査の報告書の中で、上野遺跡の代表的石器群とした玉髄石器群を含めて、本遺跡における石器の石材組成のあり方が、時代的相異に基づくものなのか石材加工の場所の相異に基づくものなのかを究明することが大きな課題となっているといえよう。

少量ずつではあるが、縄文時代の土器片が各時期にわたって出土している。現在までの所、明確な縄文時代の住居址やその他の遺構が発見されていないが、土器破片が出土しているということは、この地に縄文時代人が往来したことの証拠であることはいうまでもない。どうも今まで調査した地点以外に縄文時代の居住地が、存在しているといえそうである。特に縄文時代前期については、本遺跡と指呼の間に大倉崎遺跡があり、前期の土器破片が出土していることからみて、その存在は充分考えられるところである。

調査区のはほぼ北端部において、弥生時代中期後半の栗林式土器とその住居址が一軒発見された。出土した栗林式土器は、良好な資料であり、中期後半の姿相究明に大きな役割を果たすことであろう。平成元年度の調査の折に発見された中期後半の住居址群とは、距離的にやや離れている。今回発見された未調査地域に該期の住居址が埋もれている可能性は、きわめて高い。今回発見された住居址を含めて、本遺跡には数ヶ所以上にわたって中期後半の住居址群が存在することは、間違いない。平成5年度の調査では、小泉遺跡に続いて中期後半に所属する木棺墓群が発見されている。木棺墓群と住居址群の関係も、今後究明していかねばならない重要な事柄である。

平安時代についてみれば、住居址19軒、掘立柱建物址、土塚墓、木棺墓が発見された。また、土師器、灰胎陶器、須恵器、フイゴの羽口等が発見されている。住居址は、2～3軒が一群をなし、重複関係は少ない。これらの住居址は、出土土器から10世紀に造成されたものと考えられている。そして、2～3軒の

住居址群を一単位として、数期にもわたって造成されたものと推定される。住居址は、22号を除けば、いたって小型であり2～3人寝るのが精一杯という状態である。特に10㎡以下のものが、3割強を占めていることは注目に値する。支配階級に搾取されながら、貧しさに耐えつづ開拓に従事した農民達の生活を如実に物語っているといつてよいであろう。

地理的環境の項で触れているように、ブナをはじめとして実に多くの樹種が、上野の林地に存在する。低地林としては、樹種の多い珍しい例だといわれている。また、ウド、ワラビ、キノコ、タラの芽等山菜も豊富であり、千曲川を介しての風景も絶佳である。これら恵まれた自然環境と、悠久の昔から居を営んだ私達の祖先が残してくれた幾多の貴重な文化財とをどのように連結させ、地域の活性化に役立てていくかが問われているといつてよいであろう。ただ、いえることは、これ以上の自然環境の破壊はさけ、残された自然をいかに守るか、そして文化財保護という美名のもとに果しなく続く発掘調査。結局は、発掘調査は破壊以外の何物でもない。何故ならば万全に準備された学術調査ではないのだから。このことだけは銘記しておきたい。今のままでは、上野の素晴らしい自然も、地下に埋もれている貴重な文化財も心の通わない白いコンクリートの壁におおいつくされてしまうだろう。便利さということだけで、心の豊かさの依り処である自然と貴重な文化財を売り渡してよいものだろうか。悔いを千載に残さないためにも、今こそ私達は、開発と人間生活の豊かさの調和を大切にすべきであろうと思う。事前に判明している遺跡の調査には、その地のもっている自然景観の素晴らしさを残す努力と、埋蔵文化財との活用を図れるゾーンの設定。更には地域住民の心の依り処となる憩いの場の設定等々考えるべき課題は多い。単に道路が通るから調査した。このような素晴らしい遺構・遺物が出土し、大きな成果を収めたという表面だけの調査に終始し、気がついた時に失なったもの大きさに気付くという愚かさをくり返さないためにも。まだまだ、今回の調査を通して考えるべき課題は果てしなく続くような気がする。調査の一端をになつた一人として責任の重大さを痛感しているこのごろである。

末尾ながら調査にご協力頂いた地域の方々に衷心より御礼申上げ、*まとも*の言葉としたい。

PLATE



遺跡遠望 1986(昭和61)年 鷹打山より



117号バイパス拉幅部の調査 29(Ⅰ)・24(Ⅱ)区 南から



取り付け道路 28(Ⅲ)・29(Ⅳ)区の調査 南から



取り付け道路 18(Ⅴ)区の調査 南から



取り付け道路 8区(B地点)の調査 南から



遺跡見学会 高橋団長の説明



3号礫群
南西から



4号礫群
西から



5号礫群
北東から



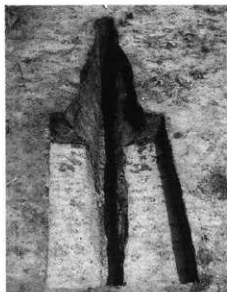
旧石器第7地点
南から



旧石器第9地点
西から



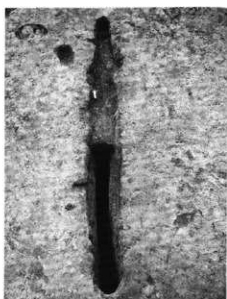
旧石器第9地点中央部
東から



S K25
南から
左 半割状態
右 完掘状態



S K33
北から



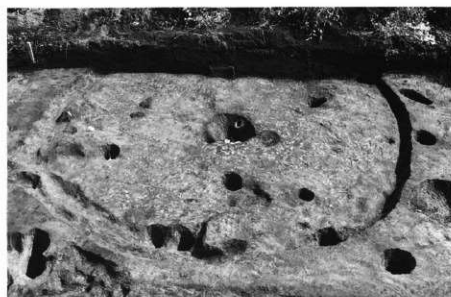
S K42
南から



S K46, 47, 48
南から



Y9号住居址
遺物出土状態
西から



Y9号住居址
完掘状態
西から



SB10
東から

柱穴内遺物出土状態



P4



P6



H13号住居址
南から



H13号住居址
カマド焚き口遺物出土状態
南西から



同上カマド
◀ 南から
南東から ▶



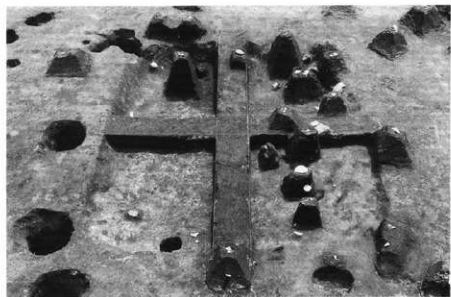


H14号住居址
南から

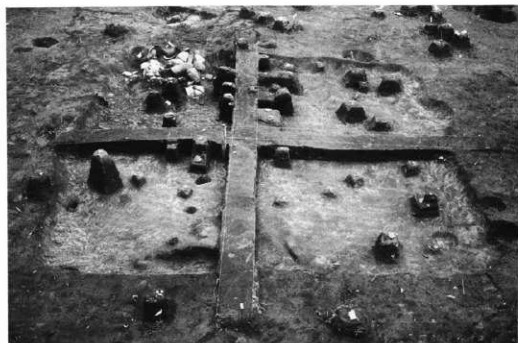


H15号住居址
南から

同カマド 南から



H16号住居址
遺物出土状態
西から



H17号住居址
遺物出土状態
西から



同カマド
遺物出土状態 1
西から



左下 同2 西から
右下 同完掘状態 南西から





H18号住居址
東から



H19・20号住居址
東から

H19号住居址カマド 西から



H21号住居址
北から

同カマド 北から





H22号住居址
上面輪郭
東から



同 完掘状態
東から



同 ビット1
遺物出土状態
北から



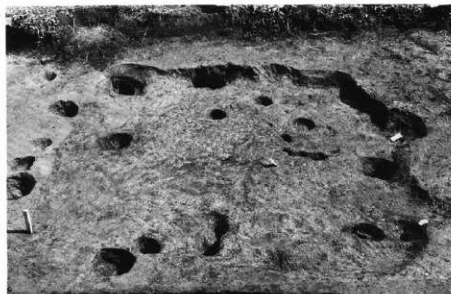
H23号住居址
北から



同ピット1
遺物出土状態
北から



H24号住居址
西から



H25号住居址
西から

同ビット1
環2個出土状態 北から



H26号住居址
南西から



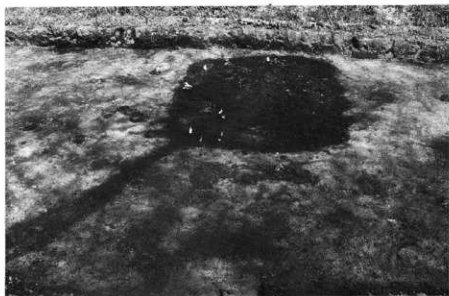
H27号住居址
北から



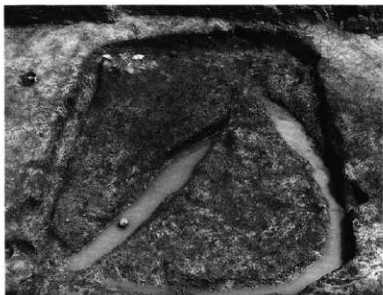
H28号住居址
西から



H29号住居址
西から



H30号住居址
上面輪郭
西から



H30号住居址
西から

同カマド 遺物出土状態 西から

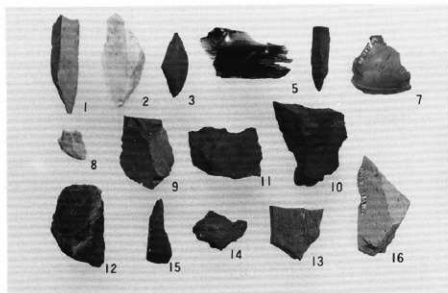


S K32
南東から

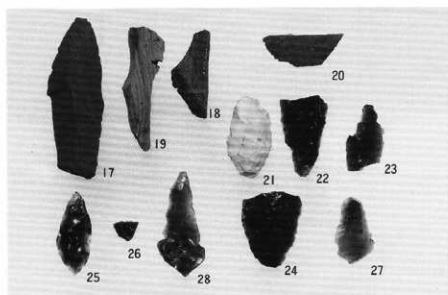


S K49
北から

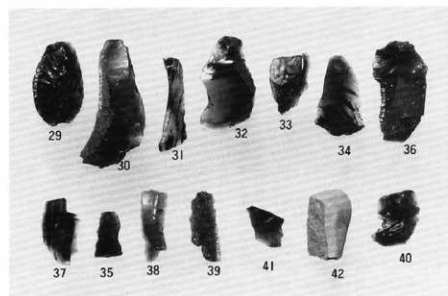
*遺物右下の番号は
挿図の番号と同じ



旧石器
(第1・2地点,
3～5号礫群)



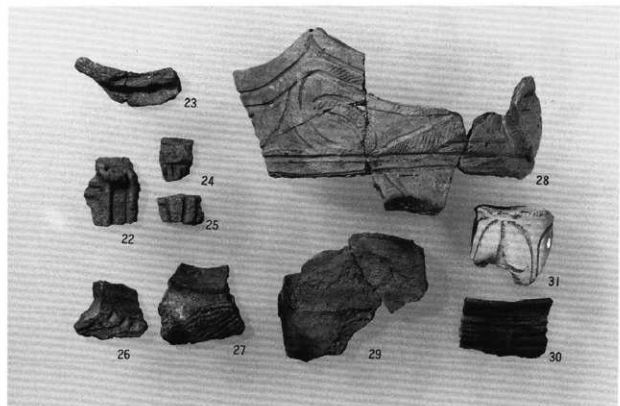
旧石器
(第6～8地点)



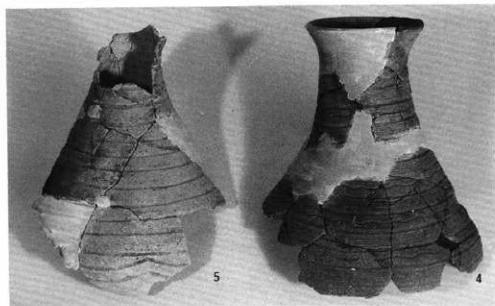
旧石器
(第8地点)



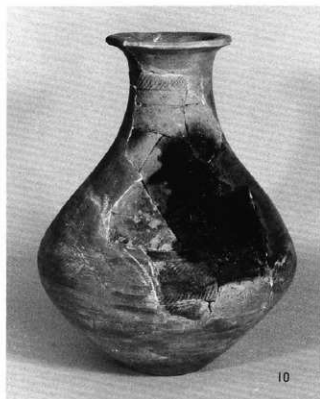
縄文時代早・前期の土器



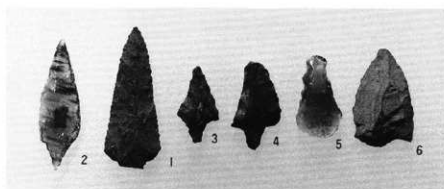
縄文時代前・中・後・晩期の土器



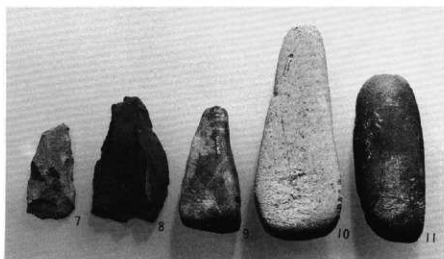
Y 9号住居址
出土土器



S B 10出土土器



弥生時代の石器





6



3



4



9

H16号住居址
出土土器

H13号住居址
出土土器



48

H17号住居址出土土器



52



68



51



50



61



67

H18号住居址出土土器



H19号住居址出土土器



H20号住居址出土土器



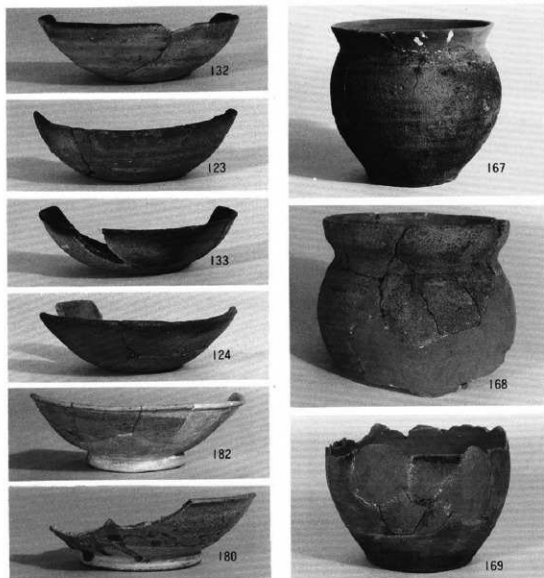
H21号住居址出土土器



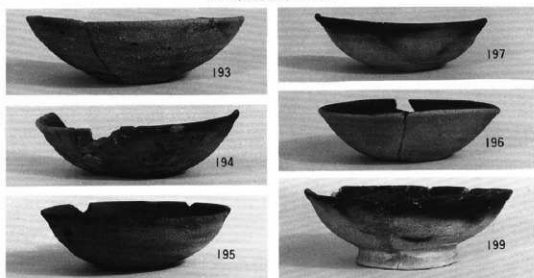
H22号住居址出土土器



H22号住居址出土土器



H23号住居址出土土器



H25号住居址出土土器



H27号住居址出土土器



H30号住居址出土土器



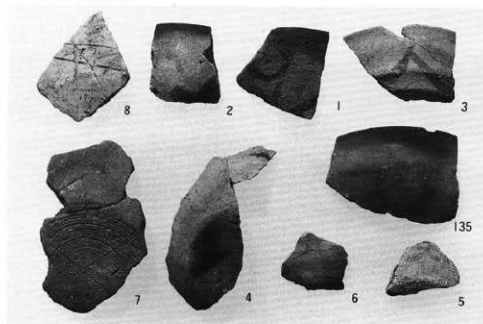
S K32出土土器

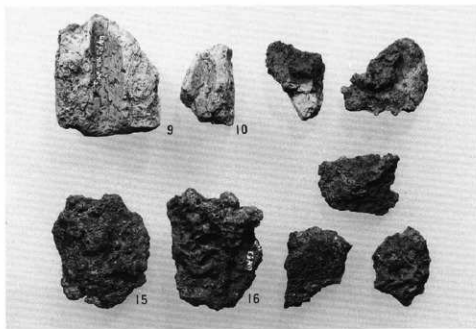


S K49出土土器

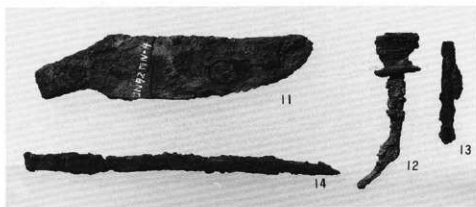


線刻・墨書土器

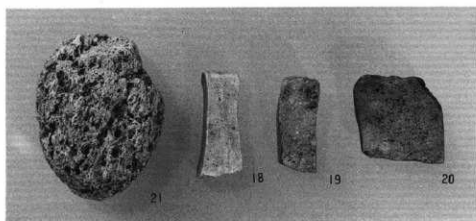




ふいご羽口
鉄滓



鉄製品



石製品



表

裏

飯山市埋蔵文化財調査報告書 第56集

上野遺跡Ⅳ

平成6年2月1日 発行

編集・発行者 飯山市大字飯山1110-1
飯山市教育委員会

印刷所 飯山市大字常盤5733-1
㈲岸田孔版印刷所

